
レインボーガール

めぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レインボーガール

【Nコード】

N4110Y

【作者名】

めぐ

【あらすじ】

七海の願いは、モニター越しに一年も見つめ続けてくれた三次元の彼と、同じ世界でラブライブを送ること。そう、彼女は望月七海は恋愛シミュレーションゲームのヒロイン「だった」。

ある日、七海は奇跡によって三次元の体を得る。だが、彼は三次元化した彼女と恋人になることを拒絶する。

彼の答えに七海は絶望する。しかし諦めない。そして彼女は台本のない世界で、友達から、やがては再び彼の恋人になることを決意する。

*この作品はTINAMIに重複投稿をしています。

プロローグ（前書き）

歌のレインボーガールを聴いていて閃いた、ハーレムラノベの皮を被った自己啓発小説です。主人公（男）にイラツとできない人や、最近の結末を書かないハーレムラブコメに慣れている人が読むと、最悪の場合死亡します。

この作品は全部で八章＋エピローグとなっています。上巻分の四章までは冬コミ前に、下巻分の四章以降は冬コミ後、しばらくしてからR18要素を抜いて投稿予定です。

プロローグ

(ありえない)

目の前の彼女を見て彼が最初に思ったのは、そんなありふれた言葉だった。

「おかえりなさい、雄介さん」

彼女は見慣れた学校の制服姿で、心底嬉しそうな笑顔を浮かべている。

声が出ない。そもそもこの状況ではどんな台詞を言うのが適切なのか、それが分からない。

もし彼女が見ず知らずの誰かだったら、言うべき台詞は簡単だ。

「誰だお前は」と大きな声で怒鳴ればいい。押し殺した声で言うのも悪くない。

しかし彼女は見ず知らずの誰かではない。むしろ彼女のことを、彼は誰よりも知っている自信があった。名前、年齢、通っている学校などは当然として、誕生日や血液型、身長や体重、好きなジュースからスリーサイズまで、なんでも知っている。

もし彼女が遠距離恋愛中の相手だったら、この場合もあまり悩む必要はないだろう。「いつ来たんだ？」と優しい声で聞けばいい。

しかし彼女とは恋人同士かもしれないが、遠距離恋愛をしているわけではなかった。いや、ある意味遠距離恋愛といってもいいのかもしれない。彼女の生きる世界は、とても遠い。それこそ日本とブラジルが目と鼻の先に思えるほど。

もし彼女が過去に付き合っていたことのあるヤンデレ娘だったら、迂闊なことは言えない。慎重に言葉を選ばなければ、背中を見せた瞬間にプスリという可能性もある。

しかし彼女はヤンデレ娘ではない。復縁を拒絶すれば涙を流すくらいはするかもしれないが、ビルの屋上からゴムなしバンジーをするほどではない……はずだ。

もし彼女が幽霊だったら　この場合、どんな台詞が適切だろうか。

これはそこそこに難しい問題だ。見た瞬間、絶句してもおかしくない。ただ、かける言葉がまったく浮かんでこないかといえば、違う。もし自分のせいで死なせてしまったなら「ごめん」と謝罪するしかないし、そうでないなら無難に「ただいま」と言っておけば問題はないだろう。対応はできる。

ならば　もし彼女が二次元の世界の住人だったとしたら？

繰り返し、数え切れないほどの回数プレイした恋愛シミュレーションゲーム。そのヒロインだったとしたら？

突然現れた「元」二次元の女子高生に言うべき台詞など、まったく思いつかない。

が、それでも出てくる言葉というのはある。

ニコニコと笑いながら、彼女は小首をかしげる。そんな彼女を鋭いまなざしで見つめたまま、雄介は机に置いてあるノートパソコンを指差し、叫んだ。

「帰れええええっ！」

一章（前書き）

引き続き警告します。これは歌のレインボーガールを聴いていて閃いた、ハーレムラノベの皮を被った自己啓発小説です。主人公（男）にイラツとできない人や、最近の結末を書かないハーレムラブコメに慣れている人が読むと、最悪の場合死亡します。

この作品は全部で八章＋エピローグとなっています。上巻分の四章までは冬コミ前に、下巻分の四章以降は冬コミ後、しばらくしてからR18要素を抜いて投稿予定です。

一章

最近の彼女は、いつも笑いながら泣いていた。

彼女 望月七海が初めて自我を持ったのは、今から約一年前の夜だった。その日、彼女はなんの前触れもなく自分がデジタルデータ 二次元の女の子だということを理解した。

しかし自我に目覚めたといっても、ゲームに劇的な変化が起きるわけではない。台本通りに行動し、台詞を言う。しよせん彼女はデジタルデータだ。プログラムに逆らうことなど、絶対にできない。しばらくして、七海に小さな変化が起きた。パソコンの電源さえ入っていれば、ゲーム中でなくても彼を認識できるようになったのだ。

だが認識できたところで、なにもできないことに変わりはない。できることは彼がゲームを起動してくれるよう、ひたすら祈ること。それだけだった。

七海の祈りが通じたのか、彼は一度エンディングを見てからも繰り返す。二日に一回程度の割合でゲームを起動してくれた。

嬉しいことはもう一つあった。彼は何度ゲームを繰り返しても、絶対に七海以外の女の子と仲良くなるような選択肢を選ぶことはなかったのだ。

いざゲームが始まれば、七海は元気で明るい、それでいて家庭環境に少しだけ問題がある、そんな下級生を演じ続けた。

何度繰り返しても、クライマックスのシーンでは毎回胸がドキドキした。

七海は思う。できることなら、自分の言葉で彼に気持ちを伝えたい。彼と、もっと色々な話をしてみたいと。

どれだけ繰り返しても薄れることはない。むしろ繰り返せば繰り返すほど、その想いは膨れ上がっていった。

そして今日、七海に三度目の変化が起きた。

眠りから目覚めた彼女が最初に見るものは、いつも決まって彼の姿だった。しかし、その日は違った。

光だ。暗闇の中に赤と緑、二つの小さな光が見える。

(あれは)

普段とは違い電気が消えているが、ここは彼の部屋だ。正面に見える二つの光のおかげで、暗くても七海にはすぐ分かった。おそらく、あれはHDDレコーダーと無線LANルーターに付いているLEDライトの光だろう。

どうやら彼はまだ帰ってきていないらしい。

今は何時だろうか。

「……あれ？」

分からなかった。

部屋が暗くて掛け時計が読めないからではない。いつもなら掛け時計など見なくても、パソコンの内部時計によって時刻を知ることができた。そう、いつも通りならば

「あ

瞬間、炭酸のプールに入ったような刺激が全身を駆け巡る。

自分は今、なにか おそらくは壁 に寄りかかり、座っている。

毎日こうなることを夢見ていたおかげだろう。七海は自分に起きた三度目の変化 自分が三次元化したことをすぐに理解した。

「……やった」

震える声で一言。そしてもう一度、今度は大きな声で。

「いっやっほおおおおお」

叫びながら、握り締めた拳を勢いよく突き上げ

ゴンッ。

「のおおおお」

なにか硬いものを全力で殴ってしまったらしい。七海は生まれて

初めて味わう痛みという感覚にしばし悶絶する。

「くっ……」

すごく痛い。が、本当に三次元化したのだと実感できて嬉しくもあった。何度も実感したくはなかったが。

（とりあえず、明かりをつけよう）

スイッチの場所はなんとなく分かる。自分が寝ている間に突然模様替えをしたなんてことがなければ、HDDレコーダーの上あたりにスイッチがあるはずだ。

立ち上がり、拳を擦りながらLEDライトの光に向かってゆつくりと歩く。途中なにかが足に当たったが、ゆつくり歩いていたので今度は痛くなかった。

明かりをつける。

「っ」

一瞬まぶしさに目がくらむ。が、すぐに慣れた。

白い無地のシートが引かれたベッド。黄色い小さなテーブル。スリガラスの引き戸。小説や漫画がたくさん入ったカラーボックス。エアガンの入ったアタッシュケース。32型ブラウン管テレビ。HDDレコーダーにXBOX360……

間違いない。やはりここは彼の部屋だ。

部屋には見慣れない物が二つだけあった。ノートパソコンとスチールの机だ。すぐに自分はこのノートパソコンから出てきたのだと分かった。よく見ると床に机が少し動いたような跡がある。さっき自分が手をぶつけたのは、たぶんあの机だ。

掛け時計を眺め、あらためて時刻を確認する。

十時四分。そろそろ彼が帰ってきてもいい頃だった。

彼が帰ってきたら、なにから話そう。なにをしてあげよう。ベッドに腰を下ろして足をぶらつかせながら七海がそんなことを考えていると

ガチャリ。

（来た！）

「うるさい！ 黙れ悪霊！」

「ひ、酷い！」

幻覚ならまだしも悪霊だなんて。

「雄介さん、まだ寝ないでください」

七海はベッドの横に座って彼の体をゆする。

「雄介さん、起きてください」

が

「寝ちゃった」

必死のゆさぶりをものともせず、三十秒もしないうちに彼は本当に眠ってしまった。

「……………」

彼の顔を眺め、七海はゆっくりと体を引いた。

どうやら疲れているのは本当のようだ。

「おやすみなさい、雄介さん」

七海はノートパソコンに視線を向ける。

話したいことは山ほどある。だけど、今日はゆっくりと寝かせてあげよう。

時間ならこれからいくらでもある。焦る必要なんてない。これからは好きなときに眠って、好きなときに起きられるのだから。

今日は少し疲れていた。それだけだ。一晩休んで落ち着けば、きっといつものように優しく微笑みかけてくれる。

電気を消し、ベッドに寄りかかる。

布団はいらぬ。

すぐそばに彼がいる。それだけで心の底から暖かくなってくる。そんな気がした。

とくにアラームをセットしていたわけでもないのに、雄介と七海が起きたのはほとんど同時だった。

上体を起こし、ぼんやりと七海を見下ろす。

「おはようございます、雄介さん」

にっこりと笑いながら、彼女は言う。

「……………」

雄介は無言で彼女を見つめた。

別に声が出なくて挨拶が返せないわけではない。もう昨日の夜ほど混乱はしていなかった。

この台詞は聞いたことがある。ゲーム中に何度も出てくる、なんでもない朝の挨拶だ。

雄介さん。彼女　望月七海にそう呼ばれたのも、初めてではなかった。

普通、ボイス付きゲームでは主人公の名前があらかじめ設定されている。変更可能なものもあるが、そうした場合、テキストの表示は変わってもボイスが途切れてしまうのが一般的だ。

自由に設定した名前をヒロインに言わせる方法がないわけでもない。プレイヤーが入力した名前の合成音声をプログラムで作成するか、またはあらかじめ膨大な量のボイスデータを収録しておけばいい。後者はどうしてもカバーしきれない範囲がでてくるが、前者よりも自然な声を楽しむことができる。

そして今から八年前の平成一二年夏、無謀にも日本苗字ランキング一位から七位、名前ランキング一位から二位までのボイスデータを強引に収録し、日本人の約八六パーセント（パッケージにはそう書いてある）の名前をヒロインが呼んでくれるWindows専用美少女恋愛シミュレーションゲームが発売されていた。

メモリアルハート。望月七海がヒロインの一人として登場し、雄介が何度も繰り返しプレイしたゲームがそれだった。

だから彼にとって、七海に雄介さんと呼ばれるのは珍しいことではないのだ。

そう、珍しくはない。パソコンを起動していない状態で、寝起きに、モニター越しではなく目の前で、少し汗をかいた彼女に言われ

ること以外は。

今、なにが起きているのか。

すぐに三つの可能性が浮かんだ。

一、自分はまだ眠っている。

これは夢だ。そう考えるのが一番自然で、解決する方法も簡単に思える。醒めない夢はない。

二、自分はまだ幻覚、および幻聴が聞こえるほどに疲れている。体力に自身はあるほうだが、さすがに二週間休みナシは心と体を相当すり減らしたらしい。まだ九月の上旬で暑い夜が続くというのにエアコンを使わずに寝てしまったため、あまり疲れが取れた気もしない。

三、本当に、望月七海がそこにいる。

どうしてそうなったのか、理由を説明することなどまったくできない。が、目の前に見えるもの、聞こえるものをそのまま受け入れれば、そういうことになる。

さて、当たりはどれだろうか。

順当に考えるなら七割方夢落ちで、残り三割が幻覚といったところか。三番目の可能性は、ほとんどない。あつたとしてもパーセントあるかないか。セガがドリームキャスト2を発売し、それがバカ売れするのと同じくらいにありえない。

体を九度回転させ、雄介はベッドから足を下げるように座った。それを見て、七海はニコニコと笑いながら立ち上がり、隣に座ってくる。

衝撃でベッドが小さく振動する。

その時点で、もう認めるべきだった。しかし、これが夢である可能性を、夢であってほしいという希望を、どうしても捨て切れなかった。

(そう、これは夢だ)

雄介はそう自分に言い聞かせながら七海の頭を両手で掴む。

「えっ……もう、雄介さんったら」

狙いを定め、背中を反らす。

「おはよつのキ」

「ふんっ」

「ふぎゃっ」

手加減ナシのヘッドバットを喰らい、七海の体がベッドに倒れる。夢や幻覚から目覚める方法にはいくつかの定番がある。自己の崩壊がその一つだ。おそらく七海が想像していたであろうキスなどは夢から目覚め『させる』方法であり、自身が目覚める方法ではない。「……痛い」

「あ、当たり前じゃないですか！」

両手で額を押さえ、涙目になりながら七海がつっこみを入れてくる。さつきは若干眠たそうだったが、今のほうが目つきはしっかりしている。完全に目は覚めたようだ。

これで彼女が夢や幻覚でないことがはっきりとしてしまった。

(どうする。どうすればいい?)

「まったく、いきなりなにするんですか」

口を尖らせて怒る彼女を無視し、雄介は考える。

(……分らない)

彼女とは逆に、ヘッドバットを境に脳の回転スピードが一気に下がってしまったような気がする。なにも思いつかない。

「どうしてこうなった」

「奇跡です」

返事を期待したつぶやきではなかったが、七海は答えてきた。

視線を上げ、七海を見る。彼女は嬉しそうに笑っていた。どうやらヘッドバットへの怒りは消えてくれたらしい。

「……ありえない」

「奇跡じゃなかったら、なんだっていうんですか？」

まるでサンタクロースを信じる幼稚園児のような眼差しを向けられ、言葉に詰まる。あまり頭が働かないこともあり、うまい反論も思い浮かばなかった。

ただ、これだけは言える。

理解しがたい現象を表現するのに、奇跡はとても便利な言葉だ。しかし突然望まない出来事が起きたときに使うのは間違っている。一般的に、それは悲劇と表現される。

(どうしてこうなった)

もう一度、今度は胸中でつぶやく。

と

ぎゅるううう。

これまた唐突に、七海の腹から奇妙な音が聞こえてくる。

「……お腹、すきましたね」

あはは、と彼女が笑う。

「飯にするか」

立ち上がり、雄介はキッチンへと向かう。彼も昨日は夕飯を食べないで寝たせいでもかなり腹が減っていた。

(どうするにしても、まずはメシだ)

腹が減っていたり疲れているときは、いくら頑張ってもあまりいい考えは浮かばない。彼はそれをよく知っていた。

「さて……」

毎日決まった朝食というのではない。その日の気分でもいつも違う。

「なにか手伝いますか？」

「お前はあつちで牛乳でも飲んでろ」

そう言っただけで彼女を追い返すと、雄介は冷蔵庫からマヨネーズと卵、そして粗挽きウインナーを数本取り出した。次に食パンの内側を指で押しつぶすと、さらにふちにそってマヨネーズで壁を作る。その中にスライスしたウインナーを並べ、塩コショウ。中に溶いた卵を流し入れるのは最後、オーブントースターの網に食パンを置いてからだ。一度やれば分かるが、先に卵を入れてから網に置くこととすると絶対にこぼす。

蓋を閉め、タイマーを回す。あとは卵がちょうどいい具合に固まるのを待つだけだ。

完成するまでの時間を使ってワインナーを切った包丁や卵を溶いた菜箸を洗って片付ける。今日は弁当を作るのは諦めた。どうにも気分が乗らない。

「……はあ」

壁に寄りかかり、ため息をつく。

しばらくして、終わりを告げる音がキーンと鳴った。

うつすらと湯気の立ち上るトーストを七海の前に差し出すと、彼女は目を輝かせて言った。

「うひゃー、おいしそうですねえ。うーん、いい香り。それじゃ、いただきますーす」

小さな口をいっぱいに向け、七海はためらうことなくかぶりついた。よほど腹が減っていたらしい。もしこれに毒でも仕込んでおいたなら、間違いなく彼女は死んでいただろう。

黄色いちゃぶ台を挟んで、雄介は七海の対面に腰を下ろす。

朝食を取りながら、あらためて彼女を観察する。

黒髪ストレートロング。整っているが完璧なわけではなく、親しみのある顔立ち。一応出るところは出ているが、大きすぎず小さすぎない標準的な体。首にある二つのほくろ。

(……似ている)

どちらかといえばゲームの絵柄がリアル調だったため、こうして三次元化した彼女を見てもあまり違和感を感じることもなかった。一般人より見慣れているとはいえ、もしこれがアニメ調（目が大きく、鼻が異様に小さい）だったなら、こうはいかなかっただろう。

「ごちそうさまでしたー」

瞬く間にトーストを食べきると、七海は「ふう」と小さく息を吐き、幸せそうな顔でお腹をさする。そしてそのまま雄介のことを見つめ

「あ」

雄介の斜め後ろ　おそらく掛け時計を見てなにかに気づいたよ

うな声を上げたかと思うと、彼女はきよろきよろと周りを見渡し始めた。

「えっと、雄介さん」

「なんだ」

「私のカバン知りませんか？」

「……探してどうするつもりだ」

答えはなんとなく予想できていたが、雄介はあえて聞いた。

「どうするって、学校行くに決まってるじゃないですか」

「そうか。で、秋浦高校にはどうやって行くつもりなんだ」

「……………ああ、そっか」

どうやら七海も気づいたらしい。

彼女が通う秋浦高校や生活圈である橋沢市。二人で夕焼けを眺めた美桜山に、巨大なポメラニアンと戦った夏色商店街。それらはすべて架空の場所であり、現実には存在しない。二次元の世界に行く方法を確立しないかぎり、どうやっても学校にはたどり着けないのだ。

「イエーイ、卒業おめでとう、私」

（この場合、中退の間違いではないのか？）

雄介はそう思ったが、わざわざ指摘はしなかった。

たとえ七海に学校がなくても雄介には仕事がある。現実には想像以上にタフだ。店はギリギリの人数で営業している。この程度の非日常では休めない。彼女と会話してられる時間はそう多くなかった。朝食を済ませると雄介は風呂場に向かった。床に寝転がり「毎日がー、夏休みー」などと適当な歌をつぶやく七海はとりあえず放置する。

シャワーを浴び、ヒゲを剃る。接客業をやる人間として、これだけは欠かせない。

髪を乾かし、メッセンジャーバッグから弁当箱を取り出して水に浸す。洗うのは帰ってきてからだ。

「仕事ですか？」

七海が寝転んだまま顔だけをこちらに向ける。

「……そうだ」

「なら、私はお留守番してますね」

ふと、思う。

なんの迷いもなく仕事に行く準備をしていたが、このまま彼女を放置してもいいのだろうか。ここはなんとか仕事を休んで、彼女とじっくり話しをするべきなのではないか。

「……………」

気になることは山ほどあった。が、それほど長くは悩まなかった。靴を履き、ドアを開ける。

「いつてらっしゃーい」

七海の見送りに言葉を返すことなく、雄介は仕事に向かった。

「……………うーん」

雄介を見送った七海は天井を見上げ、考える。

絶対に従わなくてはいけないプログラムはもうない。その代わりに、やることはすべて自分で考える必要がある。

待つことは慣れている。毎日毎日、彼がゲームを起動してくれる瞬間をずっと待っていたのだから。

ただ　ゲームを「起動」してくれる瞬間を待つのはいつものことだったが、こうして彼の「帰り」を待つというのは初めてだった。「なにしよう」

よくよく考えてみれば、学校がなくなってもあまり嬉しくなかったかもしれない。勉強するのは嫌い（という設定）だけど、そもそも学校で勉強するシーンなんかゲーム中に数えるほどしかなかった。それに学校が休みでも、彼と一緒にいられないのなら意味がない。時計を見る。彼が帰ってくるまで最低でも九時間はある。昨日の夜のように待つとしても、少し長い。

部屋の中はとても静かだった。さっき彼が開けたドアが閉まる音を最後に、なにも聞こえてこない。

「よいしょっと」

立ち上がり、とくに理由もなくベランダに出る。

どうやらここはアパートの二階らしい。ベランダの前は駐車場になっっていた。

空は晴れていて、いい天気だ。日当たりも良好。ただ

「暑い」

九月だというのに、まだまだ外は蒸し暑かった。外にいるだけでじんわりと汗が滲み出してくる。設定では清楚な見た目に反してアウトドア派ということになっているが、そのままベランダで日光浴という気分にはなれなかった。

エアコンの効いた室内へと戻り、再びフローリングの床に寝転がる。

「……………」

これといってすることがない。

しかし寝ようとしても、まったく眠くない。さっきヘッドバットを喰らったせいで、完全に目が覚めてしまった。

「…………… やばい」

これまではいつでも彼が目の前にいた。当然だ。彼がパソコンの電源を入れてくれなければ起きることがなかったのだから。

だが、今は違う。

「暇だ」

静か過ぎて気が狂いそうになる。仕事に向かう彼をなんとなく見送ってしまったが、まさか一人がこんなにも退屈だとは思わなかった。

とりあえずテレビのリモコンに手を伸ばす。

チャンネルを回すと3チャンネルでアニメがやっていた。途中からではなにがなんだかよく分からなかったが、暇がつぶせればなんでもよかった。

テーブルに頬杖をついて、ぼんやりとそれを眺める。
アニメを見終わると再びチャンネルを切り替えていく。残念ながら面白そうな番組はやっていなかった。

テーブルに置いたりリモコンを指で軽く弾く。

「……………」

静寂。

ごまかしきれなくなった寂しさと不安が不意に七海を襲う。

おそらく二度と両親に会えないということを感じるとは思わない。元々父親とはあまり仲が良くなかった（という設定だった）し、母親のほうは声も顔も名前すら知らない。ストーリーに絡んでこないので設定やデータがまるでないのだ。寂しいと思うほうがどうかしてる。

友達に会えないのは少し いや、全然寂しくなかった。ヒロイン以外で立ち絵があるのは一人だけだし、ボイスデータしかないクラスメイトに会えなくなっても、別に困らない。

二次元の世界に一ミクロンも未練はない。自分のことをずっと見てくれていたのは彼だけだ。彼さえいれば、それでいい。

なのに今、自分の目の前に彼はいない。それがたまらなく寂しかった。

こつ静かだと、そんなことあるわけがないのについて考えてしまふ。もしかして、彼は自分が三次元化したことを嬉しく思っていないのではないかと。

（そうだとしたら、私はどうすればいいんだろう）

ふと、次々と流れ去っていくCMの一つが七海の目に留まる。それは健康保険のCMだった。保険のことに詳しくない若い男がオペレーターと電話で話し、自分に最適な保険が見つかったと喜んでいく。

「そうか……………」

不安で曇っていた七海の様子がゆっくりと笑顔に変わっていく。

彼女は勢いよく立ち上がると、拳を握り締め、叫んだ。

「これだ！」

一人で考えて分からないなら、誰かに聞けばいい。

多くの恋愛シミュレーションゲームのヒロインがそうであるように、七海もまた恋愛経験が豊富ではない。

しかし彼女たちと違って、七海には三次元の体があった。自分が恋愛初心者だと自覚できるだけの知性を持っていた。そしてなによりも、頼れる味方がいた。

「『恋愛 相談』つと」

七海は検索窓にキーワードを入力し、エンターを軽く叩く。

パソコンの使い方は分かる。七海にとってパソコンは第二の自分のような存在だった。彼が触っているのを見てきたおかげだろう。

インターネットがどういうものなのかも、それなりに理解している。検索結果の中からあきらかに広告と思われるサイトをスルーし、上から三つをタブで開いて見比べてみる。三つとも質問者が悩みを投稿し、それに不特定多数の誰かが答えるという形式のサイトだった。

上から二番目（広告が少なめで、シンプルで使いやすそうだった）のサイトに決め、七海はさっそく投稿する文章を打ち込んでいく。それほど長文でもなかったのですぐに書き終わった。

「ま、こんなもんかな」

一応軽く書いた文章を見直す。誤字などは見当たらない。

『投稿する』と書かれたボタンにTabキーでフォーカスを移動させ、Spaceキーで選択。画面が切り替わり、自分の投稿した文章が表示される。

まだ回答はない。投稿したばかりなので当然だ。

とりあえず三分ほど待ってからリロードする。回答はゼロ件のままだ。

さらに三分待ってからリロードしてみる。だがページに表示されている広告が少し変わっただけで、肝心の回答件数は変わらない。

さらに三分、二分、最後には一分おきにページをリロードしていた。

「うーん」

しかし何度リロードしても、表示されるのは七海が投稿した文章だけだった。

あらためて投稿した文章を読み返してみても、そんなに変なことを書いているようには思えない。

（私の前の相談に回答がついたのが……投稿から一時間経過してからか）

おそらく七海の相談もそれくらい寝かせれば一つくらい回答がついているだろう。

多少時間がかかっても彼が帰ってくるまでに回答が得られれば問題は無い。ないのだが、できればすぐにでも（一言二言の短文でもかまわないので）反応が欲しかった。

「そうだ」

ふと、七海は一つの掲示板を思い出した。

すぐさま別タブを開き、検索。目当ての掲示板はすぐに見つかった。

ニユー速報VIP。

バカな話しかから真面目な話しまで、基本的にはなんでもアリ。自宅警備員から自称東大卒のエリートまで、あらゆる人間が集まって雑談する。彼がたまに見ているサイトの中に、そんな場所があることを彼女は知っていた。

さらにと全体を眺め、何度かリロードしてみる。こんな時間にもかかわらず、そこには期待通りの活気があった。

すぐにさっき書いた相談をコピー&ペーストして投稿してみる。

「早っ」

内容は「2」というなんの意味もないものだったが、投稿してから一分もしないうちに反応が返ってきたことに七海は軽く驚いた。

ここなら退屈しないで済みそうだ。

リロードすると早くもレスが三件も増えていた。内容は「3」「ピザ乙」「スペック晒せや、話しはそれからだ」というものだった。「スペック?」

ピザというのがデブという意味のネットスラングなのは知っていたが、「スペック晒せや」のスペックがいったいなにを指しているのかが分からなかった。このパソコンの性能なら完全に把握しているが、まさかそんなことを聞いているわけではないだろう。

答えは『ネットスラング スペック』で検索してみればすぐに分かった。どうやらスペックとはプロフィールのことのようだ。

一七歳。一五六センチ、四八キロ。八四/五六/八二。美少女

投稿した文章を補足するように自分のスペックを箇条書きで打ち込んでいく。

次に彼のスペックを打ち込もうとして

「……あ」

軽快にキーボードを叩いていた指が完全に静止する。

目を閉じれば彼の顔を鮮明に思い出すことができる。名前だっけ知っている。

が、それだけだ。

身長、体重、年齢、誕生日、血液型、好きな食べ物……。ある程度なら推測が可能な部分もあったが、確信できることはなに一つとしてなかった。

急に不安になって、七海は外に飛び出した。

振り返り、表札を確認する。そこには綺麗な字で守屋雄介と書かれていた。

「……よかった」

名前すら知らなかったらどうしようかと思っただが、さすがにそんなことはなかった。七海はほっと胸をなでおろしながらパソコンの前に戻ってくる。

「よし」

分からないことを悩んでも仕方ない。とりあえず彼の情報（ゲームが好き、目がカッコいい、いつも黒い服を着ているなど）を、分かる範囲で打ち込んでいく。

投稿して、反応をうかがう。

返ってきたレスの大半は「自分で自分のこと美少女とかw」「うわぁ……」「メンヘラ乙」などと否定的なものが多く　　というが、今のところまともな書き込みをする者は一人もいなかった。

「こ、こいつら……」

確かに自分で自分のことを美少女というのは少しアレかもしれない。が、七海は「美少女」恋愛シミュレーションゲームのヒロインだったのだ。このまま好き勝手言わせておくのは彼女のプライドが許さなかった。

なぜか作法は知っていた。メモ用紙を細く折って、そこにマジックでIDを書き込む。次にそれで目元を隠し、ノートパソコンに最初から搭載されていたウェブカムを使って画像を取り込む。最後に保存した画像を適当なアップローダーにあげ、URLを掲示板に書き込む。

「さあ、見やがれ野郎ども」

反応は期待通りだった。「美少女k t k r」「く、くやしい。でもかわいい！」「そんな男より俺と突き合おうぜ」　　と、さっきとは打って変わって肯定的なレスで埋め尽くされる。

「ふっふっふ」

それらのレスを眺めてほくそ笑んだあと、七海は話しを恋愛相談に戻そうとしたが

「まんまんうp!」「いや待て、おっぱいのほうが先だ」「それじゃ次はメモを口でくわえて撮ってみようか」「おっぱい、おっぱい」

七海の書き込みを無視し、彼らは次の一枚を要求してくる。どうやら顔を晒したことで彼らを調子に乗らせてしまったらしい。こう

なってしまうたらどう足掻いても修正は不可能だろう。このままここにいれば暇はつぶれるかもしれないが、建設的な話しはできそうにない。

今になって、ここに集まる人間は「イナゴの大群」だと誰かが言っていたのを思い出した。敵にするとうつとおしいが、味方にすると頼りない。そんな集団だと。

「ん？」

画像うpの大合唱の中、一つだけまともそうなレスが混じっていた。そこにはまず「異性をモノにする方法」と書かれており、男が女をモノにしたい場合はとにかく褒める、まめに電話するなど箇条書きで何個か書かれてあった。そして逆に女が男をモノにしたい場合はというと、そこにはなぜかURLが一行だけ書かれてあった。

アドレスバーにそれを貼り付け、飛ぶ。

そこは掲示板の面白いレスなどをまとめたブログのようだった。ページをスクロールさせると、さっき見た文章と同じものが貼り付けてあった。

いや、少し違う。女が男をモノにしたい場合のところにURLではなく普通に文字が書いてある。

シンプルに一言。ただ、「脱げ」とだけ。

「……………」

七海は拳を握り締め、タブを閉じる。

「ぶっ」

小さくため息をつくとき、七海は時刻を確認する。いつの間にかそれなりに時間が過ぎていた。そろそろ最初に悩みを書き込んだほうにも反応があるかもしれないと思いリロードしてみる。

「おっ」

予想通り、一件だけだがそれなりに長文の回答が書き込まれていた。どうやら色々と（自分が元はゲームのキャラクターだった等）曖昧に書いたせいで、答えにくかったようだ。回答はこんな書き出しで始まった。

「若干情報が不足している&目的が曖昧なので答えにくいのですが、そこはこちらで適当に想像して書き込ませていただきます。まず、この文章だけを読むと相談者様は事前の連絡もなしに彼の部屋へと行ったように読み取れるのですが、どうなのでしょう。もしそうだとしたら、いくら顔見知り、恋人のような関係だとしても褒められるようなことではありません。女性が恋人に会う前に化粧をするように、男にも多少の準備というものがあります。というか、相談者様はどうやって彼の部屋に入ったのでしょうか。まさかピッキングでもしたのでしたら少し怖いです。

彼はいきなりプライベートな空間を犯されたことに戸惑い、怒っています。しかしそれほど心配する必要はないかと。本当に今回の行為が許せないものだとしたら、相談者様を一人部屋に残して仕事に行ったりなどしません。約一年間モニター越しにコミュニケーションを取っていたことから考えて、もしかしたら直接会うことに自信がなかっただけなのかもしれません。今はできるだけ積極的な行動は控え、彼に落ち着く時間を与えてください。相談者様のメイク技術が変装レベルではなく、かつ相談者様が彼への態度を変えることがなければ、いずれ望む関係になることができるでしょう」

「……うん、そうだよね」

七海は天井を見上げ、椅子をくるりと回転させる。落ち着く時間が必要なのは分かっていたが、それが間違っていないと言ってくれる人が（たとえ見知らぬ誰かでも）いてくれるだけでとても安心できた。

「あれ？」

椅子の回転が止まり、ブラウザを閉じようとキーボードに手を伸ばしたところで彼女は気付いた。

「続きがある」

よく見ると回答は終わっていなかった。数行の空白をはさみ、こう続いている。

「いずれ、などと曖昧なことを言わずに今すぐにも彼との関係を

進展させたいのであれば、一つだけ方法があります」

再び挿入される空白。回答の最後はとてもシンプルで短いものだった。

「脱ぐことです」

「お前もか！」

「はあ……」

夜。雄介はアパートの下から自宅のドアを見上げ、今日何度目か分からないため息　深い深いため息を吐く。

昨日までと同じ、綺麗なクリーム色のドアだ。廊下側に窓はなく、ドアを開けるまで部屋の様子を知ることとはできない。

スーパールのビニール袋を片手に提げ、重い足取りで階段を上る。

ドアを開け、部屋に入る。

「あ、雄介さん。おかえりなさい」

椅子をくるりと回し、七海はにっこりと笑う。

雄介は部屋の境界線　引き戸のレールの上で立ち止まり、それを眺める。

帰ってきたら消えているのではないか。彼のささやかな願望はあつさりと碎け散った。

いや、むしろ消えるどころか、たった数時間で七海はこの部屋に馴染んでいた。彼女越しに見えたノートパソコンのモニターにはニコ動画と思われるページが表示されている。

雄介はふと視線をそらしてスリガラスの引き戸に目を向けると、一歩下がってそれをしめる。そして一度深呼吸をしてから、ゆっくりと開ける。

七海は変わらずそこにいて、不思議そうな目でこちらを見つめてくる。

「なにしてるんですか？」

どうしてこうなったのか、雄介は今日一日ずっと考えていた。突然人が一人出現するようなことが起きて、なにも兆候がないのはおかしい。雷が落ちたり、まきますかと書かれたDMが届くとか、そんなきっかけがあってもいいのではないかと。

そして思い当たったのか、普段は閉めない引き戸を昨日はなんとなく 本当になんとかなく閉めたということだった。とても些細なことだし、どうしてもこれがかきつけになるのか説明もできない。しかしこれくらいしか普段と違うことをした記憶がなかったのだが

「……はあ」

「おつかれですか」

「いったい誰のせいだと……」

「えーっと……私、ですか？」

「自覚はあるみたいだな」

再び引き戸に目を向け、それから視線を斜め上に移動させる。一時五分。いつもより少し長い時間スーパで買い物をしていっさいで、もう今日も残り一時間を切ってしまった。

「なにか食べたのか？」

視線はそらしたまま、聞く。

「あ、はい。二時頃にお昼と、七時にもう一度」

見れば冷蔵庫の上に乗せておいた六枚切りの食パンがなくなっていた。おそらく朝に食べたものと同じものを自分で作って食べたのだろう。元々適当にネットで検索して見つけたレシピだし、作ろうと思えば誰でも作れる。

「ただ、一応食べたんですけど……」

あはは、と七海はどうやって憎めない笑顔を浮かべて腹をさする。

「……少し待ってる」

一人分を作るのも二人分を作るのもそんなに変わらない。雄介はバッグをベッドに放り投げ、夕食の準備を始める。

包丁がまな板を軽快なリズムで叩く。今日はまだ米を炊いていな

いが、冷凍庫に一食分ずつラップしたものが保存してある。慣れたものだ、それなりでよければすぐにできあがる。

「いただきます」

七海は野菜炒めを一口食べると幸せそうに微笑む。

次に彼女は雄介の箸先を見つめた。そして視線を合わせてから、大きく口を開く。

「お前は何者なんだ」

聞く。「あーん」要求は当然無視だ。

「……は？」

「いいから答えろ」

「私は……望月七海です」

「それで、お前はあれから出てきたのか」

机に置いてあるノートパソコンを目で示す。

「たぶん、そうです」

「……そうか」

動揺はなかった。これも予想していた答えだ。

もし昨日から今の今まで起きていることをどこまでも現実的に考えたとすれば 望月七海にとてもよく似た何者かがなんらかの手段によって部屋に侵入し、これまた望月七海そっくりの声で自分が望月七海だと主張している ということになる。

(ありえない。そもそも、なんのために)

可能性を想像するだけなら色々とできる。が、どれも非現実的すぎる。ならば自分が何度も繰り返しプレイしたゲームのヒロインがなぜか突然三次元化したと考えるのが、非現実的な可能性の中では一番しっくりくる気がした。

プロというわけではないが、雄介も一応物書きの端くれだった。読者に非現実を納得させる言い訳や方法なら、それなりに知っている。

世の中には科学では解明できていない謎がまだまだある。悲劇はいつも唐突に起きる。歴史や常識といったものは覆されるためにあ

る。絶対など存在しない……

これらの現実と非現実を結ぶ言葉を自分自身に言い聞かせること
によって、雄介はどうにか現状を受け入れることができている。

「あの……」

七海が不安そうに（しかし飯はしっかりと減っていた）聞いてく
る。

「雄介さんは、明日もお仕事ですか？」

「いや、休みだ」

「本当ですか！？ なら」

「明日は買い物に行く。お前もついて来い」

雄介は七海がなにか言い出す前に先手を打つ。

「はい！」

表情を一段と明るくし、七海は鼻歌交じりで食事を再開する。

「……………」

ほぼ確実に勘違いをしている気がしたが、雄介はあえてなにも言
わなかった。

昨日の今日で精神的な疲れが限界を突破しつつある。飯を食べ終
わったら、できるだけ早く寝たかった。

食事を終わると雄介はちゃぶ台の足を畳んで壁際に立てかけ、床
に布団を一枚落とす。今日も暑い。タイマーでエアコンを切るよう
に設定しておけば風邪を引くことはないだろう。

服もそのままに、ベルトだけ緩めてベッドに崩れ落ちる。

「電気は消さないんですか」

「お前が寝るときに消せ」

今の疲れなら、明かりがついていようが関係ない。

まぶたを閉じる。電気はすぐに消され、一瞬の間を空けてベッド
が揺れた。

「……………おい」

どうやらオレンジ色の常夜灯までは消さなかったらしい。横を向
くと、すぐ近くに七海の顔が見えた。

「ちっちゃい電気も消しますか？」

雄介は立ち上がると、一度電気をつけて七海を見下ろす。

「今のうちにこれだけは言っておく。俺がいない時間にパンを食うのもいいしパソコンを使うのもかまわない。だがこれはシングルベッドで俺の所有物だ」

「……………はい」

「分かったらお前はあっちで寝ろ」

床に落とした布団を指差す。

七海は若干のためらいを見せたあと、バレバレの作り笑いを浮かべて言った。

「おやすみなさい」

彼女が布団に包まり、まぶたを閉じる。それを見届けてから、雄介は電気を消し、彼女に背を向けるように眠った。

翌日。雄介と七海は朝食を取ったあと、部屋を出て駅へと向かっていた。

「ねえねえ雄介さん。あの山、ラストに二人で夕日を見た美桜山に似てると思いませんか」

「そうかもな」

雄介は適当に返事をしながら絡みつく腕を無表情で振りほどく。

今日は七海とラブラブデートをするためにこうして歩いているわけではなかった。文字通り買い物目的だ。

電車で揺られること二分。目的地のデパートまで、さらに駅から五分ほど歩く。

「腕を出せ」

雄介は自分のはめていた腕時計を外して七海の腕にはめる。次に茶封筒を渡し、言う。

「一時になったらここに帰って来い。それまでに必要なものをそろえておけ。多くはないが、贅沢をしなければ一通り買えるだけの力ネは入ってる」

水と空気ですら綺麗なものを求めるならカネが必要な時代だ。枕、下着、歯ブラシ、部屋着、生理用品、靴、カバン、敷布団　と、日々を快適に過ごすために必要な物をあげていったらきりが無い。

「一緒には来てくれないんですか？」

「俺には俺で用意がある」

「えー」

不満そうに口を尖らせる七海を放置し、雄介は目的の場所に向かう。

最初に鍵屋へ行って部屋の合鍵を作る。これは五分とかからなかった。次に携帯ショップへ行き、七海に持たせる携帯を選ぶ。

（一番安いのは　）

見れば、ちょうど自分が使っている機種がとても安くなっていた。「……これでいいか」

おそろいになるのは少し気になったが、高いものに変えるほどでもない。

契約を済ませ、携帯のアラームをセットしてあまった時間を本屋でつぶす。

一時になって待ち合わせの場所に行くと、すでに七海は両手に紙袋を持ってそこにいた。

「買った物は終わったのか」

「はい。ただ、マットレスだけ配送してもらおうと思ったんですけど、住所が分からなくて。一緒に来てもらってもいいですか？」

「いいだろう」

寝具売り場に向かいながら、茶封筒を回収して中を見る。

カネと一緒に入っていたレシートを眺める。基本的には賢く買い物をしてきたようだった。ただ、あきらかに無駄な物もあったが。

「これはなんだ」

問題の品を指差すようにレシートを摘む。そこには半角のカタカナで「コンドーム」と書かれてあった。

「……あっ」

それを見た七海は視線をそらし

「えっと、それは、その……」

頬をうつすらと赤く染め、とても恥ずかしそうに言った。

「いずれは必要になるかなーと思って」

「っ」

何度も繰り返しゲームをプレイした雄介でも、こんな表情の彼女は見たことがなかった。

「……そうか」

本当は無駄な物を買うなど怒るつもりだったのに、その表情があまりにもかわいくて、雄介はつい無難な返事をしてしまった。

特にそれ以上の会話もないまま二人は寝具売り場に到着する。

目当てのマットレスを聞き、店員を呼んで翌日には届くようにしてもらおう。なにが楽しいのか分からないが、七海は終始ニコニコと笑っていた。

「お昼はどうしますか？」

「買い物が終わったなら帰る。家に着くまで我慢しろ」

「えー、なにか食べていきましょようよお」

「却下だ」

外食などカネがかかって仕方ない。これ以上の出費は痛すぎる。それに今日は買い物に来たのだ。好感度アップの選択肢を選ぶ気などない。

「あそこのラーメンすごくおいしそうですよ」

「……」

「あっちのカツ丼もお肉が分厚いですね」

「……」

「せめてたこ焼きだけでも！」

すべてを無視し、歩く。雄介は七海が持つ紙袋が少し重そうなのにも気づいていたが、最後まで代わりに持とうとは思わなかった。

自宅に戻って少し遅めの昼食を取ると、雄介は残りの作業に取り

掛かった。

一時間後

「まあ、こんなもんか」

「なんですか、それ」

後ろから七海が覗き込み、聞いてくる。

「原付の免許書だ」

複合機、携帯のカメラ、画像編集ソフト、ラミネートカード製作キット。この四つを使って雄介は七海の顔写真入り免許書を作っていた。何度か本の栞としてラミカを作ったことがあり、まずまずの仕上がりだった。

雄介は凝った肩をほぐしながらそれを七海に渡す。

「これはお前が持つておけ。一般人程度なら通用するだろう。ただしなにかあってもマッポには絶対に見せるなよ。免許書番号なんかは適当だ、調べれば一発で偽物だとバレるからな」

「あ、はい。……あの、マッポってなんですか？」

「警官のことだ」

「へえー、そうなんですか。って、これ犯罪なんじゃ……」

「存在自体が犯罪的な奴が贅沢を言うな」

「……は？」

やはり彼女に自覚はないようだ。

「いいか、よく聞け爆弾娘。お前には『戸籍』がない」

「それが、なにか問題でもあるんですか？」

どうやら彼女には事の深刻さがまったく理解できていないらしい。

「……まあいい」

そもそもすぐに理解しろというほうが無理な話だ。雄介自身、戸籍がないことでどんな問題が起きるのか、すべて想像できているわけでもないのだから。

生きていれば、いずれ問題は向こうからやってくるだろう。それこそ七海が突然現れたのと同じように、唐突に。そして彼女は色々なことを知り、日々変わっていく。食べられなかったニンジンが食

べられるようになり、好きだったモノが嫌いになって　最後には
どうでもよくなる。

「これも渡しておく」

携帯と自宅の合鍵を七海に渡す。

「ネットやメールはいくら使ってもかまわないが、通話ができるだけ控える。いや　好きに使え。どうせカネを払うのはお前だ」

「え？」

「当たり前だろう。自分の携帯代くらい自分で払え。それだけじゃないぞ。今日のレシートは取っておく。あとできっちり返してもら
うからな」

「そんな。私、お金なんて持ってません」

「なら働け。なんのために携帯と免許書と合鍵を用意したと思ってるんだ。できるだけ早めに派遣会社にも登録して来い。俺は食欲旺盛で髪の毛長い黒猫を飼うつもりはないぞ」

「私だって家事ぐらい手伝いますよ。むしろやらせてください」

七海はやる気をアピールするように両手を握り締める。

「家事を手伝うのは当然だろ。そのうえでさらに働けと言ってるんだ」

「えー、そんなあ、いいじゃないですか働かなくても。パソコンばかり触ってて家事をおろそかにするなんてことはしませんから。それに、ほら、家庭を守るのが妻の務めですし」

設定ではアウトドア派ということになっているのに、まったくどうしたもののか。ネットの魔力は彼女を一日で墮落したインドア派へと変えてしまったらしい。

「なにか勘違いをしているようだが、これだけは覚えておけ」

雄介は七海を見つめ、彼女が真剣な表情で見つめ返してくるのを待ってから言った。

「昨日も言ったが、俺がいない間にパソコンを使ってニコニコ動画を見てもかまわない。少しくらい間食しても許してやるし、飯も作ってやる。ただし　」

言葉にする前に、もう一度考える。猶予はどれくらいがいいのか。
「……今年いっぱいだ。それまでにカネを貯めて、ここから出て行
け」

最初はすぐに追い出すストーリーも考えていたが、それはやめた。
追い出された七海の運命を少しだけ想像してみる。

絶望し、自殺するかもしれない。あてもなくさまよう彼女を最初
に呼び止めるのは警官か、スカウトマンか、はたまた女に飢えた一
人暮らしの大学生か。

可能性は色々と考えられる。が、なぜかネガティブなことばかり
考えてしまい、どうしてもハッピーエンドを想像することができな
かった。

ならば今年いっぱい 約三ヶ月でなにか変わるのか。変わるだ
ろう。仕事をすれば少なくとも無一文ではなくなる。

七海は目を見開き、口を半開きにしてこちらを見つめていた。

基本的にポジティブでありながら、落ち込みだすと奈落の底まで
沈んでいく。ただ、ほんの少しの希望さえあれば再び立ち上げれる。
望月七海とはそういう女の子だった。

雄介は誰よりもそのことを知った上で、やはりなにも言わなかつ
た。

「……今年いっぱいだ。それまでにカネを貯めて、ここから出て行
け」

この言葉は七海から一時的に声を奪うだけの十分な魔力が込めら
れていた。

静かな部屋にキーボードを叩く音だけが響く。

二人っきりの部屋で、会話もなく、ただ時間だけが過ぎていく。

どうしてですか？

無言でパソコンを睨み付ける雄介に向かって、七海は何度もそう

話しかけようとして、そのたびに言葉を飲み込んだ。

理由は自分でもよく分からなかった。ただ、なぜだか聞くことができなかった。

「風呂が沸いたぞ」

雄介がそう話しかけてきたのは、寂しい夕食を終えて一時間ほどしてからだった。

それだけ言うと、彼は七海の横を通り過ぎ、椅子に座る。そしてそれ以上の会話を拒絶するように小説を読み始めた。

七海はバスタオルを持ち、脱衣所に向かう。

初めて入るお風呂はとても気持ち良かった。心地よい暖かさに全身を包まれて、すべての不安がほんの少しの間だけ、消えてくれる。

髪を洗いながら、七海は考える。

(雄介さんは、どうしてあんなことを言ったんだろう)

きっとまだ動揺してるだけだ。そんなことはない。彼はもう落ち着いている。

私は嫌われている。そんなことはない。もしそうならすぐにでも追い出されている。

浮かんでは否定される、さまざま理由。いくら考えても結論は出ない。

「……………」

いや

本当は分かっていた。結論は出せないのではなく、出たくないだけなのだ。

彼があんなことを言った理由。その明確な答えが欲しいのなら、直接聞けばいい。

そうしないのは、怖いからだ。彼の口からこれ以上拒絶の言葉を聞かされるのが、七海にはたまらなく怖かった。

パジャマを忘れた。

七海がそれに気付いたのは、脱衣所で水滴が落ちない程度に髪を拭き終えたときだった。

下着もだ。デパートで購入はしたのだが、部屋から脱衣所に持つてくるのをうっかり忘れてしまった。

一応さつきまで着ていた制服と下着はある。ただ、下着を手に取って鼻に近づけてみると、風呂上りの自分とはあきらかに違う香りがした。

七海は下着を洗濯籠に戻し、洗面台の鏡に映る自分の体を眺めた。胸はそれほど大きくはない。ただしウエストが細いため、くびれはある。じっくりと自分の体を眺めるのは初めてだったが、七海に不満はなかった。

いや、それどころか

(彼が見たら、どう思うだろう?)

脱げ。

昨日ネットで見たアドバイスが頭をよぎる。

迷った時間は、それこそ一秒もなかった。

「雄介さん」

「俺は朝でいい」

七海に背を向けたまま、彼は言う。

「いや、そうじゃなくて」

「なら、なん」

読んでいた小説を机に置き、彼は椅子を回し

「!」

七海の姿を唾然とした表情で眺め、言いかけた言葉と一緒に唾を飲み込んだ。

まずは見てもらうことが目的であり、バスタオルは脱衣所に置いてきた。七海はあえて大切な部分を手で隠すようなこともしなかった。

ただ

「あ、あの……」

自分の腰の辺りを抱くように手を回し、視線をそらす。

いまさらになって七海はとても恥ずかしくなってきた。彼女がヒロインを演じていたゲームはPCソフトでありながら全年齢対象であり、合体シーンなどはない。なので彼に自分の裸を見られるのはこれが初めてだった。

「なんのつもりだ」

（ え？ ）

彼がどんな反応をするか、明確に予想を立てていたわけではない。ただ、あきらかに苛立ちを含む声でそう聞いてくることは、やはり予想外だった。

さっきまで火傷しそうなほどに熱かった体が急激に冷めていく。全力疾走をしていたところをいきなり驚づかみにされた心臓が、とても痛い。

「先に言っておくが、借金の返済は現金でしか認めるつもりはない」

「そんなつも」

「分かったらさっさと服を着ろ」

七海の言葉を遮って、雄介は半分怒鳴るような声で言った。

互いに視線をそらすことなく、しばし無言の時間が流れる。

静寂を終わらせたのは七海だった。

「……………どうしてですか？」

ずっと喉の奥で立ち止まっていた言葉をなぜ吐き出すことができたのか。

さっき彼が振り向いたときに見せた動揺。それが七海をわずかに勇気付けた。逆にあのときの動揺があとコンマ一秒でも短かったら、きつと言えなかった。

「雄介さんは、私のことが嫌いですか？」

「……………」

彼は答えない。それでも視線だけはそらさなかった。

沈黙は否定と同じだ。無言の時間が続くほど、七海の体に再び熱が戻ってくる。

(やっぱり、雄介さんは私を嫌っているわけじゃない)

なのに、どうして彼は私を拒絶するのだろう。七海にはそれがどうしても分からなかった。

しばらくして、彼はずつと見つめ合っていた視線を一瞬そらし、観念したように小さく息を吐く。そしてさっきまでとは違うどこか哀れむような眼差しを七海に向け、言った。

「俺が好きなのは二次元の望月七海だけだ。お前じゃない」

分かってしまえば答えは単純にして明快、それでいて複雑で怪奇なものだった。

「そんな……嘘ですよね？」

その答えは色々と辻褃が合うようで、そもそもどうしてそんなことを考えるのか、毎日毎日三次元化して彼と同じ世界で生きたいと願っていた七海には理解できなかった。

「どうしてそう思う？」

彼は逆に聞いてくる。

「だって、そうじゃないですか。二次元の私と三次元の私と、なにが違うっていうんですか。いや、そうじゃなくて。同じ私なら、三次元のほうがいいに決まってるじゃないですか」

((現実世界—三次元)) には二次元にはない ((喜び—奥行き)) がある。愛する人と触れ合うことができる。彼女にとって、次元とはそんなすばらしい世界だった。それなのに

「三次元のほうがいいなんてありえない」

あっさりと、当然のことだとも言いたげに雄介は否定する。

「どうして！」

「二次元の女になら、電源とモニターさえあれば会いたいときにいつでも会える。永遠に劣化しない。ただ眺めているだけでも癒される。それに比べて三次元の女なんて、疲れているときにかぎって呼んでもいないのに会いにくる。風呂に入らなければ体は臭くなるし、歳を取れば劣化する。飯を食わなければ生きていけなくて、そもそも存在するだけで場所を取る。永遠に愛することを誓っても、すぐ

に忘れる。深く関われば関わるほど幻滅するばかりだ。三次元の女にいいことなんて一つもない」

七海は口を開いたが、どう反論していいか分からず空気だけを吐き出して口を閉じる。

「分かったらさっさと服を着て寝ろ」

そう言つと、彼は椅子を回して七海に背を向け、再び小説を読み始める。

もうなにを言っても、きっと彼は無視するだろう。

それでも、これだけは伝えておきたかった。

「私は……どんなことがあっても雄介さんを嫌いになつたりはしません」

返事は期待していなかった。しかし七海がパジャマに着替え終わったころ、彼は背を向けたまま、ポツリと言った。

「お前もすぐに気が変わるさ」

二章（前書き）

引き続き警告します。これは歌のレインボーガールを聴いていて閃いた、ハーレムラノベの皮を被った自己啓発小説です。主人公（男）にイラツとできない人や、最近の結末を書かないハーレムラブコメに慣れている人が読むと、最悪の場合死亡します。

この作品は全部で八章＋エピローグとなっています。上巻分の四章までは冬コミ前に、下巻分の四章以降は冬コミ後、しばらくしてからR18要素を抜いて投稿予定です。

二章

「雄介さん……」

「七海……」

肩を掴まれ、七海は優しく床に押し倒される。

二人はしばし見つめ合うと、ゆっくりと体の距離を縮めていく。

彼の唇が軌道をそらし、七海の耳の横に下りてくる。

「愛してる」

瞬間、体の奥から幸せがあふれてくる。

七海は彼の背中に腕をまわし、ぎゅっと抱きしめる。

そのまま横に転がると、今度は彼女が上になる。

一度体をそらして、再び見つめ合う。

「私も、愛してます」

彼の心がピクリと反応し、三枚の布越しにそれが伝わってくる。

「んっ……」

これから起こることを想像すると体が火照って仕方なかった。ほんのわずかな刺激でも背中が反り返ってしまう。

「はあ……はあ……」

七海はうつろな目で彼を見つめる。

今度こそキスをするつもりで、七海はゆっくりと顔を近づける。

彼は微笑みながら、それを受け入れるように彼女の頭を両手で掴む。

そして

「起きて」

「えっ？」

彼の表情が不意に真面目なものに変わる。

「ふんっ」

「ふぎゃっ」

目覚めのキスならぬ目覚めのヘッドバットを喰らい、七海の頭が

床を跳ねる。

「くっ〜」

「いつまで寝ているつもりだ。お前が休みでも俺には仕事がある。目が覚めたらならちゃぶ台の用意をしておけ」

そう言うと、彼は七海を放置してキッチンへと行ってしまった。

七海は額と後頭部をさすりながら上体を起こす。

窓に目を向ける。当然のことだがカーテンの向こう側が明るい。

(夢、か……)

できればもう少しだけ続きを見たいところだったが、残念ながら完全に目が覚めてしまった。

(ヘッドバットのおかげかな?)

たぶんそうだ。昨日は彼とほぼ同時に起きたのでヘッドバットを喰らわなかった。

「よし」

気合を入れて立ち上がると、まずは巻き寿司のような状態になっていた布団を綺麗に畳む。次に折りたたみ式のちゃぶ台の足を広げ、今まで自分が寝ていた場所に配置する。

「なにか手伝うことはありますか？」

自分が作ります とは言わない。いずれはなんでも作れるようになる予定だが、今はまだなにも作れない。一応昨日食べさせてもらったものはネットでレシピを見つけたので作れる。が、上手には作れない。というか、昨日は二回も卵を床にこぼして後片付けが大変だった。

「あつちで待つてる。お前は後片付けをやれ。用意は手伝わなくていい」

手伝うことがないのなら無理に手伝おうとしても邪魔になるだけだろう。

部屋に引き返すと、朝食ができあがるのを待ちつつ、七海は考える。

彼は、なぜ自分を拒絶するのか。

昨日の夜、答えを聞いた。三次元より二次元のほうがいい。どう

してそんなことを言うのか、すぐには理解できなかったが、寝るま
では理解した。

だが 納得はできなかった。

確かに三次元にも悪いところというか、多少面倒な部分があるこ
とは認める。長い髪の水気を取るのは一苦労だし、洗うのはもつと
大変だった。定期的にお腹は減って、食べたら今度は出したくなる。
暑いと汗が出るし、動けば疲れる。机を殴ればすごく痛いし、ヘッ
ドバットを喰らえばもつと痛い。

嫌なことは多い。だが良いことだってある。お風呂に入ったとき
に感じた心地よい暖かさやキッチンから漂ってくるおいしそうな匂
いは二次元にはないものだ。そして彼女にとつてなによりも大切な
こと 愛する人と触れ合えるのは三次元だけだ。

もつと自分に触れて欲しい。手を繋いで一緒に歩きたい。頭を優
しくナデナデして欲しい。いずれは今朝の夢の続きもしてみたい。

そのためには、どうすればいいだろうか。

「餌ができたぞ」

言いながら、彼が朝食の盛られた皿をちゃぶ台に置く。そのまま
彼は七海の対面に腰を下ろすと、テレビをつけ、彼女を気にするこ
となくマイペースにサラダを食べ始めた。

「……………」

「なんだ」

視線はテレビに向けたまま、やや遅れて彼の表情がわずかに険し
くなる。見れば、テレビの天気予報は降水確率40パーセントとい
う微妙な数字を表示していた。

「……………」

彼の横顔に視線を戻し、七海は考える。

（もし頭をナデナデして欲しいと頼んだら、雄介さんはどう反応す
るだろう？）

彼は二次元のほうが良いとは言ったものの、三次元の望月七海が
嫌いだとは言わなかった。なにより彼は優しい。最初は拒否したと

しても、一生懸命お願いすれば、たぶん最後にはしてくれるような気がした。

そう信じるだけの根拠ならある。彼は犯罪と自覚しながらも偽造の免許書を作ってくれた。欲しいと願ったわけではないが、持っていて損はしないだろう。ヘッドバットを喰らった額はもう痛くない。痛みが消えるまでの時間が最初に喰らったときより短かった。

きつとこの前より手加減してくれたのだと思う。期待していた優しさとは少し違うけど、それでも彼が優しいことには変わらない。

「……………どうした？」

視線をこちらに向け、彼が聞く。表情は険しかったが、見ようによつては心配しているようにも見えなくはない。

「食わないのか。毒が心配なら俺が食つてるのと交換してやるぞ」

「いや、そういうわけじゃなくて……………」

頼めば、彼に頭をナデナデしてもらえる。

しかし

「いただきます」

七海はにつこりと笑ってから、スプーンでスクランブルエッグをすくい、口に運ぶ。

もし、どれだけ頼んでもダメだったら。一晩寝て昨日より冷静になれた代わりに、積極的に攻める勇氣はどこかに消えてしまった。

(……………どうしよう)

彼はしばらく七海を見つめてから、なにも言わずに視線をテレビへと戻した。

サラダを食べながら、七海も自然とテレビを眺める。

さっきまで天気予報を放送していた朝のニュース番組が今度は星座占いを流し始める。

どうやらこの局はその日一番不幸な星座を残して、悪いほうから発表するらしい。七海はみずがめ座だ。11位から9位までには入っていないかった。

(雄介さんの運勢は……)

そこで思い出した。自分は彼の誕生日を知らないことを。

「雄介さんの星座は、なんですか」

これは、聞ける。特に怖くはない。

「ふたご座だ」

彼は無視することなく答えてくれた。

テレビには8位から6位までが表示されている。ふたご座もみずがめ座も、まだ出てきてはいない。

画面が二度切り替わり、2位までが表示され、一言アドバイスが読み上げられる。二人とも、まだ出てこない。

「それじゃ、今日一番ラッキーな星座を発表するよ」

アナウンサーが軽快な声で言った。

「今日一番ラッキーなのはみずがめ座。やったね。オレンジ色のものを身に着けて意中の人と積極的に会話をすれば、今まで知らなかったことが分かって一気に距離が縮まるかも」

(やった!)

きっと自分が最下位だと思っていただけに、この結果は純粹に嬉しかった。

「そして今日一番アンラッキーなのはふたご座。残念。なるべく黒いものは身につけないようにして、できるだけ静かに過ごすといいかも」

それを聞いて、彼はどうでもいいといった感じで鼻で笑った。そして皿に残っていた朝食を平らげると、着替えを持って脱衣所に向かった。

七海は部屋の隅に畳んでおいた制服に視線を向ける。

「……よし」

占いのアドバイス通り、今日は積極的に話しかけてみることにしよう。偶然にもオレンジ色だった制服のリボンを眺め、彼女は思う。最後のトマトを食べ終わると、手早く後片付けを済ませる。彼は昨日の朝、一分と風呂場にいなかった。ゆっくりとしている暇は

ない。

顔を洗い、パジャマから制服に着替え、彼を待つ。
と

ピンポン。

「毎度お世話になっております、白猫便です」

「はい、今開けます」

扉を開け、荷物を受け取る。それは昨日配送を頼んだマットレスだった。伝票に『守屋』と書くと、なんだか結婚したみたいでもわず顔が緩んでしまう。

マットレスを部屋まで運び終わったところで脱衣所のほうから扉の開く音が聞こえた。

「届いたのか」

彼が髪をタオルで乾かしながら言った。

「はい。それで、これはどこにしまえば？」

「ベッドの下にでも置いておけ」

隠すように垂らしてある緑の布をめくると、ベッドの下には圧縮袋に入った冬用の掛け布団が収納してあった。エアガンや小説が詰め込まれたカラーボックスがいくつも置いてある部屋の中で、ベッドの下にはそれしかない。マットレスはなんとか入った。

「雄介さんって、えっちな本とかどこに隠してるんですか？」

七海は積極的に聞いてみる。

「そんなもんはない」

彼はまたも無視せず答えてくれた。やはり今日は運がいいのかもしれない。

えっちな本を持っていないというのはたぶん本当だ。彼がパソコンを使ってどんなサイトを見ていたか、七海はすべて知っている。偶然見てしまうことはあっても、彼は自分から積極的にえっちなサイトを見ることは一度もなかった。

「とりあえず新しくカネを渡しておく。これは飯や交通費に使え。あとできつちり返してもらうが、あまり無駄使いはするなよ？」

いつの間にか机に置かれていたコンドームの箱を指で叩きつつ、
彼が言う。ふと今朝見た夢を思い出すが、恥ずかしいというよりは
なんだか寂しかった。

「……はい」

「それと部屋を出るときはちゃんと鍵を閉める。分かったな」

「えっと、今日は一緒に出てもいいですか？」

「……好きにしる」

外に出ると、空は降水確率40パーセントが嘘のような雲ひとつ
ない快晴だった。

「閉めておけ」

雄介はそう言うのと七海を待たずに歩き出す。

階段を降りて少し進んだところで七海は追いついてきた。

歩きながら、彼女が言う。

「ねえねえ雄介さん」

「なんだ」

「雄介さんっていくつなんですか？」

「……二四だ」

答えると、七海は「七歳差かぁ」とつぶやきながらしばし空を見
上げる。

最初、唐突に歳を聞いてきた意味が分からなかったが、続けて誕
生日を聞かれて理解した。駅までの道を並んで歩きながら、彼女は
今朝の占いのアドバイス通り、積極的に色々なことを聞いてきた。

「雄介さんの好きな物ってなんですか？」

「コーヒー」

「なら嫌いな物はなんですか」

「……虫だ」

「じゃあじゃあ、どんな料理が好きですか？」

「直感に頼らず、分量を守り、意味の分からない隠し味を入れず、レシピ通りに作った料理だ」

ふと母親が作る料理の味を思い出し、眉間にシワがよってしまふ。学校の給食が至高の一品に思えるほど、母親の作る料理は不味かった。

「ところで、今日も黒い服を着てますけど、いいんですか？」

「……どうでもいい」

占いなど信じていないし、たとえ今日から信じることにしたとしても、どうしようもない。持っているＴシャツはすべて黒地が基本だ。Ｙシャツにも同様ににかしら黒で模様が入っている。黒を身につけないなど不可能だった。

「それに、運なら三日前の夜から地に落ちてる」

「……えーっと、そうだ、雄介さんって仕事はなにをしてるんですか？」

「……………」

「雄介さん？」

上手く理由は説明できないが、この質問にはなんとなく答えたくなかった。

このまま無視をして会話を終わらせてもよかった。が、雄介は逆に一つだけ聞いてみる。

「お前はどうするんだ？」

「私、ですか？」

小首をかしげ、七海は腕を組んで「うーん」と唸る。

「まあ、悩んだところで結局は派遣の仕事でもすることになるだろうがな。けん玉が得意でも就職には役に立たん」

派遣以外で仕事をするとしたら、なにをすることになるだろうか。雄介は考える。

ぱっと思いついたのがアイドルだった。七海はかわいい。それは間違いない。

しかし彼女は望月七海だ。もしテレビに出るようになれば、誰か

が気付く。

アイドルが無理だとしたら受付嬢　も無理だろう。彼女には偽のIDしかない。受付嬢を必要とするような会社に就職するのは厳しい。

そうなるとウエイトレスあたりが妥当なところか。メイド喫茶の店員なら、特技のけん玉も一発芸として役に立つかもしれない。

「あつ、そうだ。ハツカーとかどうですかね？」

「いいんじゃないか」

雄介は適当に肯定しておく。彼女がどんな仕事をしようが　手っ取り早く稼ぐために体を売るなどと言い出さない限り　好きにすればいいと思っていた。

「で、雄介さんの仕事ってなんなんですか？」

「ノーコメントだ」

「えー、教えてくださいよお」

無視して歩く。もう駅のすぐ近くまで来ていた。

「……ケチ」

七海がつぶやく。

ふと胸に小さな痛みを感じたが、それも無視する。

七海一人でも問題なく切符を買える。そのことは昨日デパートへ行くときに確認した。雄介は *suica* を使って一足先に改札を通ると、一人ホームへと向かった。

猫の森という店名に深い意味はないらしい。

店の名前だけ聞くと猫を売っているようにも思えるが、実際に扱っている商品は主に同人誌がメインだった。商業マンガなども一応扱っているが、同人誌に比べれば数は少ない。雄介はそこで働いていた。

雄介が職場に向かって歩いていっていると、途中にあるコンビニから出てきた童顔の美少年と目が合った。

美少年は片手を挙げ、言う。

「おーっす」

「風邪は完全に治ったのか？」

聞く。すると美少年は待つてましたと言わんばかりの笑顔になって、少し前にニコニコ動画で流行った台詞で答えた。

「大丈夫だ、問題ない」

日常会話になんのためらいもなくニコニコ動画のネタを混ぜてくるこの美少年　長月北斗は雄介の同僚だ。雄介が二週間休みナシで働く羽目になった原因でもある。

「インスタントの飯ばかり食ってるから体が弱るんだ。少しは自炊しろ」

「はいはい。そんなことより先週のもどマギだけどさ　」

二人は適当にアニメのことなどを話しながら店に向かった。

店は三階建てのビルの二階にあった。ビル自体は電車で一五分、駅からは徒歩で三分の所にある。

少し奥にある狭い階段を上り、鍵を開けて店に入る。

荷物をバックルームに置いて、エプロンを装備し、店の外　階段と店の入り口を結ぶ短い廊下に準備中と書かれたポールを設置する。

二人で開店準備を進めていると、しばらくして三つ編みお下げに丸めがねを掛けたいかにも図書委員といった感じの美少女が現れる。

「おはようございます」

「やっほー」

につこりと笑い、北斗が挨拶を返す。

「おはよう」

北斗ほど大げさではないが、雄介も一度手を止めると、微笑を浮かべて挨拶を返す。

彼女　鈴木恵理子も同僚の一人だ。今日は前半この三人で店を回し、店長は後半から来る予定だった。

「あの、守屋先輩」

彼女は店の入り口に立ったまま、少し困ったような声で雄介を呼

び止める。

「どうしたの？」

「アルバイトの面接を受けたらって人が来ているんですけど……」
そう言うと、彼女は店の外にちらりと視線を向ける。雄介の場所からはそこにどんな人物がいるのかは見えなかった。

今日は面接の予定は入っていなかったはずだ。連絡もナシに突発的に来た人間に軽く不安を覚えるが、雇用するかどうかを決めるのは自分ではない。それに今は贅沢を言っていられる状況でもなかった。鈴木は九月（もう今月だ）に大学を卒業予定で、すでに就職も決まっている。すぐにも新しいバイトが入らないと、かなり厳しい。

「分かった。じゃあ俺が店長を呼んでくるから、鈴木さんはその人をバックルームに案内しておいて」

店長は三階の倉庫兼自宅に住んでいる。一階はゲームショップでこの店とは関係ない。雄介はほとんど店長代理といってもいいくらいの仕事をしてきたが、面接だけは絶対に店長がやることになっていた。

「ちなみに、どっち？」

「女の人です。でも、すごく、かわいい人です。ちよっと、悔しいくらいに」

ここのバイトは男女で受かる確率が大きく違った。彼女もそれをよく分かっていて、雄介のあいまいな問いにも戸惑うことなく答えた。

「それじゃ、バックルームで少し待っていていただきたいので、ついてきてもらえますか」

しかし、悔しがるほどにかわいい女の子とはどんな子なのだろうか。雄介は彼女と入れ違うように店を出て

「！」

一瞬、雄介の心臓が確かに止まった。

そこにいたのは悔しいくらいにかわいい女の子だった。百人に聞

けば、九八人は間違いなく美少女と答える、元女子高生。

「ち、ちよつと待った」

「はい、なんですか」

「やっぱり、鈴木さんが店長を呼んできてもらってもいいかな」

「分かりました」

彼女はなにか不審に思うような素振りも見せず、階段へと向かった。店長の寝起きはあまりよろしくない。最低でも五分は戻ってこないだろう。

雄介は面接希望者をバツクルームに連れて行くと、大きなため息を吐き出した。

「はあ」

次に面接希望者を睨み付け、言う。

「なんのつもりだ」

「いや、なにかいいアルバイトはないかな」と探してたら偶然ここを見つけて」

「……………」

雄介はあえてなにも言わず、ただじつと見つめ続けた。彼女はそれから逃れるように視線をそらす

「…………準備中のポールを越えて店の中を覗いてたら、突然後ろから声を掛けられて。怒られると思ったんですけど、壁に張ってあったバイト募集の紙を見つけて、つい…………」

しばらくして、無言の圧力に屈した彼女はあっさりと白状する。

どうやってこの場所を知ったのかは聞かないでも想像ができる。

尾行してきたのだろう。昔だったら間違いなく気付けた自信があったが、まったく衰えたものだと思う。

いや、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「帰れ」

いくら人手が足りないからといっても、彼女をここで働かせるわけにはいかない。

「ええっ。そんな、いいじゃないですか。面接くらい受けさせてく

「ださいよ」

「ダメだ」

「仕事しろって言ったのは雄介さんなのに……」

七海は口を尖らせ、不満そうな目で雄介を見つめてくる。

「どうしてですか？」

「……………」

面と向かって聞かれると、困ってしまう。

実際に働いてみたら不都合なことは色々と見えてくる気がする。

が、今のところ彼女をここで働かせたくないのは「なんとなく一緒に働きたくないから」という漠然とした理由しかない。

「ねえ、どうしてなんですか？」

論理的に納得させられるだけの理由が思いつかない。

「雄介さん！」

「ああもう分かった、分かったから。とりあえず大きな声は出すな」
今すぐに帰すことは諦め、彼女を落ち着かせる。

（まったく、どうして占いの結果が少し良かったくらいでこんなにも強気になるんだ）

ふと、雄介は昔読んだ星座占いの本を思い出した。そのときはキラクターの性格を決める参考になるかと思っただけだが、十二星座の中で小説家に向いていると書かれてある星座が五個もあることに気付き、一気に信じる気が失せたのを覚えている。

が　今読んだら信じてしまうかもしれない。なぜならその本には、まるで今の状況を予期するように、ふたご座の男は二四才が最悪に運氣の下がる歳だと書いてあったのだから。

「……………いいだろう。ただし、分かっているとは思いますが、俺とお前はここでは赤の他人だ。特にお前が俺の部屋で寝泊りしていることは誰にも喋るなよ」

それさえ徹底しておけば、しばらくは問題ないだろう。逆にこれさえ徹底できるなら、拒む理由がほかにないから困っているのだが。
「うーん、よく分かりませんが分かりました」

「よく分からは余計だ」

「分かりました」

と、そこで足音が聞こえたような気がした。そろそろ店長が下りてきてもおかしくない頃だ。そう思って雄介が七海から距離を取ると、それから一 秒もしないうちにバックルームの扉が開き、ショートカットに釣り目が印象的な女が入ってくる。

その女 店長の藤崎萌花は七海を見て固まった。そしてゆっくりと口の両端を吊り上げていき

「合格！」

「早っ」

店長が即決したことに七海は驚いていたが、雄介にとってはむしろ予想通り過ぎておもわず乾いた笑いが口から漏れてしまう。

女なら店長よりかわいいこと。男なら店長が認める程度にイケメンであること。それだけがこの店で働く唯一絶対の条件だった。

雄介は最初冗談だと思って応募したが、本気だった。

「携帯は持つてるよね、番号を覚えてくれる？」

「えーっと、少々お待ちを」

七海は携帯を取り出して赤外線番号を交換する。さすがは元女子高生といったところか、携帯を渡したのは昨日だというのに手馴れたものだ。

「さっそくだけど、今日から働いてもらっても大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「オーケー。私は藤崎萌花。まあ、普通に店長って呼んでくれればいいかな。貴女は」

携帯の画面を見て店長がにやりと笑う。

「やっぱり望月七海か。エプロンは ないな。ちょっと取ってくるから、七海ちゃんはここで待ってて」

「はい」

のんきに返事をする七海とは対照的に、雄介は困惑していた。敏感な店長はそれに気付き、声を潜めて言った。

「守屋はメモリアルハートってゲームを知っているか？」

「……いえ」

否定する。自分がそのゲームを何度も何度も繰り返しプレイしていたことは誰にも話していない。

「統合失調症患者が考えたとは思えないカオスなシナリオのゲームかと思いきや、繰り返しプレイするほど面白さが理解できるゲームみたいなゲームだな。ヒロインにプレイヤーの名前を呼ばせるために無理やり突っ込んだ音声データが大きすぎてシナリオが短かったり、攻略対象が三人と少なかったり、絵柄も独特で、なによりPCソフトのくせに全年齢対象だったせいであまり売れなかったんだが……まあいい。とにかくそんなゲームがあつて、ヒロインの一人に望月七海ってキャラがいるんだよ」

そう言うと、店長はちらりと七海を見る。

「彼女を見た瞬間は本当にびっくりしたぜ。なにせゲームの望月七海と瓜二つなんだからな。イベントでも私はあんなに気合の入ったレイヤーを見たことがない」

レイヤーとはコスプレイヤーの略称だ。考えてみれば当たり前のことだが、店長は彼女が突然現れた本人（？）とは思ってはいなかった。

店長はバイトの雇用条件からも分かる通り、かなり適当な人間だが、空気は読める。彼女のことを気合の入ったレイヤーだと考えているならば、あえて夢を壊すようなことは聞かないだろう。そのことにとりあえずホツとしつつ、雄介はまったく違うことを考えていた。

（黒が入ってない服を、一着ぐらいは買っておくべきだったな……）

七海は『望月』と書かれたネームプレートを貰うと、まず初めに店長から基本的なこと　タイムカードの押し方、シフト表の読み

方、トイレの場所などの説明を受ける。

「じゃ、あとはこいつに教えてもらってくれ。うちの店一番のイケメンで、仕事もできる」

「別に煽てられても嬉しくはないんで時給を上げてください。てか、店一番のイケメンはどう考えても北斗でしょ」

「私は本当に守屋が一番のイケメンだと思ってるよ。時給は、この婚姻届にハンコをポンツと押してくれたらすぐにも五円アツプしてやってもいいんだぜ？」

言いながら、店長はエプロンのポケットから三つ折にされた紙を取り出す。なれたやり取りなんだろう、雄介が「結構です」と断ると、彼女はあっさり引き下がる。

「私は後半まで上にいるから、あとは任せたぞ」

店長がバックルームから消え、彼と二人きりになる。

「もう一度言うておくが、俺とお前は赤の他人だ。分かったな」

「はい、分かってます」

彼は疑うような視線でしばらく七海を見つめる。

「……まあいい。とりあえずは、レジの使い方からでも教えてやる
来い」

バックルームを出ると、すでに店は開店しているようだった。店内にアニソンと思われる歌が流れている。

「よろしく願います、雄介先」

見えたが、避けることはできなかった。雄介の放った水平チョップが七海のかめかみを打ち抜く。

彼は自身のエプロンについているネームプレートを指差す。

「『守屋』先輩だ。分かったか新人」

「……はい」

守屋先輩。

ふと、七海はゲーム序盤 彼のことが大好きなのにプログラムが邪魔して守屋先輩としか呼べない状況を思い出した。

(がんばらないと)

今は自分を縛るプログラムがない代わりに、ただ待っているだけでは彼の恋人にはなれない。それは昨日、痛いほどに理解した。

レジの使い方、ポイントカードの説明、商品の渡し方、見本の商品を持ってこられたときの手順。それらレジ周りの仕事を一通り教わると、七海はさっそくレジに立たされた。

しばらく説明された通りにレジをまわす。もちろん笑顔も忘れずに。

「三点で合計二四〇〇円でございます。三〇〇円とポイントカードをお預かりします。……お先にポイントカードをお返ししますね。こちらがおつりの六〇〇円とレシートでございます。ありがとうございます。」

命令されて動くことには慣れていくからだろう。覚えることは多かったが、七海は一度説明を聞いただけで驚くほど完璧に仕事をこなしてみせた。

「へへーん、どうですか？」

七海は得意げな顔で雄介に聞く。しかし彼は、

「悪くはない」

と、無表情で答えるだけだった。

「……それだけ、ですか？」

「それだけだ。レジ以外にも仕事はたくさんある。ついて来い」「レジはどうするんですか？」

聞く。すると彼は七海と話す声とはあきらかに違うトーンで鈴木を呼び、「ここお願いしてもいいかな」と言っつてレジを任せた。

商品の配置、陳列のルール、在庫が置いてある場所。それらの説明が終わると、今度は見本を作ることになった。

同人誌の四ページ分をスキャンして、パソコンで編集して縦に並べ、印刷。透明なビニール袋（OPP袋というものらしい）に印刷したそれと同人誌を一緒に入れ、セロテープで綺麗に止める。

これも上手くできた。手順を説明してもらったために彼が先に作っ

たものと比べても遜色ないで良かった。

今度こそ褒めてもらおうと彼に聞くが

「悪くはない」

彼の評価はまたしてもそれだけだった。

「休憩時間までにそのダンボールに入っているものを同じように全部処理しておけ」

「ゆう　守屋先輩は手伝ってはくれないんですか？」

「俺には俺の仕事がある。終わったら呼べ。レジが混んでも俺が行く。お前はそれに集中しろ。ただし客が店を出入りするときは挨拶を忘れるな」

「……分かりました」

ダンボールを見る。同人誌の量は多すぎるといっほどもなかった。サボらずやれば、店長に言われた休憩時間までには終わるだろう。

しばらく作業に集中する。

「やつほ」

顔を上げる。朝に雄介と並んで歩いていた美少年がそこにいた。

「僕は長月北斗。君は……」

「望月七海です」

答えながら、店一番のイケメンは彼だと雄介が言っていたことを思い出す。

長いまつげに二重まぶた。綺麗に整えられた眉毛に形の良い鼻。うっすらと茶色の入った髪は自分と同じか、またはそれ以上にサラサラしていそうだった。

確かに、間違いなく彼はイケメンだった。ただし、店一番かと思われたら……自分は店長と意見が合いそうだと七海は思う。

「七海ちゃんか。よろしくね」

彼はにっこりと笑ってそう言っていると、完成した見本誌を一つ手に取り、言う。

「へえ、すごいじゃん。僕が作るよりも上手いかもしれないな。七

海ちゃんってこういう仕事、したことがあるの？」

「いえ、バイトをするのはこれが初めてです」

「そうなんだ。なら、分からないことがあったらなんでも聞いてね。雄介ほどじゃないけど、一応僕もそれなりにここで働いてるからさ」

「はい。ありがとうございます」

「てかさ、ごめんね」

ニコニコと笑っていた彼は突然眉をひそめ、少し困ったような声で言った。

「雄介、なんだか今日は機嫌悪いみたいです。七海ちゃんがレジで仕事してるの見てたけど、完璧だったし。そもそもあいつの『悪くはない』は、照れてるときの褒め言葉だから。仕事は自信を持って大丈夫だよ」

「そうなんですか？」

「まあ雄介は絶対に違うつて否定すると思うけど。それにしても、どうしたんだろう。いつもは今日ほど厳しい奴じゃないんだけどなあ。来的时候にウンコでも踏んだのかな」

彼の機嫌が悪いのはきつと自分がここにいるからだろう。どうして一緒に働くことを嫌がるのか、理由までは分からなかったが。

と、それとはまた別で七海は一つ気になったことがあった。

「あの、ちよつといいですか」

「ん？ なに？」

くるつと表情を変え、彼が再びにつこりと笑う。ころころと瞬間的に変わる彼の表情を見て、なんだかゲームの立ち絵を眺めているみたいだなと思った。

「長月先輩は守屋先輩と友達なんですか？」

「うん、そうだよ。雄介とは中学時代からの親友だね」

「ふざけるな。ただの腐れ縁だ。親友でもなんでもない」

北斗の言葉はいつの間にかそこにいた雄介にすぐさま否定された。

「サボってないで仕事しろ」

「えー、いいじゃんお客さん少ないんだし。それに新人とコミニケ

「セッションを取ること仕事の一つだって」

「客が少ないときに混んだときの準備をしておくんだよ。そんなに
新人と無駄話したいなら仕事が終わってからにしろ。そもそも『
コミュ』ニケーションだ馬鹿野郎」

「まったく雄介は真面目だなあ」

「お前が不真面目すぎるんだよ」

北斗は肩をすくめると、最後に「それじゃ、がんばってね」と七
海に言うてから自分の仕事へと戻っていった。

「新人、お前もだ。手が止まってるぞ」

「あ……ごめんなさい」

謝り、七海が作業を再開しようとして
ぎゅるううう。

店内に軽快なアニソンが流れる中、その音はとてもはつきりと聞
こえた。

「……………」

何度聞かれても、恥ずかしかった。同時に、休憩時間まで我慢し
なければいけないと思うと憂鬱な気分になる。

「……さつさとなにか食って来い」

「えっ、でもまだ休憩時間じゃ」

「そんなもんずらせばいい。早く行け」

「はい!!」

やっぱり彼は優しい。七海はエプロンを脱ぐのも忘れ、スキップ
しながら外のコンビニへと向かった。

休憩から上がると、七海は見本誌の作成を再開する。

ようやく作業が終わりそうになった頃、彼が新たに同人誌でいっ
ぱいのダンボールを持ってきて、言った。

「飽きたか」

「……………いいえ。とっても楽しいです」

本当は少し飽きてきたところだったが、正直にそう答えれば「な

「このバイトはやめておけ」と言ってくることは分かっていた。

しかし飽きてないと答えれば

「ほう。だったらこれも全部同じように頼んだぞ」

当然こうなる。

「……ずるいです」

七海がつぶやくと、その場から立ち去ろうとしていた雄介がふと足を止めた。

「三次元とはそういう世界だ。覚えておくんだな」

声は普通だった。が、彼はこちらを向いていなかったため、どんな表情でそれを言ったのかまでは分からなかった。

持ち場に戻る彼の背中を見送って、七海は作業を再開する。

またしばらく作業を続けていると

ピポピポーン。

「いらつしゃいま」

店に入ってきた美少女を見て、七海は声が出なくなった。

（あ、ありえない）

琥珀のような瞳に、満点の夜空のように光り輝くセミロングの黒髪。見るからに瑞々しい唇はとても柔らかそうで、おもわず触れてみたくなる魔力が込められている。服装は地味で背も低かったが、彼女ならイブニングドレスを着てもきつと似合うだろう。

欠点が見当たらない。一瞬、自分はいつ二次元の世界に戻って来てしまったのだろうかと本気で疑ってしまう。

七海から声を奪った美少女は、店の入り口で誰かを探すように店内を見回す。そして目的の人物を見つけたのか、彼女は微笑を浮かべると雄介の前まで一直線に進み、言った。

「おはようございます」

彼は声に反応して振り向くと、同じように微笑を浮かべ、挨拶を返す。

「おはよう」

瞬間、胸の奥に謎の感情が落ちてくるのを七海は確かに感じた。

嫉妬……ではない気がする。彼が似たような表情で鈴木と挨拶をしたときには、こんな感情は沸いてこなかった。

怒り……は、少し含まれている気がする。自分には微笑んでくれない彼は憎らしい。でも、それがこの感情のすべてではない。

悲しみ……なのだろうか。怒りよりはそちらのほうが合っている気がする。でも、ならどうして自分の心臓はこんなにもドキドキしているのか。

美少女は雄介との挨拶を済ませると、店内をまわって残りのスタッフにも挨拶をしてまわる。店長と挨拶を交わすついでに七海のことを聞かされると、彼女は最後にこちらへと歩いてくる。

「おはようございます」

「……………」

近くで見てもやっぱり彼女はかわいくて、鼻腔をくすぐる焼きたてのクッキーのような香りが七海の心をとろけさせる。さっきまで感じていた謎の気持ちは正体を仮面の下に隠したまま、どこかへ消え去ってしまう。

「……………」

「あ、おはようございます。ごめんなさい、つい見とれちゃって」
彼女は七海の言葉に少しだけ驚くような表情を見せたが、すぐに微笑を取り戻し、言う。

「星野詩織です。よろしくお願いします」

「えと、望月七海です。こちらこそよろしくお願いします」
名前だけの簡単な自己紹介を済ませると、星野は「それじゃ、着替えてきますね」と言ってバックルームへと歩いていった。

彼女と入れ替わるように店長がやってくると、どこか嬉しそうに聞いてくる。

「星野、かわいいだろ？」

「……………」

「あいつは私の店で一番にかわいい美少女だからな。客の指名数が一番多いのも星野だ。ああ、指名数するのは客に商品のことなんか

を聞かれた回数や、レジで会計をした客の数を私が勝手に数えてるだけで、別にカネをもらって特別なサービスをしているわけじゃないから安心していいよ」

「はあ」

「指名数が少ないからって時給を下げたりはしないし、逆に多くても上げはしない。ちなみに男で指名数が一番多いのは長月だ。ただ

—

店長はニヤリと笑うと七海の耳元に顔をぐつと近づけ、声を潜めて言った。

「スタッフ限定なら、今のところ票は守屋が独占中だ」

幸いこれといったトラブルもなく、その日の営業は終了した。

七海は仕事ができる。現時点で、すでに北斗よりも使える。一日一緒に働いてみて、雄介はそう判断した。

「お前も、やればできる奴なんだかな」

ハンガーにエプロンを掛けながらつぶやくと、雄介は冷め切ったハンバーガーを食べる北斗に視線を向ける。

今、バックルームには雄介、北斗、七海の三人がいた。店長はすでに上の自宅へと帰って、いつもは雄介が帰るまで残っている星野も今日は用事があるからとすぐに帰った。鈴木は前半で上がりだ。

「またそんなもん食いやがって」

「別にいいだろ。僕が早死にしたって、泣いてくれる家族も恋人もいないんだからさ」

「……それもそうか」

「いや、そこは『お前が死んだら俺が泣く』って言う場面ですよ。

……そんなことより、今日姉貴が出かけてるんだよ。雄介、ウチ来ない？ 勝負しようぜ」

「また今度な」

「あれ、逃げるのお？」

北斗はニヤニヤと憎らしい笑みを浮かべて挑発してくる。が、それを見ても雄介の心に火がつくことはなかった。

「疲れてるんだ」

昨日は休みだったし、今日は通常よりも一人多い人数で店を回していたので肉体的な疲れはそれほどなかった。ただ、精神的な疲れはそう簡単に癒えてはくれない。テレビの占いの結果が良ければ元気になるほど雄介は単純ではない。

ここ二、三日は予想外が起き過ぎている。今不足しているのは驚きや興奮ではない。平穏と癒しこそが必要だった。

それなのに

「あの、代わりに私が遊びに行ってもいいですか？」

「……………え？」

さすがは腐れ縁だ。雄介と北斗、まるでタイミングを合わせたかのように二人の声が綺麗に重なる。

「あ、えっと、ダメ……………ですよ。ごめんなさい」

「いや、ダメってことはないんだけど。え？ あの、え？ なんていうか七海ちゃんのほうが疲れてるんじゃない？ ずっと立ってるのか初めてでしょ。閉店前とか元気がなかったように見えたけど」

かわいい女子高生が突然家に来る流れになつてあきらかに北斗は動揺していた。馬鹿で軽いように見えて、なぜかデートに誘ったり自分の気持ちを伝えるのはとても苦手。一度壁を乗り越えようと、今度は一気に調子に乗る。それが北斗という人物だった。

「大丈夫です。立ってるのは慣れてますから。むしろゲーム中じゃ、座ってるシーンのほうが少ないですし」

「へえー慣れてるんだ。そかそか。でも、七海ちゃん格ゲーとかできる？」

「ゲームですよ？ なら、やってやれないこともないかと」

「そう、だね。まあ格ゲー以外にもゲームはたくさんあるし、なにか一つくらいできるものはあるでしょ。じゃあ、えっと、行こうか」

北斗は椅子からぎこちなく立ち上がる。

部屋を出て行く二人をボーッと見送りそうになり

「ま、待て」

バックルームに一人取り残されそうになる直前、雄介はあわてて言った。

「俺も行く」

北斗の家は店から近い。駅とは反対方向に五分ほど歩いたところにある。

三人は雄介と北斗が並んで歩き、その少し後ろを七海が歩いていった。

「ねえ、これってどういうことなのかな」

声を潜め、北斗が聞いてくる。

「……知るか」

歩きながら、雄介は後ろを歩く七海を眺める。

無表情、というわけでもないのだが、なにか読み取れるほど彼女の表情に色はついていない。

どうということなのか。それはむしろこっちが聞きたいくらいだった。

（なぜだ？ どうしていきなり遊びに行くなんて言い出した。間違はなく疲れてるはずなんだ。単純に北斗と遊びたいだけなんて理由はありえない。が、だとしたら理由はなんだ）

本人に直接聞くのが手っ取り早いことは分かっている。しかし今北斗がしているように声を潜めて聞きだすようなことはできない。

七海と雄介はあくまでも今日初めて出会ったバイトの先輩後輩ではないのだ。ひそひそと密談すれば間違いなく北斗に怪しまれる。

「僕にもついに春が来たってことでいいのかな、かな？」

基本的に潜めつつも、どこか嬉しそうに北斗は声を弾ませる。

「どうだろうな」

その可能性は低いと雄介は思う。

北斗はイケメンだ。しかし彼と付き合いの長い雄介にはイケメン
「モテるなんて単純なことにはなっていないことをよく分かっている。」

どうして彼がモテないのか。本人に自覚はあまりなかったが、雄介には思い当たる節がありすぎた。一言で言って、彼には色々足りていない。

ただ、今日に限っていえば、七海に対してマイナスなことをした場面はなかったように思う。むしろ好感度の変動値だけ考えれば彼は間違いなく上げ、そして自分は下げたことだろう。

七海が北斗に好意を持つことは、冷静に考えれば理解できることだった。なにより北斗には、ある程度のマイナスなら帳消しにするほどのプラスを持っていた。それは七海の知るところではないのだが

ほどなくして三人は北斗の家 正確にはマンションの正面に到着する。

「ここが長月先輩の家ですか？」

立ち止まり、一五階建てのマンションを見上げて七海が言った。

彼女はいつの間にか距離を詰めて雄介の横を並んで歩いていた。

「うん、そうだよ。ここの一番上、1501号室が僕の家」

「へえー。先輩って、お金持ちなんですね」

まだ実体化して日が浅い彼女でも、駅から近めでオートロック完備のこのマンションの家賃が安くはないことは分かるらしい。

「まあ、お金持ちってほどでも、あるかな」

北斗は得意げに顔をニヤつかせる。彼の辞書に謙遜や遠慮という文字はない。

「たまたま運よく高額のお宝くじが当たっただけだ」

雄介はただのフリーターがこんな所に住んでいる種明かしをする。北斗のいやけ顔はいくら見てもイライラしてくる。

「でもそのお金をデイトレードで五倍まで増やしたのは僕の実力だろ？」

「あんだけ種銭あれば俺でも五倍くらい増やせる」

「はいはい、そういうことにしておくよ。んじゃ、行くうか」

もう北斗はだいぶ落ち着いていた。雄介がいるおかげで七海と二人つきりではないというのが大きいかもしれない。

エレベーターに乗り込むとき、彼は雄介にだけ分かるように素早くウインクをして見せた。七海とのことではなにかあればフォローを頼むということなのだろう。雄介はその古臭い合図に気付きつつもあえて様子見　言い方を変えればなにもしないつもりだった。

マジックテープ式の財布をバリバリと開き、北斗が取り出したカードキーで鍵を開ける。

「さ、どうぞどうぞ」

扉を開き、北斗が二人を部屋に招き入れる。

「広っ」

部屋に入って七海が最初に言ったのはそんな言葉だった。次に彼女はリビングにある50型プラスマテレビを見て、一段と声を大きくする。

「でかっ」

もう見慣れてしまったので七海ほど驚くことはないが、それでも50型のプラスマテレビは確かに大きい。当然フルHDだ。同じゲームでも32型ブラウン管テレビと比べたら別ゲーとなる。まったく、うらやましいかぎりだった。

七海の反応を見て北斗は満足そうに笑っている。

「で、なにをするんだ」

言いながら、適当に　と見せかけて雄介は自然に七海を観察できる位置に座る。

「そうだなあ。じゃあ、せつかく三人いることだし」

北斗は先ほどから緩みっぱなしの顔をさらに緩ませる。その表情はセクハラおやしそのものだった。

「ツイスターしようぜ」

「またか……お前も懲りない奴だな」

「なんですか、それ」

「名前は知らなくても、たぶんモノを見れば分かるんじゃないかな。用意するから少し待っててよ」

鼻歌を口ずさみながら北斗は嬉しそうにフローリングの床を靴下で滑っていく。

一瞬部屋に二人残される格好になったところで、まるでこちらの表情をうかがうように七海がちらりと視線を向けてくる。

(俺が邪魔なのか?)

彼女がなにを考えているのか非常に気になったが、雄介はなにもしゃななかった。今聞いてもすぐに北斗が戻ってきてうやむやになるだけだ。

ツイスターで使うマットとルーレットを抱え、三秒もしないうちに北斗は戻ってくる。

「お待たせー。これ、見たことない?」

さっそくマットを広げつつ、北斗が聞く。

「ちよつと、ないです」

「へえ、珍しいね」

普通に一七年間生きていれば一度くらいは目にしたことがあるだろうが、七海にはそういう積み重ねがまったくない。やはり知識にはかなり偏りがあるようだ。

「まあ複雑なルールなんてないから、とりあえず一回やってみようよ。雄介、僕が最初でいいよね」

「好きにしる」

「さんきゅ。それじゃ説明するほどルールなんてないんだけど、雄介がルーレットを回すから僕たちは交互に指定された場所に手足を置いてバランスを取る。先に倒れちゃったほうの負け。簡単でしょ。それじゃ雄介、よろしく」

じゃんけんの結果、先手は七海に決まった。雄介は適当にルーレットの針を弾き、機械的に結果を読み上げる。

「青に左足だ」

ルーレットが示すとおり二人は手足をマットに置いていく。最初は特に苦労はない。多少厳しい体勢になっても、体力があるうちはどうにかなる。本当の勝負は筋肉に乳酸が溜まってきてからだ。このゲーム、終わり方としてはバランスを崩すよりも体力が尽きて倒れることのほうが多かった。

一分、二分、三分。二人の体に乳酸がゆっくりと、しかし確実に蓄積されていく。

ゲーム開始から六分が経過した頃

「守屋先輩っ、早く回してください」

七海が苦しそうに叫ぶ。

「赤に左手だ」

「ええっ。ダメ、無理無理、絶対無理です」

「なら負けだ」

「くうう。ええいつ」

なんとか左手を赤丸の上に移動させると、七海は倒れないように歯を食いしばって耐える。なにを賭けているわけでもないのに頑張るものだと思う。設定にはなかったが、どうやら彼女はずいぶんと負けず嫌いなかもしれない。

現在、七海は仰向けで足を大きく開き、手は両方とも赤丸 マットの右端にあり、三点で体を支えるような体勢だった。

「はあ、はあ。雄介、僕は？」

対して、北斗はうつ伏せで七海に覆いかぶさるような状態だった。それほど無理な体勢には見えない。息が荒いのは目の前に七海の胸があるせいだろう。

「青に右手だ」

「おっけー。よっつ」

北斗は元々緑に置いてあった右手を、あえて七海を抱きこむように青へと移動させる。

彼がモテない理由の一つにこのゲームがあると雄介は思っている。しかしやめるとは言わなかった。彼がモテようとモテまいと知った

ことではない。

が

「雄介さん、早く、お願いっ」

勝負に夢中なのだろうか。七海は苦しそうに歯を食いしばりながらも、これといって北斗を不快に思っているようには見えなかった。

「……………」

彼女の要求を無視し、雄介は立ち上がる。

「あまり感心はしないな」

「なんだよ。別にルール違反はしてないだろ」

「確かに反則はしていないが」

雄介は七海の足首を内側から軽く蹴った。

「あ」

ゲームを終わらせるにはそれで充分だった。すでに限界ギリギリだった七海の体は呆気なく崩壊し

「ぐおおおお」

ちょうど体の下にあった北斗の右肘を妙な方向に折り曲げる。

「怪我には気をつけるよ」

北斗の負傷でツイスターは終了。にはならなかった。彼が「少し休めば大丈夫」と言って続行を望み、七海も七海で雄介の妨害によって決着がついたことがとても不満らしく、ゲームは続けられることになった。

雄介と七海との勝負はあっさりと終わった。彼女は北斗との勝負で体力を使い果たしていた。

負けたほうが抜けるということで、七海が北斗と入れ替わる。

「できるのか？」

北斗は肘のあたりをさすりつつ答える。

「まあね。七海ちゃん、そんなに重くなかったし」

確かに設定では四八キ口で太ってはいない。ただし、腕一本を破壊するのに十分な重さではある。

「ただ、少し手加減してくれると嬉しいかな」

「それは諦める。俺はどんな勝負でも常に全力でプレイする主義なんだ」

「……ふーん」

北斗が今まで浮かべていた笑みとはあきらかに違う微笑を浮かべる。

「……どうした」

「別に。じゃ、やろうか」

そう言つと彼の目が勝負士の目に変わった。

勝負は長時間に及んだ。しかし始まりがあれば必ず終わりも存在する。

最終的には雄介が勝利した。ただ、北斗の肘が万全だったら負けていたかもしれない。本当にきわどい勝負だった。エアコンの効いた部屋で二人とも汗だくだ。

北斗との勝負が長すぎた。結局これ以上ゲームを続ける体力も時間もなくなり、今日はこれで二人とも帰るといふ流れになった。

部屋を出てマンションの下まで行くと、見送りについてきた北斗が言つ。

「夜道の一人歩きは危ないし、家まで僕と一緒に行くのか？」

「お前と二人で歩いたほうが危険な気がしてならないんだがな」

「えー、そんなことは……ないよ」

「せめて否定するなら即答しろ」

「はいはい、大丈夫だって。……ふう。で、どうする？」

まだ先ほどの疲れが若干残っているようだ。北斗は呼吸を整えるように小さく息をつくくと、あらためて七海に聞く。

「いえ、結構です。長月先輩も疲れてるだろうし。それに私、雄介さんと一緒に」

疲れているせいで反応が遅れてしまった。

「ふぎゃっ」

額に水平チョップを喰らわせ七海を黙らせる。

「蚊がいた」

雄介は手についた架空の蚊を指ではじく。

「ところで俺の最寄り駅は東模手原なんだが、お前はどこなんだ？」

「えーと、私もたまたま奇跡的にも偶然同じ駅です、はい」

北斗は突然の暴行にきよんとしていたが、七海は額に手を当てながら話しを合わせてきた。

「だそうだ。こいつは俺が送っていくから心配するな。行くぞ」

返事を待たずに歩き出す。一拍置いて七海は問題なくついてきた。

少し後ろに彼女の気配だけを感じながら、雄介は駅を目指して歩く。

北斗の家から駅までの数分間、二人はなにも話さなかった。

彼女がなにを考えていたか、どうでもよくなつたわけではない。

が、いざ聞ける状態になると、なぜか知ってしまうのをためらってしまう。

微妙な距離を保ったままホームへと続く階段を下りる。電車は定刻通りホームに到着した。

どう切り出せばいいのか、どのタイミングで聞けばいいのか、それが分からないまま雄介と七海は終電間際の混雑した電車に乗り込み、時間を消費していく。

改札を抜け、帰り道。三分も歩けば同じ方向に進む人はいなくなる。

「あの」

「なんだ」

雄介は彼女の顔は見ずに、歩く早さも変えないで聞いた。

「……ごめんなさい」

その言葉からなにを想像したというわけではなかった。こんな時間になつても外は蒸し暑い。なのに、雄介には冷たい風が自分を通り抜けていったような気がした。

「それはなんのことに關しての謝罪だ」

「さつき長月先輩に雄介さんと一緒に住んでるって言いそうになつてしまったので」

「いきなり北斗の家に遊びに行くと言い出したことに関してじゃないんだな」

「え？」

「まあいいだろう。お前が誰に尻尾を振ろうが俺の知ったことじゃない」

「ちよつ、待つてくださいよ」

「北斗は非常識でド変態の馬鹿野郎だが、顔は間違いなくイケメンだ。カネもある。俺なんかよりもずつとな。だから奴に乗り換える選択は間違つていないだろう。ただし色仕掛けをするにしても、せめてあいつにはなにも喋らないと誓つ」

「私が雄介さん以外を好きになることなんてありません！」

静かな夜道に七海の叫びが響き渡る。

足を止め、振り向く。

彼女は今にも泣き出しそうな表情をしていた。

「なら、どうして北斗の家に遊びに行くと言い出した」

雄介の声に少しだけ怒気がこもる。

「それは長月先輩が雄介さんと親友だつて言つてたから、頼めば雄介さんのことを色々教えてくれるかと思つて」

「……それだけか」

「それだけです。信じてください」

七海が潤んだ瞳で見つめてくる。

泣けば無条件で信じるほど雄介は甘くない。むしろ彼にとって涙は警戒心を強めるきっかけにしかならなかった。

「……聞きたいことがあるなら俺に直接聞け」

雄介は七海に背を向ける。今回は、彼女の主張は信じておくことにした。

「なら、教えてください」

「詩織さんと雄介さんは付き合ってるんですか？」

再び歩き出そうとしていた彼の足が、ぴたりと止まる。

勢いだけで、七海は肯定されてしまった場合のことをなにも考えず聞いてしまった。

「俺と星野はただの同僚だ。それ以上でもそれ以下でもない」

即答というほどでもないが、返事は思いのほか早く返ってきた。

「なら、もし詩織さんに告白されたら、どうしますか？」

そのせいだろうか。勢いだけで、七海は再び聞いてしまう。

ふと、視界の端に満月が見えた。月の光には不安な心を勇気付け、饒舌にさせる魔力が込められているのかもしれない。

「どうしてそんなことを聞く」

彼がもう一度振り返る。

「それは、私が雄介さんのことを好きだから。そして詩織さんも…

…雄介さんのことが、好きだから」

根拠は店長が教えてくれたからだけじゃない。

彼女を見ていれば分かる。時間はほんの少しだけだったかもしれないけど、彼と話しているときの彼女はとても嬉しそうで、輝いていた。

「……………」

答えはなかなか返ってこなかった。

星野がもし行動を起こしたら、彼がためらう理由が思いつかない。

三次元なんてありえない。昨日は絶望したその言葉が、今はとても聞きたかった。

(焦りだ)

初めて星野を見たときに感じた謎の気持ち。七海はその正体を唐突に理解する。

さっきは勇気付けられた満月が、今はニヤニヤと自分のことを笑

っているような気がした。

「星野が俺に告白してくるなんてありえない」
それだけ言うと、彼は今度こそ歩き出す。

結局、彼は告白されたらどうするのかという問いには答えてくれなかった。

はつきりとした答えを聞けないまま、数日が過ぎた。

「いつてらっしゃーい」

朝。七海は笑顔で彼を送り出す。

一緒に仕事をしているからといって、当然毎回シフトが同じという事もない。時間が違えば部屋を出るタイミングも違ってくる。七海は今日、後半からだった。

彼が部屋を出て行ってから一分ほど待ち、七海も部屋を出る。

前回後半からだったときはニコニコを見て暇をつぶしたが、今日は予定があつた。

電車に乗り、揺られること一五分。駅からは徒歩で一分。途中で若干迷いながらも、七海はなんとか目的の場所に到着する。

部屋番号を入力し、呼び出しボタンを押す。

反応がない。しかし昨日、シフト表で今日北斗が休みなことは確認してある。

もう一度ボタンを押す。数秒後、スピーカーから眠そうな声が返ってきた。

「ふぁーい、どちら様ですか？」

「望月七海です」

「ふーん。……えっ、七海ちゃん？ ど、どうしたのいきなり」

「ちょっと、お話がしたくて」

彼と恋人になりたいなら、待っているだけではダメだ。

しかし具体的に、なにをどう頑張ればいいのか。今まで台本通りにしか行動してこなかった七海には、それが分からなかった。かといつてもう一度ネットで相談するのは気が進まない。

「もし都合が悪かったら出直します」

やはり彼のことをよく知る北斗に相談してみよう。今のところ、それが最善の選択だろう。そう思っただけで今日はここに来た。

「いや、別に大丈夫だよ、うん。えーと、とりあえず開けるね」

ピツと音がして自動ドアのロックが外れる。

エレベータで上まで行くと、北斗は玄関のドアを開けて待っていた。

「や、やあ。久しぶり、でもないか。ははは」

「ごめんなさい、突然来てしまっただけ」

「そんな、ぜんぜん大丈夫だから。まあ、姉貴がいるとちよつとマズインだけど、九時までは帰ってこないし。だから大丈夫。さ、入って入って」

七海は前回ツイスターをした大きなプラズマテレビがある部屋まで進み、テーブルの前で腰を下ろす。少し遅れて北斗が缶コーラを一つ持ってくる、グツと一気に飲み干し、テーブルに置いた。

「ふう……。で、今日はどういったご用件でしょうか？」

「あの、聞きたいことがあって。……守屋先輩のことなんですけど、どうごまかしているかわからないので七海は直球で攻めることにした。」

「……ああ、七海ちゃんもなんだ。そっかそっか」

七海が「守屋先輩のこと」と言っただけで彼は一人納得したようにうなずくと、乾いた笑みを浮かべてつぶやく。

「雄介が目当てでバイトの面接を受けに来る子って、結構多いんだよね。まあ店長の基準って厳しいから、ほとんど受からないんだけどさ。どうしてかなあ。僕のほうが雄介よりイケメンだと思うんだけどなあ……」

はあ、とため息をついて彼は肩を落とす。

「なんていうか、ごめんなさい」

「気にしなくていいよ、慣れてるから。恵理子ちゃん あのいかにも書委員って感じの子ね。昔、あの子にも話があるって言われ

て、聞いてみたら雄介のことだったし、こういうことは初めてじゃないから。……で、七海ちゃんはなにが聞きたいの？ もう告白はしちゃった？」

「えっと……」

なにかから話せばいいだろう。少し考える。

「じゃあ、教えてください。守屋先輩と星野先輩はお付き合いされてるんですか？」

彼は否定した。

できることなら彼のことを信じたい。けれど笑顔で楽しそうに話している二人を見ると、どうしても「もしかしたら」と考えてしまうのだ。

「んー、お似合いだとは思いますが付き合っているはずだよ。僕に内緒で付き合ってるんじゃないけれど。それを知らないってことは、まだ告白はしてないみたいだね」

「いえ、告白……っほいことはしました。けど、『三次元の女なんてありえない』と言われてしまっ……」

「へえ、雄介そんなこと言ったんだ。しかし、やっぱりふられちゃったか」

「どうして守屋先輩がそんなことを言うのか、長月先輩には分かりますか？」

「まあ、雄介が女の子と付き合いたくないって思う心当たりはあるよ。つまらない話だけど、知りたい……よね」

「……はい。教えてください」

宣言通り、北斗の話はそれほど面白いものではなかった。

雄介には一年前までとても仲の良い彼女がいた。

彼女 橋本優香とは二人がまだ高校生だった頃、イベント帰りのオタクを狙うナンパ野郎から助けたのがきっかけで付き合い合うようになった。一七歳、夏の出来事だった。

「ベタな出会いだけど、運命を感じたって彼女は言ってたよ」

二人は本当に仲が良かった。ああ、二人はこのまま結婚するんだ

ろうなと北斗は思っていた。

しかし、そうはならなかった。

「雄介の彼女に相談されたことがあったんだ。『もう一緒のところじゃなくてもいいから、家に残って大学に行くよう雄介を説得してほしい』って。けど雄介は親父さんの寝込みを襲って家から出ると、大学にも」

「ちょ、ね、寝込みを襲ったんですか？」

「うん。雄介の実家って実はおつきな古武道道場でさ、いずれは長男の雄介が道場を継げって言われてたらしいんだ。でも雄介は親父さんのこと大嫌いだったし、高校卒業したら家を出るってのは中学のときから言ってたことで、当然僕なんか説得できるわけないよね」

そして雄介は計画通り家を出て、どうにか四畳半の安い部屋を借りて一人暮らしを始めた。

「彼女、最初は言ってたんだ。『過ぎたことを悔やんでも仕方がない』って。なのにしばらくすると、また相談されたんだ。『やっぱり親と和解して、大学にも行くようもう一度説得してほしい』ってさ。まったく、わけがわからないよ。どうしてそんなこと言うのか、今の僕には理解できないね。雄介もそう思ったんじゃないかな」

二人が別れたのは、彼女がそんなことを言うようになってから二週間ほど過ぎたときだった。

「彼女と同じ大学に通ってた友達がさ、たまたま浮気現場を目撃しちゃってね。浮気だよ浮気、NTRだよNTR。すっごく清纯で大人しい子だと思ってたのに。雄介も相当ショックだったろうね。僕もヨヨに好きな子の名前をつけちゃったプレイヤーの一人だから、よく分かるよ」

ヨヨというキャラクターを七海は知らなかったが、ヒロインの風上にも置けないような人物だということは容易に想像できた。

「ちなみに詩織ちゃん 初日に会った、店で一番かわいかった子ね。詩織ちゃんは雄介の昔からのファンだから……って、七海ちゃ

ん雄介が同人で小説を書いているのは知ってるよね？」

「えっと、はい。一応、知ってます」

昔から、彼がパソコンを使って小説を書いているのは知っていた。ただ、小説を書いているときの真剣な眼差しにいつも見とれてしまい、どんな話を書いているのかまではよく分からなかった。

「雄介、結構昔から書いててさ。その本棚に全部揃ってるから良かったら通して読んでみるといいよ」

見れば、本棚には大量のえっちな本と一緒に彼が書いたと思われる小説が並んでいた。

「この頃はミステリーとかバトルものばかりだけど、昔は甘いのはっかり書いてたんだよね。っと、話を戻すけど、詩織ちゃんも昔の彼女のこと、雄介がいつ頃ふられて、今どんな状況なのかも知っている。だから、たぶん詩織ちゃんからなにか仕掛けるようなことはないんじゃないかな。無駄だって分かってるからね」

それを聞いて最初に七海が感じたのは、安心ではなく悔しさだった。自分以上に彼のことを星野が知っていることが、悔しい。

「まあ、今は待つしかないのかな。雄介がもう一度恋をしてもいいと思えるようになるまでさ」

「……待つしか、ない」

それが一番無難な選択だとは思う。しかし

「本当に、それしかないんでしょうか？」

「残念ながら、僕には思いつかないかな」

「……………」

なんとなく、待つだけでは永遠に彼とは恋人になれない気がした。ただ、どうすればいいかは七海にも分からない。

「そんなに悲観的になることもないと思うよ」

そう言っつて北斗が微笑む。

「僕の予想だと、待たなきゃいけない期間はそんなに長くはならな
いんじゃないかな。最近、徐々に雄介の書く話がまた甘くなっ
てる気がするし」

「なら今年中に、なんとかなりますか？」

「んー、ギリギリかもしれないし、もしかしたらもつと早くまた恋をしてもいいと思えるようになるかもしれない。てか、なにかタイムリミットでもあるの？」

「あるような……ないような」

部屋は今年中に出て行かなくてはならないが、それで二度と彼に会えなくなるわけではない。それでも部屋を出ることになれば間違いない。彼との距離は開いてしまう。なにより彼と一緒に住んでいるというのは星野に対する唯一のアドバンテージだった。それを失ってしまつたら、もう彼女に勝てる気がしない。

「よく分かんないけど、大丈夫だよ」

「どうしてそう思うんですか？」

聞く。七海には北斗の言葉は根拠のない気休めにしか思えなかった。

「どうしてって、そりゃ七海ちゃんがかわいいからだよ。僕が今まで出会った中では最高にね。さっき言ったよね、詩織ちゃんが店で一番かわい『かった』って。今は七海ちゃんが店で一番かわいい子だと僕は思ってるよ」

「……………」

「本当だよ。とくに七海ちゃんは肌が綺麗だと思う。なんていうか、傷一つなくてテクスチャみたいな肌だね。うん、間違いない。オリエント工業のダツ　高級人形よりも綺麗な肌してるって」

「……………ありがとうございます」

オリエント工業の人形がどんな物かは知らないが、こうして具体的に褒められるとようやく少しだけ安心できた。

「ところで、話は変わるんだけどさ。七海ちゃんと僕、どこかで会ったことないかな？　七海ちゃんの顔、なんか記憶にあるんだよね。なんか、風邪で寝込んでたときに見たような。でも、あときは布団から出ずに携帯でVIPばかり見てたから誰とも会ってないはずだし……………」

「き、気のせいじゃないですかね。あは、あははは……」

七海はぎこちない笑みを浮かべて否定する。

VIPという単語を聞いてピンときた。おそらく北斗は「アレ」を見たのだろう。どうやら世界は案外狭いらしい。星野を知ったあとだと自信満々に画像を上げたのがとても恥ずかしく思えてくる。

「それじゃ、私はこれで」

立ち上がり、玄関へと向かう。

「あ、待って」

「うっ」

つい言われた通り立ち止まってしまふ。

「今日って七海ちゃん後半からだったよね。それまで、なにか予定あるの？」

バレたわけではないようだ。話の流れがまた変わったことにほっとしつつ、七海は答える。

「いえ、とくに予定はないです。ニコニコ動画でも見て暇をつぶすつもりでしたけど」

「なら、時間までゲームでもしていけない？ ニコニコ動画も楽しいけど、二人で遊ぶほうがたぶん気がまぎれると思うし。お昼まだならおごるよ。お寿司とピザだったら、どっちがいいかな？」

一旦帰ってまたこっちに来るのは面倒だし、時間までここにいるいのならとても助かる。それに最近は一人でニコニコ動画を見ている内容が頭に入ってこないことが多い。

「……なら、お寿司が食べたいです」

「おっけー。じゃ、電話するね」

しばらくして届いた特上のお寿司は舌がとろけるほどに美味しかった。

ゲームは格ゲーをひたすらプレイした。あまり勝てなかったけど、楽しかった。

(いい人じゃないか)

彼が言うほど、北斗は変な人じゃない。数時間一緒にいて、七海

は思う。

この日、彼女は初めて仕事に遅刻した。

三章（前書き）

引き続き警告します。これは歌のレインボーガールを聴いていて閃いた、ハーレムラノベの皮を被った自己啓発小説です。主人公（男）にイラツとできない人や、最近の結末を書かないハーレムラブコメに慣れている人が読むと、最悪の場合死亡します。

この作品は全部で八章＋エピローグとなっています。上巻分の四章までは冬コミ前に、下巻分の四章以降は冬コミ後、しばらくしてからR18要素を抜いて投稿予定です。

三章

しばらくは変化のない日々が続いた。

慣れてしまえば二人での生活は楽だった。掃除、洗濯、皿洗い。七海は雄介の要求通りに家事をこなしてみせた。おかげでこれまで家事に奪われていた時間が使えるようになり、執筆ペースも上がっている。代わりに少しでも食費が増えたが、頭を抱えるようなレベルではない。元々周りがうるさくても集中できる人間であり、最近背後で彼女がゲームをしているのも全然気にならなくなった。

唯一、料理だけは手伝わせていない。いや、正確には一度台所に立たせてみたのだが、途中まで順調だった野菜炒めに砂糖を1カット入れようとしたところで雄介は無言でヘッドパッドを喰らわせた。七海がいくら超甘党だからといって、それはさすがにやりすぎだ。そんな失敗を除けば、七海はよくやっていた。職場でも家でも、これといって大きなミスはしていない。心配していた家の場所などを同僚に聞かれても

「秘密です」

と、笑顔で答え、彼女は危険な質問を強引に受け流していた。仕事終わりに北斗の家に行った日以降、七海が大好きアピールをしてくこともない。

もう恋人になるのは諦めたのか、はたまた期限付き同棲生活ができればそれで満足なのか。雄介には彼女がなにを考えているのか分からなかったが、あえて確認しようとはしなかった。

安定しているのはとてもいいことだ。聞けばやぶへびになりかねない。

本当に楽しめているかは疑問だが、不安定で慌しい生活をしていても小説は読める。しかし書くとなると、それは難しい。書くことが逃避にならない雄介には、なおさらのことだった。

なにはともあれ、雄介は一時期失った平穏を取り戻し、平和な日

々を過ごしていた。

しかし 永遠は存在しない。最後の瞬間は絶対にやってくる。崩壊の足音はとて小さく気付きにくいだけで、一歩ずつ、確実に近づいていた。

「雄介先輩は七海ちゃんの住んでるところ、知ってます？」

昼。雄介がバツクルームで休憩していると、メガネをかけた美少年 後輩の佐久間涼太が不意に聞いてきた。

バツクルームには雄介と佐久間、そして北斗の三人がいた。今日、北斗と佐久間は後半から入る予定だ。

「……知らないし、興味もないな」

雄介は校正のために読んでいた自作小説をテーブルに置き、答える。見れば、数分前までは真剣な表情で握り締めていたPSPを今は二人ともテーブルに置いていた。狩りは一段落したらしい。

「あれ、雄介知らないの？」

「俺が望月の家を知ってる理由がどこにある」

「だって、僕のマンションに遊びに来た日、送っていったんでしょ」

「あのときは駅で別れた」

話が長引いてもボ口を出さない自信はあったが、それでも早く終わるならそのほうがいい。雄介は話を無駄に広げないように注意し、自然に話題が変わるのを待った。

「駅からは逆方向だったの？」

「そうだ」

「でも、雄介先輩っていつも七海ちゃんと帰ってますよね。話とかしないんですか？」

「別に避ける理由もないし、最寄り駅が同じだから一緒に帰ってるだけだ。特別親密ってわけじゃないよ。帰り道じゃ、俺よりも、望月は星野と話してることが多いぞ」

七海が星野とよく話しているのは本当だった。

類は友を呼ぶ。元気で飾らない七海と、どちらかといえば控えめ

で清楚な星野。一見タイプが違うようで、どちらも絶対的な存在感を周囲にばら撒いているという共通点を持つ二人は、当然のように仲良くなっていた。

「だけど、毎回三人で帰ってるわけでもないじゃないですか。それに詩織さんは雄介先輩たちより一つ前の駅で降りるわけだし……」

「……どうしてそんなに望月の住んでるところが気になるんだ？」

たとえ二人になったとしても、興味がなければどこに住んでいるかなんて聞いたことがない。そう言って受け流すこともできただろう。しかし雄介はあえて聞いてみた。

この食い下がりようは少し変だ。受け流してうやむやにするよりは、なにか理由があるなら今のうちにはっきりさせておいたほうがいい。

「えっ……いや、別にどうしても知りたいってほどじゃないんですけど。ただ、七海ちゃん、番号もアドレスも、体重やスリーサイズまで教えてくれるのに、なぜか住所だけは教えてくれないから、ちょっと気になるっただけ。あっ、誤解されないように言っておきますけど体重とかはボクから聞いたわけじゃないですからね」

「そうそう、七海ちゃん、どうしてか住所だけは何度聞いても教えてくれないんだよね。今日のパンツの色とかは教えてくれるのに」

「あの……パンツの色とか、どういう会話の流れで聞くんですか。まさか、いきなり聞くわけじゃないですよね？」

まだ北斗とそれほど付き合いの長くない佐久間はテーブルに肘を着き、離れるように若干体を傾ける。

「えっと、最初に聞いたときは……確かテレビの星座占いでみずがめ座のラッキーカラーが赤だって言ったらか、気になって聞いてみたんだけど」

「はあ……。って、何度も聞いてるんですか」

「あまり気にするな、北斗はこういう奴だ。それより、どうして俺が望月の住所を知っていると思っただんだ？」

「それは……」

佐久間は一度視線をそらし、言葉を切る。

「雄介先輩、七海ちゃんのことなんか気になってるみたいだし。もしかしたら知ってるんじゃないかなーと思ってる」

「まあ、新人だしな。気にするようにはしているつもりだけど」

「それだけですか？ あの、ボクが言った気になってるみたいって、そういう意味で言ったんじゃないんですけど……。というか、北斗先輩と話してるときみたいに七海ちゃんと遠慮なく接してるのを見ると、もう二人は付き合ってるんじゃないかと思ったり……。」（なんだ、そういうことか）

佐久間は七海に好意を持っている。売り上げはあまりよくなかったが、それでも一応七海は恋愛シミュレーションゲームのヒロインだったのだ。彼が好きになっても不思議ではない。

「付き合ってるじゃないし、特別な感情もないよ。俺と望月はただの同僚だ」

そう、ただの同僚だ。たとえ同じ部屋で寝起きを共にし、同じ釜の飯を食べていたとしてもそれは変わらない。変えようとも思わない。もし佐久間が刹那の幻想を求め七海にアプローチを仕掛けても、邪魔をするつもりはなかった。

「……そうですか」

小さくため息をつく、佐久間は視線を落とす。

「？」

どうしてだろう。雄介には、スリープモードのPSPを見つめる彼がとても落ち込んだ表情をしているように思えた。まだライバルは一人残っているとはいえ、北斗なんて恐れる必要はないと思うのだが……

「でもさー、七海ちゃんって本当にかわいいよね。店長に聞いたけど、指名率、詩織ちゃんを抜くかもしれないってさ。ちなみに雄介は七海ちゃんと詩織ちゃん、どっちのほうがかわいいと思う？」

指名率とは指名数をシフトに入った回数や時間などで割った数であり、真に客からの人気分かる値だった。最初は商品の売れ行き

などをチェックするついでに計算していたらしいが、最近は一合の入れ方がすっかり逆転していた。そのことで雄介はよく「売り上げに関係のないことばかり張り切るのはやめてくれ」と文句を言っていたが、店長は毎回笑うだけでまともに相手にされていなかった。「ほう、不動の一位だった星野を追い越すか。望月もたいした奴だな」

「うん、すごいと思う。で、雄介はどっちがかわいいと思う？ 二人ともかわいいってのはナシだからね」

北斗が再び聞いてくる。彼はニコニコと笑っているようで、よく見ると目は少しも笑ってはいなかった。どうやらスルーは許さないらしい。

「……………ノーコメントだ」

だとしても、真面目に答えるつもりなどなかった。

「ふーん、そっか」

(どういうことだ?)

しつこく聞かれたらトイレにでも逃げるつもりだったのに、意外にも北斗はあっさり引き下がった。こういうとき、いつもなら子供のように「ねえ、どっちなの？」と長時間まわりついてくるのだが。今回はノーコメントも満足できる答えの一つということなのだろうか。

「しかし気になるよねえ」

ニヤニヤと楽しそうに笑いながら北斗がつぶやく。

退路を塞いでおきながらあっさり引き下がった理由は分からなかったが、今この瞬間北斗がなにを考えているのかわかりはつきり分かっていた。

「尾行はするなよ」

「ははは、やだなあ雄介。僕がそんなことをする人間に見えるのかい？」

「ああ、見えるな」

雄介はためらうことなく断言する。残念なことに、北斗とはそう

いう男なのだ。

「……ダメ？」

「当たり前だ。そもそも東模手原に住んでいると分かれば充分だろ。それ以上詳しく知る必要がどこにある」

「はいはい、分かったよ。尾行はしないって」

北斗がそう答えると同時、テーブルに置いてあった雄介の携帯がブルブルと震える。ボタンを押してアラームを止める。これで休憩時間は終わりだ。

「いいか、絶対に尾行だけはするなよ」

最後にもう一度だけ念を押し、雄介は仕事に戻った。

電車に乗り、七海は店に向かっていた。

日曜日の午後。車内は座席が埋まる程度に混雑している。

ジャージ姿の高校生の集団。靴を脱いで窓の外を眺める子供とその両親。おそろいの指輪をはめたカップル。

皆、幸せそうな微笑を浮かべている。

もし隣に彼がいたなら、七海も同じように笑っていただろう。

だが　いない。そもそも、今の彼は自分を愛してくれてはいない。

(どうすればいいんだろう)

雄介は今、大好物のチョコレートを食べてお腹を壊した状態だ。時間と共に食中毒への恐怖心が薄れるか、どうしても空腹を我慢できなくなるまで待つしかない。

北斗のたとえ話は分かりやすく、とても納得できるものだったが、納得するのと安心するのはまた違う。

無人島で彼と二人っきりの生活ができたなら、どんなに気持ちが悪くなるだろうか。現状では安心して彼の回復を待つなど、とてもできない。

電車が駅に到着する。

店の前まで来ると七海は立ち止まり、両手で顔を覆った。なにをどうすればいいのか分からないが、せめて彼の前ではできるだけ笑顔でいようと決めていた。

「……よし」

店に入り、七海は元気よく挨拶する。

「おはようございまーす」

入り口から一番近くにいた星野が手を休め、にっこりと笑う。

「おはよう」

彼女は相変わらず綺麗だった。今日も悔しいという感情が沸いてこないほどの圧倒的な輝きを放っている。

どうして彼女はこんなにも綺麗でかわいいのだろう。もしかしたら、彼女も自分と同じように二次元の世界から飛び足してきた人間なのではないだろうか。

いや、ありえない。そうだとしたら、間違いなく彼女にあんなことやこんなことをしている同人誌で売り場が埋め尽くされていなければおかしい。たとえ彼女のルーツが十年前のアニメだったとしても、未だに一冊くらいは置いてあるはずなのだ。

「……七海ちゃん、体調でも悪いの？」

「えっ？ いや……」

いつの間にか表情が暗くなっていたらしい。七海はすぐに微笑を作る。

「ごめんなさい。今日も詩織さんがかわいいから、つい見とれちゃって」

「ありがとう。でも、七海ちゃんだってすごくかわいいよ」

わずかに顔を赤く染め、星野が言う。

(……ダメだ、勝てる気がしない)

彼女と交流を深めれば深めるほど、その思いは強くなる一方だった。そのためにアドレスを交換したわけではないのだが、今のところ

る彼女に弱点や隙のようなものは一つも見つけられていない。彼の定義では、もう彼女は三次元の生き物ではなかった。

「それじゃ、着替えています」

再び心配される前に七海は逃げるようにバックルームへと向かった。

バックルームには店長と鈴木が休んでいた。二人ともエプロンを脱いで、まったりと緑茶を飲んでいる。

挨拶を交わし、エプロンに着替える。

「おっと、そうだった。望月、仕事の前にちよつといいか」

七海がノブに手をかけると、店長が思い出したかのように彼女を引き止める。

「なんですか？」

「長い話でもないんだが、とりあえず座りなよ」

促されるままパイプ椅子に座ると、店長は急須にポットからお湯を注ぎ、あつあつのお茶を淹れてくれた。

「今週で鈴木が辞めるのは知ってる？」

「いいえ、知らなかったです。そうなんですか？」

七海は鈴木とも何度かメールのやり取りはあったが、辞める話は聞いていなかった。

「はい、来週からは印刷関係の会社で事務をすることになってるんです。あの、隠してたわけじゃないんですよ。ただ、七海ちゃんには伝えるきつかけというか、タイミングがなくて」

「そういうことだから、鈴木は残念ながら来週のシフトには入れない。で、空いた穴を埋めるために望月のシフトを増やしたいんだが……」

「いいですよ」

「さんきゅ。助かる。それじゃ来週から頼むよ」

そう言つと店長は立ち上がり両手を上げて体を伸ばす。

「さてと、私は仕事でもするか。ああ、そうだ。今日は早めに店

を閉めてみんなでカラオケ行くぞ。先に言っておくが、拒否権はないぜ？　どんなに自信がなくても一曲は絶対に歌ってもらうからな」
「うっ……わかりました」

カラオケで歌うシーンなんてゲーム中ないのに、なぜか七海には音痴設定がつけられていた。

「鈴木もだぞ。お前は音痴じゃないんだから、もつと自信を持って歌えよ。それさえできればなんにも問題ないんだからさ。そうだな、今日だったらラブソングなんかがいいんじゃないか。まあ、甘すぎるのもアレだし、Lost my musicあたりがオススメだな」

ニヤリと楽しそうに店長が笑う。対照的に、彼女はどこか冷めた微笑を浮かべ、答える。

「考えておきます」

「……そうか。んじゃ私は行くけど、望月はそれを飲み終わってから入ってくればいいよ。今日はまだそれほど混んでないし、火傷しないようにゆっくりと楽しんでくれ。人生焦ってもいいことなんてないからな。まあ、落ち着きすぎるのもどうかと思うけどな」

最後にもう一度、今度は真剣な表情で彼女を見つめてから、店長は椅子に掛けてあったエプロンを掴みバックルームから出て行った。はつきりとは言わなくても、店長がなにを言いたいのか七海には分かっていた。当然、彼女にも伝わっているはずだ。

ここを辞めてしまえば彼と会う機会は確実に減る。だからもし告白するならば今日がいい。むしろ今日告白するべきだ。店長はそう言いたかったのだろう。

「恵理子さんは、守屋先輩のことが好きなんですよね？」

「へっ……その、えっと。………はい」

彼女は七海の唐突な質問を受け、驚いたように目を見開く。その後、ちらりとドアのほうを気にしてから、最後は視線をお茶へと戻し、小さな声で肯定する。

「告白、しないんですか」

「……………はい」

「それで、いいんですか？」

彼女は目を閉じると、つらそうに、ほんの少しだけ顔を歪める。星野が飛び抜けているだけで、店長や彼女も充分にかわいい。もし彼女が告白に踏み切れば、彼と恋人になる可能性はある。

それでも七海は彼女に告白して欲しかった。彼女とは星野という強敵を相手に待ち続ける者同士　というより、むしろ数カ月後の自分を見ているような気分だった。

目を開けると、彼女は綺麗な微笑を浮かべ、答える。

「いいんです。少しの間だったけれど、近くで働けただけで私は幸せでした。それに、ここを辞めても二度と会えなくなるわけじゃないですから」

「そう、ですか」

七海は彼女を少しだけうらやましいと思った。自分と一緒に働くだけでは幸せにはなれない。自分だけを見てくれていた彼でなければ、満足できない。

いや　彼女だって本当は恋人になりたいと思っているはずだ。無理矢理幸せなフリをしているだけで、叶うことなら彼に愛して欲しかった。だからこそ、彼の心の氷が溶けるのを待ち続けたのだ。

そして　タイムリミットが来てしまった。

待つだけでは、残念ながら彼女は恋人にはなれなかった。

七海が三次元化してから三週間ほど経っている。

こちらの生活にもだいたい慣れた。最近、それがとても恐ろしく思えるときがある。

現状で生活が安定してしまうのが、怖い。待つだけでは、このまま彼と恋人になれず退去の日を向かえ、一時期一緒に暮らしていた友人Aとなり、いずれは忘れ去られてしまうような気がしてとても不安だった。

ふと、七海は考える。北斗に今度住んでいる場所を聞かれたとき、「私は雄介さんと一緒に住んでいます」と言ったら、どうなるのだ

ろうかと。

確実に、なにかが変わるはずだ。しかし彼に話さないと約束した。それに状況が良くなるか悪くなるか分からない。だから言えなかった。これまでは

「ふう……」

息を吹きかけ、お茶を飲む。

どうやらゆつくりしすぎたようだ。あつあつだったお茶は、もうだいぶ温くなっていた。

まだ客がたくさん残っているにもかかわらず、店長は宣言通りいつもより一時間半も早く蛍の光を店内に流し始め、それから一五分で店を完全に閉めてしまった。

営業中、七海は北斗と少し会話をした。が、どうしてか今日は彼が住所を聞いてくることはなかった。

カラオケは店から五分も歩かないところにあつた。店長が慣れた様子で受付を済ませ、部屋へと向かう。

先頭の北斗が扉を開け一番で部屋に入ると、彼はドリンクを持っているほつの手を高々と上げて言った。

「店長ー、女子が若干男子より多いです！」

「そうか、だったら女子男子女子男子女子男子だ」

「部屋も広いんだし、別に男女で左右に分かれればいいでしょ」

まるでチーターのように一瞬でトップスピードまで加速した二人とは対照的に、彼は冷静にそう言って持っていたウーロン茶をテーブルに置く。

「待て、勝手に自由に座るんじゃない。男女男女で交互に座れつと、せっかくカラオケに来てるのにマイクもナシで歌っても仕方ないしこれくらいでやめておくか。しかーし、普通に男女で別れるのは許さん。とにかく交互に座れ」

「まあ、奢ってもらつ身ですからそれくらいのがままは聞きます

「よ

「よし、それじゃまずは私から座らせてもらおうかな」

店長は入り口の反対側　モニターから遠い席に座った。続いて間を置かずに北斗がその隣に座る。

三人目が座るまで少し時間が空いた。みんな、なにかしら計算をしていたのかもしれない。とりあえず、長椅子にはまだ二人ほど座れそうだ。

最終的に三人目は鈴木が座った。その隣に彼が座る。彼女は一瞬彼に視線を向けると、心を落ち着かせるように両手でコップを持ち、メロンソーダを一口飲んだ。

一つの長椅子に座れるのは四人。彼は反対側の椅子に座ることもできた。なのに、自分の隣に座ってくれた。それがとても嬉しかったのだろう。彼女は幸せそうに微笑み、まるでお酒を飲んだかのように頬を赤く染めていく。

自分が彼女の席に座ったら、彼は隣に座ってくれただろうか。七海は考えてみる。

(……たぶん、ダメだ)

七海が五人目　彼とは対角線上に座ると、あとは自動的に席は決まる。

まずは店長から曲を入れ、隣に座る北斗にデンモクを渡す。店長と北斗は後ろの少し開けたスペースを利用し、ニコニコ動画で聞いたことのある曲を踊り歌った。鈴木は店長がオススメした「I o s t m y m u s i c」を、彼は普段とは打って変わって燃えるように熱く「今がその時だ」を歌った。

いよいよ七海の番がまわってきた。彼女はマイクを持つと大きく深呼吸する。

少し寂しげな鍵盤のメロディ。単発の電子音がまばらに混ざったイントロ。

歌う曲は「初音ミクの消失」にした。これなら音痴も誤魔化せるような気がしたのだ。本当は飽きるほど聞いたゲームのオープニングソングが歌いたかったのだが、残念ながらカラオケには入ってい

なかった。

上手くは歌えない。だから、せめて心を込めて歌う。

台詞を喋るのは慣れている。早口の部分も問題なく　むしろ少しを余裕を持って歌うことができた。

歌いながらも考え余裕ができてしまったせいだろう。この曲はとても切ない別れの曲だ。それを思うと、なんだか無性に悲しくなってきた。

歌い終えた七海がマイクをテーブルに置くと、北斗が話しかけてきた。

「七海ちゃん、歌、うまいんだね」

「そんなことないですよ」

「いやいや、本当にすごくうまかったから」

佐久間が歌っている間、北斗はずっと七海の歌を褒め続けた。

「そう、ですかね。あはは」

お世辞だと分かっているけど、褒められれば悪い気はしない。もしかして、自分は本当に歌が上手いのかもかもしれないとさえ思えてくる。が　勘違いできたのも星野が『星間飛行』を歌い出すまでだった。

彼女が歌い出した瞬間、頭の中からすべてが吹き飛ぶ。

最初の数フレーズを聞いただけで鳥肌が立った。

単純に上手いだけじゃない。綺麗で、それでいて力強い。人を魅了するカリスマが、確かにある。

彼女の歌声ならば、本当に戦争を止める力があるのではないか。

七海は本気でそんなことを考えてしまう。少なくともニコニコ動画に上げれば、間違いなくデイリーランキングで一位を取ることができらるだろう。

全員の視線が彼女に集まる。さっきからずっと七海の歌を褒め続けていた北斗さえ、話すのをやめて彼女の歌声に聞き入っていた。

一周して全員が一回ずつ歌い終わると、そこからは歌いたい人が順番に関係なく歌う流れになった。予約を入れるのは主に店長と北斗の二人で、七海は味の薄いオレンジジュースを飲みながらずっと聞き手に徹していた。

星野も最初に星間飛行を歌ったきり、自分から予約を入れることはなかった。店長が恐れることなく二人で歌おうと誘ったり、これが聞きたいとリクエストされたときだけ彼女はマイクを取った。

北斗がノリノリで歌っているとき、七海はふと視線をグラスに戻す。と

「あれ？」

氷しか残っていないなかったはずのグラスに、なぜかオレンジジュースが補充されている。

誰かのグラスと間違えているのだろうか。そう思っただけで、彼の前にウーロン茶を置く星野がいた。彼女の前にはトレーが置いてある。おそらくこのオレンジジュースも彼女が補充してくれたに違いない。

綺麗で、かわいくて、歌が上手くて、気も利いて……

(本当に、勝てない)

「もしかして、オレンジジュースじゃないほうが良かった？」

星野が申し訳なさそうに聞いてくる。どうやらまた暗い表情になってしまっていたらしい。

「ごめんね、行く前に聞かなくて」

「いえ、オレンジジュースで大丈夫です。えっと、私、トイレ行つてきますね」

完璧すぎる星野から目をそらすようにトイレへと逃げる。

部屋を出たときはそうでもなかったが、レモンの芳香剤を嗅ぐと自然と体が反応する。

用を済ませ、手を洗いながら七海は鏡で自分の顔を見る。

ひどい顔だ。どんなときでもかわいいと思える星野とは大違いだと思っ。

唯一、彼女に勝っている部分もある。七海は鏡に映る自分の胸を見た。特別大きくはないが、少なくとも彼女には勝っている。

(もう一度、脱いでみようか?)

七海は洗面台に手をつくると、目を閉じて頭を軽く左右に振った。ダメだ。彼に抱きしめられる姿が思い浮かばない。怒った彼の渾身のヘッドバットを喰らい、気絶する姿なら容易に想像できるのに。廊下に出ると少し離れたところに彼がいた。壁に背中を預けて立っている。

彼は確認するように一瞬部屋のドアを見ると、七海に向き直り、言った。

「あまり長い時間部屋を抜けていてもおかしいから手短かに話すぞ。

北斗がなにか企んでいる。あいつが簡単に諦めるとは思えない。お前は今日、駅から出たらエンジェルモートに行け」

「エンジェルモートって、家とは反対側にあるカフェですよね」

「そうだ。そこでしばらく時間を潰せ。俺は離れたところから北斗が尾行していないかを確認する」

それだけ言うと、彼は部屋に戻ろうとする。

「あのおつ」

「なんだ。カフェで使ったカネならあとで出してやるぞ」

「いや、そうじゃなくて。……一緒に住んでることって、どうしても秘密にしなきゃいけないことなんですか?」

「当然だろ」

「どうして。みんなにバレたって、別に雄介さんが損するわけでもないじゃないですか」

七海が問い詰めると、彼は考えるように視線をそらす。

「……損は、ある。誰かが、もし身元不明の未成年の女と俺が同居していると通報でもしたらマズイことになる」

「でも北斗さんに話すくらいなら、別に問題ないんじゃない」

言うてから、七海は気づいてしまった。秘密にしたい、本当の理由を。

「秘密は三人知った時点ではほぼ終わってるんだよ。秘密の強度は知る人間が増えるのに反比例して下がっていき、最後には公然となる秘密が秘密でいられるのはせいぜい二人が限界だ。……って、聞いてるのか？」

今まで約束したからと秘密にしなけばいけない理由を深く考えてこなかった。が、考えてみれば簡単なことだ。聞くまでもなかった。

損は、あるのだ。彼が星野のことを好きだったとしたら、自分と一緒に住んでいることは秘密にしたいと思うのは当然じゃないか。

「雄介さんは、詩織さんのことが好きだったんですね」

「どうしてそんな話になる」

「だって、秘密にしたいのは詩織さんに、その……雄介さんが私のことを好きだって誤解されたくないからですよね」

言って悲しくなってくる。けど事実なのだからしょうがない。

「……別にそう誤解される分には問題ない」

彼は小説を書いていて指が止まったときのような表情を浮かべるとても問題ないとは思えなかった。

「じゃあ詩織さんになら教えてもいいですよ」

「だから、どうしてそうなるんだ」

「詩織さんだったら、内緒にして欲しいって頼めば絶対に誰にも話さないでいてくれます」

「そもそも教えなきゃいけない理由がないだろ」

「教えた理由なら、あります。誤解でも、私は嬉しいから……」

そして彼女が身を引いてくれるなら、これほど安心できることはない。

「ただそれだけのためにリスクを増やす必要なんてどこにもない。ほかに理由がないならこの話は終わりだ」

振り返り、彼は再び部屋に戻ろうとする。

「待ってください」

知りたいけど、知りたくない。

でも知らないままでもいられない。だから覚悟ができているときに聞く。

「秘密にしなきゃいけない理由は分かりました。私はどんなことがあっても誰にも言いません。絶対に。だから……」

七海は搾り出すように言った。

「これだけは、教えてください。雄介さんは、詩織さんのこと……好き、ですか」

「……………」

「教えてください。もし雄介さんが詩織さんルートを選ぶと言つたら、私は邪魔しませんから」

背を向けたまま、彼は小さな声で言った。

「……少し、考えさせる」

どこからか、「STAND UP TO THE VICTORY」のメロディが聞こえてくる。

これは自分の携帯の着信音だ。雄介がそれに気付いたとき、すでにメロディはサビの部分にまで到達していた。

着信音を変えたばかりというわけではない。音もはっきりと聞こえていた。単純に、考え事に気を取られていて気付けなかった。

ポケットから携帯を取り出し、液晶を確認する。

「どうした」

電話をかけてきたのは七海だった。彼女は今、予定通り一人でエンジンジェルモートにいる。

「まだ、分かりませんか」

腕時計で時間を確認する。もう店に入ってから二分ほど経っていた。

「もう少しだけそこに座ってる」

北斗が尾行してきているかを確認するだけならこれほど時間は必

要ない。彼女が気になって電話してくるのも分かる。が　そもそも雄介は確認などしていなかった。

外からでも、窓から店の中にいる七海を確認することができる。雄介は店には入らず、少し離れた場所にいた。おそらく北斗が尾行するとしても、同じように店の外から彼女を観察しているはずだ。

といっても、外に身を隠せるような場所はそう多くない。電柱の影、街路樹の後ろ、建物の隙間、向かいのマンションの屋上　初めから確認していれば、チェックするのに三分とかからなかっただろう。

「あの……雄介さん」

「なんだ」

「詩織さんのこと、まだ考えてますか」

これだ。カラオケ店の廊下で聞かれてから、雄介はずっと考えていた。そのせいで、尾行の確認にも集中できなかったのだ。

たとえば聞かれた対象が父親だったなら、なにも考えずに「死んで欲しい」と即答できた。それ以上の感想を口にするのすら嫌なほど、雄介は父親のことを憎んでいた。

嫌いな人間のことなら簡単なのに、そうでない人間のことになると、急に難しくなる。

星野のことは嫌いじゃない。好きか嫌いかの二つしか分類することを許されていないのなら、彼女のこととは好きだった。

しかし七海が聞きたいのは、そんな単純な答えではない。彼女だって、雄介が星野を嫌っていないことくらい分かっているはずだ。

知りたいのは、その『好き』が『like』なのか、それとも『love』なのかだ。

雄介は考えた。考えに考え、そして

「……分からないんだ」

出てきた答えは、そんな情けないものだった。

恋がどんなものか、分からないわけではない。約一年前まで、雄介にも恋人と呼べる相手がいた。恋愛小説だって書いたことがある。

相手のことがわけもなくかわいく、またはかつこよく思える。一緒にいるだけで、なんだか楽しい。自分以外の人と一緒にいると腹が立つ。相手のことを考えると胸がとても苦しくなる。二人っきりのとき、沈黙が苦痛ではない。ほかの誰かではなく、その人に愛して欲しいと思う。その人のためなら、苦勞なんて気にならない。嫌われるのが、怖い……

心理描写でこれらのことが書かれていれば、そのキャラクターは誰かに恋をしているということになる。

では、自分はどうなのだろうか。

星野詩織は同僚だ。雄介の書く作品の古くからのファンでもあり、最近では挿絵やイベントでの売り子なども手伝ってもらっている。初めて出会ったのはイベント会場だった。恐ろしいほどに完璧な彼女を見て、二次元の世界から飛び出してきたのかと疑ってしまっただのを覚えている。もう五年も昔のことだ。

次のイベントの日、星野がもう一度自分の本を買いに来てくれたときは本当に嬉しかった。彼女は小説を買ってまで読んでくれる、初めてのファンと呼べる人物だった。彼女のせいで、その日から雄介は自分が読んで楽しむ「だけ」の小説を書けなくなった。今は「読んでくれるファンも楽しめる」話を目指して書いている。

今まで買いに来てくれた人が、次のイベントでは来なくなることもある。しかし星野だけは毎回必ず読んでくれた。さらに感想までたまには厳しい意見も言われたが、彼女にはとても感謝している。

アイデアが浮かばずもう書きたくないと思っても、ファンのため彼女のためだと思えば頑張れた。

作品を手渡した日の夜はなかなか寝付けない。感想をもらうまで毎日苦しい。彼女が自分の小説以外を楽しそうに読んでいると悔しく思う。

星野が好きだ。

あたためて考えれば、いつの間にかそう言えなくもない状態だった。

ただ、彼女を恋人にしたいかと聞かれたら 答えはノーだ。

もし今まで誰とも付き合ったことがなければ、きつと星野と恋人になりたいと思っただろう。だが約一年前、初めての恋人が自分の元から去っていった冷たい雨の降る夜に、雄介の恋愛観はガラリと変化した。

恋人なんて作るもんじゃない。カネで愛は買えないかもしれないが、カネがなければ永遠を誓った愛でさえ醒めてしまう。貴方さえいればいいなんて大嘘だ。ハッピーエンドで終われるのはゲームやアニメ、マンガや小説の中だけ。本気で愛するなら二次元に限る。

どうして七海は三次元化してしまったのだろう。雄介はいまさらながら思う。

彼女が二次元のままできてくれたら、なにも問題はなかった。会いたいときに会え、恋人になるまでを何度でも繰り返し返せる。物語はハッピーエンドで終わり、別れは永遠に訪れない。

しかし七海は三次元化してしまった。リアルではハッピーエンドのあとで日常は続く。熱く燃え上がった愛の炎も、いつかは消えてしまう。それが現実というものだ。

分かっている。それなのに

「お前は、まだ俺の恋人にいたいと思ってるのか」

「それは……私が、雄介さんを好きなままでいいのなら」

つまらない話ばかりを書いていたときでも見放さず、ファンでいてくれた星野。

これだけ冷たく接してもまだ自分のことを好きだと言ってくれ、元二次元の七海。

彼女達とだったら、本当に愛し合えるのではないか。そんな馬鹿げた妄想が頭をよぎる。

「勝手にしろ」

そのせいで、雄介は七海の希望にとどめをさすことができなかつた。

どうせ別れるなら、早いほうがいいと理解していながら

そして別れの日は唐突に訪れる。

翌日。雄介が一人で開店準備をしていると、少し遅れて無表情の北斗が店に入ってくる。

彼は雄介を見つけると、突然ニツコリと笑い、挨拶も抜きで言った。

「昨日はお楽しみでしたね」

雄介は意味が分からず、眉間にシワを寄せせる。

「……どういう意味だ」

「そのまんまだよ。昨日はお楽しみでしたね」

北斗は同じ言葉を繰り返しただけで、やはり意味は分からない。分からないが

(な、なんなんだ?)

彼の微笑には、おもわず後ずさりしてしまいそうなほどのプレッシャーを感じずにはいられなかった。

「雄介ってドラクエ?は知らないんだっけ?」

しかしあくまでも軽い声で、昨日の夕食でも聞くように北斗は言う。

雄介もオタクの端くれ。それも古いタイプのオタクだ。リメイク版だったがドラクエ?はプレイしたことがある。

「一応プレイしたことはあるが……」

答えると同時、雄介は思い出した。

これはドラクエでローラ姫を救出後、城に戻る前に宿屋に泊まると一度だけ聞ける台詞だ。ありふれた台詞のせいで最初は分からなかったが、実際にドラクエ?をやったことのない人間でもこの台詞だけは知っているくらいにネットでは有名な台詞だった。

「……あまり覚えてないな」

「あ、そう」

(なぜだ? なぜ知っている?)

尾行はしていなかった。昨日は考え事で気が散っていたが、最終的に確認はしつかりとした。

それなのに、どうして北斗は自分と七海が一緒の部屋で一晩過ごしたことを知っているのか。

正確には北斗の予想は外れている。雄介と七海は一緒の部屋で寝ただけで、睡眠以外のことはなにもしていない。ただ、疑っているというよりは知っているといったほうが適切と思えるほど、彼の表情は確信で満ちていた。

「まあドラクエの話はいいや。ところで雄介さ、僕になにか隠していること　ない？」

「お前に話していないことなんて山ほどある」

「えー、なんだよ。僕たち親友だよ」

口元だけで笑いながら北斗が肩を組んでくる。妙に力強く、まるで馴れ馴れしく絡んでくるチンピラのように。

本当に不良が絡んできたのなら裏拳を飛ばしているところだったが、北斗相手にそれはやりすぎだろう。雄介は舌打ちすると北斗の腕を振り払う。

「べたつくな、気持ち悪い。くだらないことやってないでさっさと着替えてこい」

「秘密の話をするなら肩を組んだほうが雰囲気があると聞いたんだけどな。雄介が嫌なら仕方ないか」

北斗はアニメのキャラクターがプリントされたトートバッグを肩から下ろし、ゴソゴソと中を漁る。しばらくして、彼は文庫本ほどの大きさのなにかを取り出した。

一見して新しい携帯電話にも思えたが、それにしても大きい。デザインもダサイ。ボタンが増えた初期のゲームボーイみたいだと雄介は思った。北斗がりんごのようなマークが描かれたボタンを長押しするとモニターが明るくなる。

「これ、なんだか分かる？」

瞬間、さっきから感じていた嫌な予感が倍増する。

「……地図、か」

その装置がなんなのかは分からないが、モニターにはカラーで地図が表示されている。自信がないのは見慣れた地図とは少し違うからだ。

「正解。それじゃ……」

言いながら、海斗は地図の縮尺を変更する。デザインもグーグルマップと同じ形式となり、かなり分かりやすくなった。中央に点滅する赤点も追加される。

「ここはどこでしょう」

「……………」

考えるまでもない。地図にはだいたいの住所が書いてある。モニターに表示されているのは東模手原周辺の地図だ。そして地図上に追加された、ゆっくりと点滅する赤点の場所は

「俺のアパートだ」

「大正解」

今度はポケットから携帯を取り出し、北斗はどこかに電話をかける。

「……やつほー、起きてた？ そっか、よかった。えっと、たいしたことじゃないんだけどさ、七海ちゃん、昨日ちっちゃい緑のバッグ持ってきてたじゃん？ ……うん、それで、その中にテントウムシの形したブローチが入ってると思うんだけど、それ僕のなんだ。今日シフト入ってるよね？ 持ってきてくれないかな。……さーんきゅ。じゃまたねー」

やられた。

まさかここまでするとは雄介も想定していなかった。地図の表示されている装置が受信機でテントウムシ形のブローチが発信機。どこから仕入れてきたか知らないが、それで間違いないだろう。

仕込むタイミングはあった。廊下で七海と話しているときならば簡単に入れることができたはずだ。

「馬鹿かお前は……」

思わず本音が口から漏れる。

雄介のつぶやきを完全に無視し、北斗はなにごともなかったかのように歩き出す。

「待て」

ゆっくりと振り返った北斗に雄介は鋭い眼差しを向け、言う。

「話をしよう」

覆水盆に返らず。

北斗は秘密に触れてしまった。いまさらもつと警戒しておくべきだったと後悔しても、流れ落ちた水はコップには戻らない。パチンと指を鳴らして時が戻せれば楽なのだが、それが可能なのは神だけだ。

その日、雄介は北斗と一緒に自宅へと帰った。

彼も一応人間だ。なにを考えているのか理解できないことがよくあるが、言葉の通じない深海魚ではない。話し合いをすることはできる。

半端に教えて好奇心を残したまま泳がせるほうが危険だと判断し、雄介はあえて彼にすべてを話した。

雄介が一通り説明を済ませると、それまで黙って話を聞いていた北斗が言った。

「えっと、つまり……どういうことだつてばよ？」

北斗なら案外あっさりと思ってるのではないかと思っていたのだが、さすがに馬鹿にしすぎていたようだ。いや、もしかしたら一気に説明したせいで理解が追いついていないだけかもしれないが。

「俺は事実だけを伝えた。それをお前がどう思うかは勝手だ。むしろお前はどう思ったのか、それを聞かせろ」

「どう思ったか、ねえ……」

あごに手を当てて北斗はしばし沈黙する。

大切なのはそこだった。彼の返答次第では、どこかのツンデレ女のように「記憶を失えー！」と叫んで木刀を振り回すことにもなり

かねない。

「んー、とりあえず信じるよ。七海ちゃんが嘘をつくとは思えないしね。それに、なんとなく思ってたことだったし。三次元の女の子にしては、七海ちゃんかわいすぎるもん」

そう言うのと北斗はにっこりと七海に笑いかける。

「なにより肌が綺麗だよね。これは前にも言ったけど、三次元で七海ちゃんに勝てるとしたらオリエント製のダツ　高級人形くらいだと思うし」

彼でも羞恥心はあるらしい。危なかったが、ダツチワイフという言葉はどうか飲み込んだ。

「ほかに聞きたいことはあるか。突然職場で聞かれても答えられないからな」

もし忠告を無視して聞いてきたら、そのときは肉体言語で黙らせる必要があるだろう。

「そうだな……あ、七海ちゃんがヒロインのゲームって、合体シーンはあるの？」

「……………」

やはりこいつは阿呆だ。雄介はあらためて確信する。

立ち上がり、カラーボックスから無駄に大きなゲームの箱を取り出し、北斗の顔面を狙って投げつける。

「ぶがつ」

箱は北斗の顔にジャストミートした。手加減ナシの攻撃を喰らい、彼の顔に綺麗な四角い跡ができる。

「自分で確認しろ」

「そんなに怒るなよ、ちょっとした冗談じゃないか。お、マジでパツケージに七海ちゃんいるじゃん。えーと……なんだ、エロゲじゃないのか。まあいいや。これ、借りてつてもいい？」

「かまわないが、ゲームはプレイできないぞ。なぜかディスクを読み込まない。原因は俺にも分からん」

七海が三次元化してから数日後の夜、雄介はふと気になってデス

クトップのショートカットをダブルクリックしてみた。が、何度やっても文字化けした謎のメッセージが表示されるだけでゲームは起動せず、再インストールすることもできなかった。

「ほかにはあるか。なかつたらこのことは誰にも話さないこと、話したら榊野ヒルズの最上階からゴムなしバンジーすることを誓ってさっさと帰れ」

「まあまあ、そう焦るなって」

北斗は箱をちゃぶ台に置き、肘をついて少し前のめりになる。

「ちよつと確認したいんだけどさ。七海ちゃん、今年中にここから出て行ってもらう予定なんだよね」

「そのつもりだ。偽造の免許書もあるし、保証人がいなくても契約できる不動産屋だってある。多くはないが、蓄えだってあるからな。少しくらいなら貸してやってもいいと思ってる」

「どうして出て行ってもらうの？」

「いきなり追い出すほど俺も鬼じゃないが、だからつてずっと一緒に住む理由がないだろ」

「……本当に？」

いつになく真面目な表情で北斗は確認してくる。

単純に、興味があるから聞いているという雰囲気ではなかった。

雄介の返答次第で、なにか仕掛けてくるつもりだろう。

「……………」

自分はどうしたいのか。今一度、雄介は考えてみる。

現状に不満はない。しかし永遠にこの状態を維持することは不可能だ。

七海は絶対に嫌いになんてならないと言っている。が、やはりそれはありえない。今、彼女と自分は『友人』だ。彼女がこのまま本当に『恋人』や『家族』になることを望み続けるなら、いつかは変化しなければいけない。

彼女と恋人になることを受け入れれば、終わりを先延ばしにすることはできる。そして奇跡が 二次元の存在だった七海が実体化

するような奇跡がもう一度起これば、死が二人を別つまで幸せなきを過ごすことができるだろう。

「いつまでも一緒に住む理由は……ない」

奇跡は起こらないから奇跡なのだ。

「そっか。うん、分かった」

どこかつまらなそうに北斗はつぶやく。

なんだか見下されているような気がして、雄介は眉間にシワをよせ、北斗を軽く睨みつける。だが彼はそれを受け止めることはせず、いつも通りの軽い調子に戻って言った。

「雄介の気持ちを確認したところで、僕に一つ提案があるんだけどさ」

「なんだ」

「七海ちゃん、僕のところで預かるうか？」

「……は？」

またしても予想外な一言に雄介は眉間のシワを更に深くする。隣に座り黙ってその場の成り行きを眺めていた七海も目を丸くする。

「今日からでもいいよ。姉貴、三年付き合った男とようやく結婚するみたいでさ、三日前から家にいないんだよね。その男と別れないかぎり、もう帰ってこな」

「ちよつと待て。お前、ちゃんと話を聞いていたか？」

「聞いてたよ」

「なら七海がどういう存在か、理解してるんだろっな。戸籍がないんだぞ。保険証だって当然ないから迂闊に風邪も引けない。普通なら治せる病気でも七海の場合は命取りになる。書類の上ではこの世界にはいないはずの人間だ、病院のベッドの上で死ぬことは許されない。結婚も無理だ。未成年の女を連れ込んでいるなんて通報されたらどうする？ マッポに『彼女は二次元の世界から飛び出してきたんです』と言ってみる。黄色い救急車を呼ばれるぞ」

どうしてだろうか。今になって戸籍がないことの不便さが次々と浮かんでくる。

「結婚とか死んだらとか、そんな先のことなんてわかんないけどさ。てか、別に病弱設定とかないんでしょ？ それに雄介が言ったことって、最初から分かっていることで七海ちゃんが僕の家に来るから起こる問題じゃないじゃん」

「それは、そうだが……」

「条件が同じなら僕のマンションのほうが店だって近いし、部屋も空いてる。病気になっても少しくらいなら無保険で治療できるくらいの貯えはあるしね」

ふと、雄介は昔のことを思い出した。恋人と別れる一ヶ月前のことだ。彼女のことを愛しているという男と、二人で話し合いをしたことがあった。そのときの雰囲気は今と似ている気がしたのだ。

「……いいだろう。ただし、本人が行くことを希望したらだ。七海は命令通りにしか動けないゲームキャラじゃない。飯を食って風呂にも入る、意思を持った人間だ」

「そんなの言われなくたって分かってるよ」

二人の視線が七海に向けられる。

彼女は話し合いが始まってからまだ一言も話していない。秘密がバレってしまったことに責任でも感じているのか、まるで叱られる子供のよう黙っていた。

それでも雄介には彼女がどう答えるか、予想できていた。はつきりとした根拠などないが、最終的にはこの部屋に残ることを選択するだろうと。

「私は」

「待った」

北斗が言った。

「結論を出す前に、一度七海ちゃんと二人で話したいんだけど」

「……好きにしろ」

「うん、そうする。七海ちゃん、ちょっと玄関の外まで来てもらってもいいかな」

「……はい、分かりました」

立ち上がった七海はどこか緊張しているようだった。なにを聞かされるのか、彼女も少しは予想できているのだろう。

玄関のドアが閉まる寸前、彼女は悲しそうな表情を浮かべて雄介を見つめていた。

ガシャンと音を立て、ドアが閉まる。

外で二人がなにを話しているのか。これも雄介は予想できていた。今頃、北斗は懸命に七海を口説き落とそうとしているはずだ。そもそも彼は最初から七海のが好きだった。冷静になれば、彼が七海を預かると言い出したのも理解できる。

そしてもう一つ冷静に考えてみれば、北斗の説得は失敗することが分かる。荷物にこっそりと発信機を入れてくる男の所に誰が行くというのか。七海は発信機で追跡されることを愛だと思うような電波ではない。

ドアが開き、二人が部屋に戻ってくる。

「で、どうするんだ」
聞く。

「……………」

七海は俯いたまま答えようとしない。

一秒。二秒。沈黙が続く。

(どうしたんだ?)

自分がクリックするのを待っているのだろうか。そんなことを考えてしまうほどの長い沈黙だった。

しばらくして、七海はなにかを確認するように北斗に視線を向ける。次に彼女は雄介のこゝろを見つめ、言った。

「私、北斗さんのマンションで暮らします」

雄介には彼女がなんと言ったのか、すぐには理解できなかった。

四章（前書き）

引き続き警告します。これは歌のレインボーガールを聴いていて閃いた、ハーレムラノベの皮を被った自己啓発小説です。主人公（男）にイラツとできない人や、最近の結末を書かないハーレムラブコメに慣れている人が読むと、最悪の場合死亡します。

この作品は全部で八章＋エピローグとなっています。上巻分の四章までは冬コミ前に、下巻分の四章以降は冬コミ後、しばらくしてからR18要素を抜いて投稿予定です。

四章

「なにやってんだ、俺は……」

肉じゃがの盛られた二つの食器を眺め、雄介はつぶやく。

キッチンからちゃぶ台が置かれた部屋に視線を向ける。腹を空かせたひな鳥のように雄介の料理が出来上がるのを待つ七海は、もういない。

七海言葉に雄介が「そうか」と答えてからは、あっという間だった。

なにか荷物を入れる物を貸して欲しいと北斗が言うので、雄介は少し大きいリュックサックを渡した。バスタオル、寝巻き、歯ブラシ。七海は次々と自分の荷物を詰めていく。そしてマツトレス以外の荷物を収め終わると、彼女はリュックサックを担いで北斗と一緒に部屋から出ていった。

「……はあ」

二つに分けてしまった肉じゃがの片方にラップをかけつつ、雄介は小さなため息を吐く。

肉じゃがをしまうついでに冷蔵庫から漬物を取り出す。ご飯を一膳だけ盛り、録画してあるアニメを再生しながら夕食にする。

どうして七海は北斗のマンションで暮らすなどと言い出したのだろうか。もう見慣れて新鮮味のなくなったアニメのオープニングを眺めながら雄介は考える。

北斗はイケメンでカネもある。が、それでも七海が北斗に口説き落とされたとはどうしても思えなかった。発信機を仕込むなど好奇心が強いなどというレベルではない。普通に考えれば千年の恋も醒めるような行為だ。

それなのに、七海は北斗についていった。あっさりと、まるで存在自体が常識外れの彼女にとってはこの程度の非常識など気にならないとも言つように。

いや、気にならなかったとしても積極的に向こうへ行く理由にはならない。

……北斗は口説いていたのではなく脅迫していたのだとしたらどうだろうか。

七海には知らないことがまだまだたくさんある。もし警察に身元が不明なことをバラしたら窓のない病院で一生暮らすことになるだろう。そう言えば、彼女なら信じるような気がする。

ただ、北斗がそのようなことを言うともまた考えにくい。確かに彼は非常識のバカだが悪人ではない。

ならば北斗はドアの向こうでなにを話した？ 七海はなにを聞いて、どうしてここから出て行くことを決めた？

答えの出ない問いが頭の中で何度も繰り返される。

「……………」

雄介はわずかに残った肉じゃがを一気に流し込む。考えながらも箸は止まっていなかったが、いつの間にかアニメはAパートが終わろうとしていた。

朝。アパートの階段を途中まで降りたところで雄介は足を止めた。

「ちっ」

ドアまで戻り、鍵を閉める。最近七海に鍵を任せていたせいで危うく忘れてしまうところだった。

鍵をポケットにしまい、あらためて店に向かう。

今日のシフトは雄介、北斗、七海の三人が前半からラストまで通しで入っていた。後半は店長が加わるだけで、先に帰る者はいない。店に到着した雄介が一人で開店準備を始めていると、しばらくして北斗と七海が並んで店に入ってくる。

二人の距離は袖が触れ合いそうなほどに近かった。さすがに手を握り合っているようなことはなかったが。

北斗は片手を上げるといつも通りの明るい声で言う。

「やっほ」

続けて七海も言う。昨日店で見たものとなにも変わらない、いつも通りの微笑を浮かべて。

「おはようございます、守屋先輩」

（　　どうなってるんだ？）

どんな反応を期待していたというわけでもない。特にこれといって予想もしていなかった。が、それでも変化ナシ　これまでとまったく同じ微笑を浮かべる七海に雄介は困惑する。

北斗がいつも通りなのは不思議なことでもない。理解できなくても「北斗に常識を求めても仕方ない」と受け入れることができる。しかし自分の知っている七海は違う。彼女は今でこそ常識外れな存在だが、ゲーム中は普通の　むしろゲームのキャラクターらしくない生きた心を持った、普通の少女だった。だからこそ、雄介は彼女に惹かれたのだ。

なのに、彼女は今、昨日と同じ微笑を浮かべている。店には秘密を知る者しかいない、この状況で。

雄介は思う。怒り、悲しみ、喜び、焦り、ためらい、後悔、軽蔑……、心の動きはなんでもいい。なにかあるだろう。そしてそれは行動や言動の変化として現れてもいいのではないかと。

「……おはよう」

雄介は動揺しつつもなんとか二人に挨拶を返す。

バックルームへと向かう七海を目で追っていると、彼女が振り返って聞いてくる。

「どうかしましたか？」

彼女の表情はとても自然で、それを見た雄介は急に胸が苦しくなった。まるで誰かに心臓を握り締められているかのようだ。

この感覚は何度か味わったことがある。前回味わったのは約一年前、ゲームをインストールして彼女に初めて出会ったときだった。

しかし胸の苦しみを感じたのも一瞬だけだ。前回のように鼓動が高鳴っていくことはない。ここ一ヶ月の日々など最初からなかったかのような彼女の反応に、心はゆっくりと冷めていく。

(すぐに部屋を出て行くと決めて、北斗と一緒に暮らすことになって、なにも感じないのか?)

自分がなにを疑問に思っているかは、言葉にできるほどに分かっていた。が

「なんでもない」

雄介はそう答えると七海から視線をそらし、開店準備を再開した。

変化は七海が部屋からいなくなって四日後に起きた。

「あまり眠れてないのか?」

昼。レジでPOP作りをしていた七海に雄介は聞いた。

「え?」

彼女はPOP作りの手を止め、こちらを向く。

「クマができてるぞ」

七海の顔には、うつすらとはあるが確かにクマができていた。

ファンデーションで簡単に消せそうなほどの、薄いクマが。

なにかしらの変化を見つけようと躍起になっていたつもりはない。

ただ、雄介はその小さな変化を見逃さなかった。

「あー、ちよつとBFBC2をやりすぎちゃいました」

少し恥ずかしそうに七海は答える。

BFBC2とは雄介も持っているXBOX360のゲームだ。パソコンで小説を書いているとき、彼女はよく背後で一人このゲームをプレイしていた。北斗のマンションにある大画面のプラズマテレビでやればより一層楽しいことだろう。夜更かししてまでプレイしたい気持ちは理解できなくはない。

「……そうか。まあ、大きくて解像度も高いモニターでプレイすれば楽しいだろうが、あまり夜更かしはするなよ」

「はい」

そう言つと七海はPOP作りを再開する。

お節介に腹が立ったのか、彼女はわずかに表情を硬くする。そして八つ当たりするように最後の文字を書きなぐった。

七海は視線を手元に落としPOP作りを再開する。

北斗の読み通りに彼が動いたのがとてもおかしく思えてしまう。

(た、耐えないと)

まだすぐそこに彼がいる。届いた商品を陳列しながら、こちらの様子をうかがっている。今笑うわけにはいかない。七海は奥歯を噛み締め、ニヤついてしまうのをなんとか堪える。

心の中でガッツポーズをしながら最後の一文を書く。勢い余って少し台紙からはみ出してしまった。

焦らせる。

押してダメなら引いてみる。雄介はツンデレだから押ししてるだけじゃ攻略はできない。一度引いてみる必要があるじゃないかな。大丈夫、僕に任せてよ。きつと向こうから仕掛けてくるから。僕、こう見えても恋愛は得意だから。ゲームのだけど。

ドアの外で北斗と二人になったとき、七海はそんなことを聞かされていた。

そして今日、彼は本当に北斗の読み通りに動いてくれた。

目の下にクマができていたことは気付いていた。これくらいクマなら前にも何度かできたことがある。だが心配するようなことを言ってくれたのは今日が初めてだった。

完成したPOPを設置しながら七海は雄介を眺める。

すべてを注ぎ込むように小説を書いている彼の姿はとてもカッコいいと思う。真面目に一生懸命仕事をしている姿などもすごく素敵だと思う。ただ、まるで散歩に連れて行ってもらえず拗ねる大型犬のような彼の背中も七海はかわいいと思った。

これが『萌え』という感情なのだろうか。

あまり見つめていると目が合ってしまう。ほんの少しだけ頬を緩めると、七海は彼から視線をそらし、仕事に戻った。

夜。マンションに戻った七海は北斗に今日の話を話した。

「ね、僕の言った通りでしょ」

北斗は当然の結果だとしても言いたげな表情を浮かべながらマウスをクリックする。

今日の夕飯はハンバーガーを食べた。今はパソコンとXBOX360を使い、北斗はエッチなゲーム、七海はBFB C2と、それぞれ別のゲームをプレイしていた。

「分かってると思うけど、心配されても嬉しそうな顔なんてしちゃダメだよ。雄介に恥ずかしい台詞を言わせるためには、まだまだ追い詰める必要があるからね」

「はい」

そう、これからだった。

心配されるのは嬉しいが、それだけでは足りない。

失って初めて気付けた。やっぱり自分は七海が好きだ。彼にそう言わせるのが最終的な目標であり、少なくとも彼が戻って来いと言い出すまで帰ってはダメ。そう北斗に言われていた。

「あ」

少し目を離れた隙に自分の操るキャラクターが殺されてしまった。七海は視線をモニターに戻し、一秒ほどの待機時間のあと、プレイを再開する。

しばらくして部屋に短いメロディが流れ、その後『お風呂が沸きました』というアナウンスが流れる。

「今日も僕はあとでいいから、七海ちゃんが先に入っちゃってよ」「それじゃ、お先に失礼します」

ちょうどゲームが一区切りついたところだった。七海は着替えを持って風呂場に向かう。

足を伸ばし、暖かいお風呂に肩までつかる。

「はあ」

やはりお風呂は気持ちいい。全身を包み込む温もりが、すべての

不安を消し去ってくれる。

初日ほどではないが、まだまだ不安でぐっすり眠れない日々が続いていた。

七海はぎゅっと目を閉じると手でよく揉み解す。ゲームをプレイするのは不安を紛らわせる意味が大きかった。少し目が疲れたくらいではやめられない。

引越しの翌日など、七海は早めに起きて出勤前に一人でゲームをプレイしていた。おかげで彼に会ったとき、上手く平気なフリができた。が、それに一番驚いたのは彼ではなく、むしろ彼女自身だった。

(これからどうなるだろう)

髪を洗いながら七海は考える。

最初に話を聞かされたときは、あまり上手くいくとは思わなかった。ただ、あのときは北斗の自信と熱意に負け、七海は雄介の部屋から一旦出て行くことを決めてしまった。

その決断を後悔はしていない。今日、やっと作戦が動き出したことで不安は大幅に減った。(まだ、頑張れる)

寝るとき近くに彼がいないのはとても寂しいことだった。しかし変化を 彼と恋人になることを望むなら、今は耐えるしかない。

パジャマに着替え、部屋へと戻る。

「おかえりー」

北斗はパソコンの前からコタツに移動し、カップ麺をすすっていた。

「なんか小腹がすいちゃって。七海ちゃんはどうか?」

「んー」

七海はお腹に手を当て、考える。そんなに減っているとは思わなかったが、食べられなくもない。

「それじゃ、いただきます」

「おっけー。それじゃ、棚から好きなを選んでお湯入れちゃってよ」

無数にカップ麺が備蓄されている棚の中から一つ取り出し、お湯を入れる。味はシーフードにした。

電気ポットの蓋を開け、お湯の残量を確認する。半分くらいまで減っていたが、まだ補充の必要はなさそうだ。北斗の家にある電気ポットは雄介の家にある物より大きく、5リットルも入るタイプだった。

右手にカップ麺、左手に缶ジュースを持ってコタツへと向かう。ジュースはコーラだ。色々と種類が揃っているカップ麺と違って冷蔵庫にはこれしかない。缶ビールのCMのように隙間なく詰め込まれている。

カップ麺の蓋に割り箸を置き、北斗と二人、アニメを観る。

ゲームもそうだが、よく冷えたコーラを飲みながら大画面プラズマテレビで見るアニメも最高に良かった。今見ているのはここに来る以前から見ていたものだ。が、彼の部屋で見ていたときはまるで違うアニメのように感じる。これは北斗の部屋に来て良かったと思えることの一つだった。

三分後、完成したカップ麺を食べようとする七海に北斗が待ったをかける。そしていきなり七海のカップ麺にマヨネーズをぶっかけた。

「絶対に美味しいから」

「はあ」

こんもりとマヨネーズが盛られたカップ麺を見て、七海は少し気持ち悪いと思った。

恐る恐る一口食べる。と

「美味しい」

まったりとされていて、それでいてしつこくない。見た目はちょっとアレだが、すごく好みの味かもしれない。

「でしょ」

とても嬉しく、そして楽しそうに北斗が笑う。

「ぶふっ」

きつとうまくいく。

北斗の笑顔を見てみると、根拠もなくそう思えてくる。七海は二ツコリと笑うと、二口目をすすった。

落ち着かない。

「なぜだ」

雄介は小さくつぶやくと背中をそらして天井を見上げる。

静かな部屋に椅子の軋む冷たい音が響く。

睡眠時間は充分足りている。夕飯の量もいつも通り、味もまずまずだった。

食器の片付けは済ませてある。明日の弁当に使うおかずの仕込みも忘れていない。

ベランダに干しっぱなしの洗濯物はない。洗濯機には洗剤を入れてタイマーをセット済みだ。

印刷所の締め切りは二週間後。本編はもう完成して校正も終わっている。残りはあとがきと挿絵を入れるだけで、余裕で間に合うだろう。

眠くもなければ空腹でもない。これと違って心配事もない。それなのに、なぜか雄介は落ち着かなかった。

完璧すぎるのがいけないのだろうか？

いや、完璧なのはいいことだ。それは間違いない。

(なら、どうして俺は集中できない？)

雄介はキーボードから一旦手を離すと腕を組んで考えてみる。

もしかしたら忘れていることがあるのかもしれない。使い切れず傷み始めているような食材はなかったか。家賃や光熱費が引き落とされる口座には十分な金額が入っていたか。パソコンのデータのバックアップを最後にしたのはいつだ。

冷蔵庫の中身を眺め、通帳を開き、ディスクのレーベル面にマジ

ツクで書かれた日付を確認する。
問題は見つからなかった。

「……………」
カチツ、カチツ、カチツ……………
ふと、掛け時計の秒針の音が聞こえてくる。
カチツ、カチツ、カチツ……………

一度気になり始めるともうダメだ。一秒ごとに鳴るその小さな音に意識が集中してしまう。

いくら心配事がなくても、こんな無駄な時間を過ごしている暇はない。なんでもいいから音を流そう。そう思った雄介はパソコンからニコニコ動画にアクセスする。

ログイン後、アニメ・ゲームのタブを開く。
と、そこで一つの動画が目止まる。

BFB C2のプレイ動画が新着コメント動画の欄に上がっていた。ゆっくりとマウスを動かし、クリック。数秒後、動画の再生が始される。

スピーカーから流れる激しい銃撃戦の音。

「……………くそっ」

一週間前までは毎日のように後ろから聞こえていた音を、今は正面から聞いている。それがなぜだか気に入らなかった。

雄介はパソコンをシャットダウンさせるとベッドに倒れこんだ。そしてなにをするわけでもなく、眠くなるまで時計の針の音を聞きながら天井を見つめ続けた。

新たな変化は、目の下のクマを見つけた日から三日後に起きた。

「望月」

レジの客が途切れたときを見計らい、雄介は七海に声をかける。

「なんですか？」

「笑え」

「……………は？」

「俺を客だと思って笑ってみる」

「えーと、はい」

突然のことに七海は若干の戸惑いを見せたが、すぐに要求通りニコリと笑った。

「……………」

じつくりと、今一度彼女の笑顔を観察する。

ほんのわずかではあったが、いつもより笑顔に元気がないように思えた。なんだか笑うことをためらっているような感じだ。

よく見ると、肌が少し荒れている。

「あの……………」

「口内炎でもできてるのか」

「えっ」

どうやら当たったらしい。七海はまるで偶然立ち寄った店で「あなたで来客一万人目です」と告げられた客のように驚いた。

「よく分かりましたね」

「そんなもん、見れば分かる」

これも二次元だったときの影響だろうか、七海の営業スマイルは完璧すぎた。ゆえに少しの変化でも目立ち、気付くことができた。

「ちゃんとメシは食ってるのか」

「もちろん、お腹いっぱいになるまで」

「どうせ牛丼やハンバーガーばかり食ってるんだろ」

「そうかもしれないけど、でもハンバーガーだって美味しいですよ」

口を尖らせ、別にいいじゃないかという感じで七海が反論してくる。その態度に軽くイラツとしてしまった雄介は少しきつい声で言う。

「健康を度外視して旨いもんだけぶち込んでるんだから当然だ。腹が膨れてカロリーが取れているだけじゃダメなんだよ。栄養のバランスを考えた食事をしろ。肌荒れや口内炎はビタミンB2が不足してるからなるんだ。ちゃんと補給できてるのか」

「……さあ」

「納豆、卵、魚肉ソーセージを食べ」

ほかにもビタミンB2を補充できる食品はあるが、安いものといったらこんなところだろう。健康に良くても高いものは継続して食べるのが難しい。カネのある北斗と一緒に暮らしているのだからそんな心配はいらないかもしれないが。

「はい」

七海はそこで話を打ち切るように背中を向ける。

（人が心配してアドバイスしてやってるのに、その態度はなんなんだ）

もう一度こちらを向かせようと彼女の肩に手を伸ばす。が
ピポピポーン。

「いらっしゃいませー」

その手が彼女に触れるより先に客が店に入ってくる。

「……………」

雄介は虚空を掴むと伸ばした腕をゆっくりと戻した。

（まあいいさ）

アドバイスはした。それを無視するか聞き入れるかは彼女の自由だ。たとえ口内炎が痛くて泣き喚こうが、知ったことではなかった。（まったく……なに熱くなってるんだ、俺は）

しばし彼女の背中を見つめたあと、雄介は自分の仕事に戻った。

「本当に、うまくいつてるんでしょうか？」

雄介にズバリ口内炎を見抜かれた日の夜。七海はアドバイス通り魚肉ソーセージを食べつつ北斗に聞いた。

彼は視線をパソコンのモニターに向けたまま、答える。

「どうかなー」

「ちよつ、ええー……………」

「うそうそ、大丈夫だって」

椅子を回し、北斗が体をこちらに向ける。

「予想より時間はかかってるけど、それでも雄介が七海ちゃんのことすっごく気になってるのは間違いないから。口内炎ができてるのなんて普通は気づかないよ」

「……………ですよねー」

確かに食事の場面を見られたならともかく、顔を見ただけで口内炎に気付くなんて、よほど注意して見ていなければ無理だ。

「あの……………」

「ん？ なに？」

「まだ、続けるんですよね？」

「その予定だけど。あれ、もしかして七海ちゃん、雄介のこと嫌いになったとか？」

北斗は椅子から背中を浮かせ、どこか楽しそうだった。

「いえ、違います。そうじゃないんです」

「あ、違うんだ」

七海がすぐに否定すると、北斗は背中を再び椅子に預ける。

「なら、どうして？」

「その、なんていうか、最初は『普通』な反応ができたのに、最近はその『普通』が難しくて。心配されたりするとすごく、すごく嬉しいんです。でも喜びを悟られないようにするためには、どうしても冷たい態度を取るしかなくて。それが……………苦しいんです」

胸に手を当てると、七海は指先に軽く力を込める。

「……………そうなんだ。確かに七海ちゃんはツインテールでも釣り目でないし、ツンデレキャラじゃないもんねえ」

少しだけ真面目な表情になると、北斗は腕を組んで一人うなづく。「あと、そんな状態で楽しそうに笑っている詩織さんを見たりすると、これまでに以上いきついでというか」

「じゃあ、やめてどうする？」

「……………」

そうやって聞かれると答えに困ってしまつ。

「大丈夫だつて、七海ちゃんは心配しすぎなんだよ。雄介と詩織ちゃんの仲が進展する可能性は低いから」

ニツコリと笑い、北斗が言う。

「知ってる？　かわいい女の子は笑顔でいるだけでなんでも願いが叶うんだぜ？　七海ちゃんはかわいい。だからはい、一緒に」

北斗は自分の頬を人差し指で押し上げ、「ニイ」と笑う。

「……ふふっ」

本当に面白い人だ。一緒にいて、退屈しない。

「現時点で雄介と詩織ちゃんが仲良しなのは否定しないよ。何度か二人だけで遊びに行ったりもしてるみたいだし。でもさ、だからこそ急には進展しない。二人は友達以上恋人未満の關係に満足しちゃってる。そう思うんだよね」

それは七海も少し感じていたことだった。ただ近くにいるだけでは友達以上になれても恋人にはなれない。なにかしらの変化のきっかけが必要だ。そう思ったからこそ七海は北斗の家に少しだけ居候することにしたのだ。

(……って、やばくない?)

ふと、思う。

「私がこつちに来たことがきっかけになって、詩織さんとの關係が前進することは考えられませんか？」

「大丈夫、心配ないつて。まあ絶対には言わないけどさ、確率は低いんじゃないかな。それにもしそうなつても」

北斗にしては珍しく、若干ためらうように言葉をとめる。

「考えは……あるから」

それはなんなのかと尋ねても、北斗は恥ずかしそうに「その時になつたら教えるよ」の一点張り、絶対に教えてはくれなかった。

翌日。

アドバイス通りに魚肉ソーセージを食べたおかげか、口内炎は一

晩で治ってくれた。しかしそれと引き換えに今度は風邪を引いてしまった。

もちろん風邪なんて今回が初体験だ。目覚めた直後は自分の身体になにが起こっているのか分からなかった。が、風邪薬のCMを見て七海は理解した。

風邪と言っても症状は軽い頭痛とめまいがあるくらいで、咳や鼻水などはなく、声も顔色もいつも通り。引いている本人にしか分からない程度の軽いものだ。

なのに

「風邪でも引いてるのか？」

朝、店で会った瞬間、彼はまたもや当然のように見抜いてきた。

「あの……はい」

「うつすなよ」

「はい………えっ？」

気付いたなら当然心配してくれると思った。

（それ………だけ？）

彼は呆然と立ち尽くす七海を気にすることなく開店作業を進めていく。

（やばい）

どうしてそうなったのか分からないが、間違いなく昨日までとはなにかが決定的に変わってしまった。

ふらりと体が揺れ、倒れそうになったところで近くにいた店長に支えてもらう。

「つと、大丈夫か？」

「すみません、ちょっとクラツとしちゃって。もう大丈夫です」

店長にはそう答えたものの、その日はなにをしたのか、どうやって家に帰ったのか、七海はよく覚えていなかった。

朝。目覚めた雄介は、シンクの隅に置かれた新品のエスプレッソマシーンを見て頭を抱えた。

「はあ……」

昨日休みだった雄介は、新しい冬服と家に置くタイプの虫除けを買ったためデパートに行っていた。

黒のジャケット（占いなど知ったことか）を購入後、エスカレーターで虫除けが売っている階へと向かう。

と、そこで心地よい香りが鼻先を通り過ぎていく。

小説もほぼ完成し、時間に余裕があった。雄介は香りに誘われるままに足を動かし、そしてこれに出会った。

デロンギ社製BCO261N-B。税込み34800円。

（一個でよかったのにな……）

雄介はつい二個買ってしまったカップを眺め、思う。

今まで好きだからこそしっかりとした店でしか飲まなかった。だから家にはコーヒースセットがなにもなかった。なので豆やカップも一緒に購入した。

初めて家で飲んだエスプレッソは旨かった。旨かったのだが……

「はあ……」

まず値段が高い。すぐにもやし生活に突入するほどではないにしろ、34800円は雄介にとって安くはない。

そしてなにげにデカイ。今はとりあえずシンクの端に置いてあるが、邪魔で仕方がない。どうにか収納スペースを確保しなくては。

頭の中で部屋の模様替えをしつつ、同時に雄介は初めて恋人と別れた直後のことを思い出す。あのときはワゴンで投売りしてあったゲームを大量に買って、次の日同じように後悔した。

が おかげで望月七海と出会うことができた。

いつも元気で明るくて、そうかと思えば繊細なところもあり、落ち込みだすと一気に奈落の底まで落ちていく。ただし一握りの希望さえあれば何度でも立ち上がる。そんな強くてか弱い女の子に雄介は恋をした。

そして

「くそっ」

悔しいが、認めるしかなかった。

自分は再び恋人を失ったのだと。

どうにか収納場所を確保すると、雄介は心を落ち着かせるため力フェラテを一杯飲んでから仕事に向かった。

今日のシフトは前半が雄介、佐久間、七海の三人。後半からは星野も入って、七海と店長が入れ替わり四人の予定だった。

店で開店準備をしているとまず佐久間が来る。次にマスク姿の七海がよろよろと店に入ってくる。北斗がやったのだろう。マスクにはマジックで口みたいな栗が書かれていた。

目に力がない。顔色も良くない。一昨日より確実に悪化している。今日の七海はもう完全に病人だった。

(なにやってんだ、あいつは)

雄介は作業を中断し彼女の側まで歩いていく。

「あ、おはよう」

「帰れ」

なにがム力つくのか自分でもよく分からなかった。が、七海を見ていると、なぜだか無性にイライラしてくる。今日はなるべく彼女の姿を見たくなかった。

「……え？」

「聞こえなかったか、俺は帰れと言ったんだ」

「そんな、私なら大丈」

「お前がいなくなたって今日なら代わりに店長が出れば店はまわる。風邪のときに頑張られても迷惑なんだ」

「……」

二人はしばし無言で見つめ合う。

「……帰ります」

視線をそらし、彼女は今にも消えてしまいそうな声で言う。そし

てゆらゆらと、店の入り口に向かって歩いていく。

(なに考えてるんだ、俺は)

その後姿を眺めていると、雄介は今すぐ駆け寄って彼女を力いっぱい抱きしめたいと思ってしまった。

しかし　いまさらそんなことはできない。できるわけがなかった。

手の平で額を叩き、頭から馬鹿な妄想を吹き飛ばす。そしてなにかを忘れるように、雄介は開店準備を再開した。

ドアを開け、部屋に入る。

リビングまで進むと、寝巻き姿の北斗がカップ麺を啜りながら録画したアニメを見ていた。

「あれ？ どうしたの？」

七海は無表情で北斗の横を通り過ぎ、バッグを机に置く。

椅子に座り、マスクを外すと、それをUFOキヤッチャーのようにゴミ箱の上まで移動させ、落とす。

「……ふふふ」

「だ、大丈夫？」

北斗もさすがにアニメなど見ている場合ではないことを理解したらしい。テレビを消すと、恐る恐る声をかけてくる。

七海は北斗に視線を向け、小さくため息をつく。

「私、嫌われちゃったみたいですよ」

「……え？ な、なにがあったの？」

北斗にしてみれば唐突だっただろう。彼とは一昨日からシフトが被っておらず、家でも雄介のことについて話はしていなかった。

一昨日と今日あったことを、七海は淡々と説明した。

「なんだ、そういうことだったんだ。大丈夫だよ、まだまだチャンスはあるから」

いつものように根拠のない笑顔を浮かべ、北斗が言う。しかし、もうそれを見て元気が出ることはない。

「無理ですよ。バッドエンドです」

「いやいや、だから、えっと　そう、現実はいつまでも続くんだ。エンディングなんてない。今が幸福でも油断せず、不幸でも決して希望を捨てるな　って、雄介も小説に書いてたし。ヤケクソになっちゃだめだよ」

終わりが無い。プログラムに従ってヒロインを演じるだけだったときには懂れていたことのはずなのに、今はとてもつらいに思える。

「現実って、こんなに厳しい世界だったんですね」

「は？」

「だってそうじゃないですか。重要な選択肢を間違えたことに気付いても、ロードがないから選びなおせない。ゲームならバッドエンドが確定したらすぐ終わるのに……」

「いや、だから確定は……」

気休めを言い切ることなく、北斗はゆっくりと口を閉じる。次に彼はゴクリと唾を飲み込むと、逆に聞いてくる。

「もし、雄介に嫌われたとしたら、どうするの」

(……どうしよう)

星野ルートを選択するなら邪魔をしないとやったこともあったが、具体的にどうするかなど考えてはないなかった。

(こんなことなら、彼と同じ世界で一緒に生きたいなんて願うんじやなかった)

いまさら後悔しても遅いのは分かっているけど、どうしても考えてしまう。

(またゲームのヒロインに戻れば、愛してくれるだろうか)

残念ながらどうやって戻ればいいのか分からないのだが。

しかしこのまま現実世界で無意味な日常を繰り返すのも悲しすぎる。

(なら、いつそのこと)

七海はベランダに視線を向ける。

「死んじゃおうかなあ」

ここは一五階だ。飛び降りれば確実にすべてが終わる。苦しむ暇もなく、一瞬で。

突然北斗に両肩を痛いくらいに掴まれる。

「死ぬなんて言うな！」

初めて聞く彼の大声に七海は心臓が止まるかと思うくらい驚いた。「雄介一人に嫌われるくらい、別にいいじゃないか。七海ちゃんが好きで、店の入り口に張られたシフト表を見て、七海ちゃんに会うため店に来てくれるお客さんだっているんだよ？ 僕だって、七海ちゃんのこと、その……」

大きかったのは最初だけで、北斗の声は徐々に小さくなっていった。それと共に七海の心臓も落ち着きを取り戻して いなかった。変わらない。いや、むしろ今のほうが突然の大声に驚いたときよりドキドキしていた。

北斗の肩を掴む力が強くなる。痛みはあまり気にならない。

「だから、なんていうか……」

(ああ、そういうことか)

七海は今がどんなシーンなのか理解した。

「僕……」

(つて ど、ど、どうしよう)

状況は理解したが、それにどう対応していいかがまったく分からない。そして考える時間もおそくない。

「七海ちゃんのこと……」

次に北斗が口を開いたとき、きつとなにかが変わってしまっただろう。

しかし終わりと始まりを告げる最後の一言は、誰かの訪問を告げるチャイムの音によって邪魔される。

ピンポン。

「……………」

北斗は珍しく眉間にしわを寄せ一瞬インターフォンに視線を向けたあと、七海を見つめ直す。そしてあらためて口を開くがピンポーン。

まるで計ったようなタイミングで再びチャイムが鳴らされる。
「……………」

チャイムは二回では終わらなかった。次第に間隔が短くなり、最終的には連打と言っていいレベルで鳴らされた。中に誰か居ることを確信しているのかもしれない。このまま無視を続けても諦めるのはだいぶ先のような気がした。

「あの……………」

「ちよっと待っててね」

七海の肩から手を放すと、北斗は「誰だよこんなときに」と文句を言いつつインターフォンへと向かう。

その背中を眺め、七海はホッと胸をなでおろす。

(危なかった)

チャイムのおかげで今は少し冷静になれた。だが、もしもあのまま北斗に告白されていたら、きつと勢いに飲まれて彼を受け入れてしまったことだろう。

「どちら様ですか」

心底嫌そうな声で北斗は言う。

「開ける」

返ってきたのは女の人の声だった。たった一言聞いただけで、北斗に負けないくらい彼女も不機嫌なのが分かる。

その声を聞いた瞬間、北斗はたじろぐように一歩後退する。

「あ、姉貴……………どうして。もう帰ってこないって言ったじゃんか」

「うるせえな、いいからさっさと開ける」

「え、ちよ、もしかしてまたケンカ？」

「そうだよ、悪いか」

「いや、その……………姉貴が悪いなんてことはありえないけどさ」

言いながら、北斗はちらりと七海を見る。さっきまでの彼の眼差しはちよつとカッコいいと思えたが、今は可哀想なくらいに情けなかった。お姉さんのことが相当怖いらしい。

「てか、鍵はどうしたんだよ」

「あいつの所に忘れてきた」

「なら取りに戻るついでによく話し合ってみなよ」

「ふざけんな。誰が話し合いなんかするか。今回だけはあいつから泣いて謝ってくるまで絶対に許さねえ」

「……今回だけって、姉貴から謝ったことなんてないじゃないか」
インターフォンから顔を背けると北斗は小さくつぶやく。

「とにかく、早く開ける」

「えっと、それは」

それからしばらく押し問答が続いた。

(……帰ろう)

とりあえず一旦帰って、もう一度彼の気持ちを確かめてみよう。そろそろ北斗の敗北で決着がつきそうな問答を眺めながら、七海は思う。

もう死ぬ気はなかった。冷静になってしまつと自殺なんて怖すぎる。とてもできそうにない。

七海は椅子から立ち上がると北斗の横まで移動する。

インターフォンのマイクの穴を指で押さえる。

「な、七海ちゃん？」

「私、帰りますね。まだ、鍵は持ってますから」

「帰るって……まあ雄介は一度約束したことは絶対に覆さない奴だし、宣言通り今年いっぱいなら家に居させてくれるとは思っけど」

そうしてくれると北斗も助かるのだろう。彼は悔しそうな表情を浮かべつつも、一人荷物をまとめ始める七海を本気で引き止めようとはしなかった。

店の中を一周し、あらためて客が残っていないことを確認する。電気を消し、自動ドアの鍵を閉める。

狭い階段を下りて外に出ると星野と佐久間が談笑しつつ雄介を待っていた。

アニメの話などをしながら、三人は駅までの道をゆっくりと歩く。「それじゃ、お疲れ様です」

佐久間の家は雄介たちとは別方向だ。逆に星野とは路線が同じだった。

ホームに下りて電車を待っていると、雄介の横に立っていた星野が言う。

「今度のコミティアで出す新刊って、もう書けたんですか？」

「はい、もう校正も終わってます」

「そう……ですか」

星野はわずかに声を小さくする。いつもなら完成したことを話すと間違いなく喜んでくれていたのだが……

「今回は、挿絵って使わないんですか？」

「……あ」

一旦は落ち着いていたものの、最近は色々とあつたせいで挿絵のことをすっかり忘れていた。もしも星野に聞かれなければ、小説を印刷所に出すのさえ忘れていたかもしれない。

「すいません、最近なんか考えることが多くて忘れてました。えっと、今回もお願いできますか？」

「はい、喜んで」

とても嬉しそうに星野が笑う。もしかすると、さっき声が小さくなったのはいつも頼まれる挿絵を今回はまだ頼まれていないことが寂しかったのかもしれない。そう考えると、雄介は急に彼女のことがかわいく思えてしまう。

いや、星野は元々かわいい。それでいて綺麗で、完璧で、今日だって風邪気味だった七海を心配してレモネード入り魔法瓶を持って

くるような優しい子だ。

そんな彼女が自分の小説に挿絵を描く描かないで一喜一憂してくれる。それが雄介には恥ずかしくて、嬉しかった。

だからだろうか。

「今日とか、どうですか。私、道具持ってますし。今日なら終電まで描けますけど」

「それじゃ、お願いします」

「はい。場所はいつもの喫茶店でいいですよね」

「たまには俺のアパートにでも来ませんか」

「つい、こんなことを言ってしまった。」

「……え？」

これまで一度も見たことがない顔で星野が驚く。当然だろう。たまにはと言ったが、今まで彼女を家に招いたことなど一度もない。ましてやこんな時間になど。

(な、なに言ってるんだ……俺は)

星野はきよろきよろと視線を泳がせると、体を路線のほうに向けてうつむいてしまう。これも彼女らしくない反応だった。

「昨日っ、エスプレッソマシンを買ったんです。だから、わざわざ喫茶店まで行かなくてもいいというか」

「……」

「いや、別にいつもの場所で描いてもらっても全然かまわないんですけど……」

星野は黙ったまま、なにも言わない。

(どうする>double<!?!>/double<)

必死に考える。が、なにも思いつかない。

もうすぐ電車が到着しそうになった頃、ようやく星野が口を開く。彼女はこちらを見ないまま言う。

「いいんですか？」

「え？」

もう一度、今度は上目遣いで雄介を見つめながら。

「私が守屋さんの部屋に入っても、いいんですか？」

恥ずかしそうに聞いてくる彼女の頬は、まるで桃のように綺麗なピンク色に染まっていた。

今、星野を家に招けば、確実になにかが変わってしまう。

そんな予感を抱えつつも、雄介がいまさら彼女を拒む言葉など、言えるわけがなかった。

少し前までは七海と歩いてきた道を、今日は星野と二人で歩く。

ほとんど会話らしい会話もなく、ひたすら歩く。相当緊張しているのだろう。一応話しかければ無視せず答えてくれるが、逆に彼女からなにか話しかけてくることはなかった。

沈黙は気になるが、必死に次の話題を考えたりはしない。今の星野から緊張を消し去る役目は淹れたてのカフェラテに任せた。あつたかくて美味しい飲み物には、人の心を落ち着かせる効果がある。

(確かあのときも、こんな感じだったな)

雄介は昔、恋人を初めて家に招いたときのことを思い出す。今の空気が、そのときの雰囲気とよく似ていた。

十七歳の冬。高校生で実家暮らしだった雄介は、両親が不在の日に彼女を初めて家に招いた。道中ガチガチに緊張していた彼女だったが、部屋で淹れたてのコーヒーを一杯飲み終わる頃には随分と落ち着いてくれたのをよく覚えている。

そのとき彼女に入れてあげたのは安物のインスタントコーヒーだった。34800円もしたエスプレッソマシーンで豆も高級な専用のものを使ったカフェラテなら、きっと星野の緊張も消し飛んでくれるだろう。

ただ、問題はその後だ。

もしもそのまま昔と同じように状況が進行してしまっただら、きっと星野は終電で帰れなくなってしまうだろう。

雄介も男だ。高校生のときはそれをするためにわざわざ両親の不在の日を狙って彼女を家に招いた。

だが今日は違う。

美味しいカフェラテを飲んでもらって、新刊の挿絵を描いてもらうのが目的だ。決して二人で熱い運動を楽しむのが目的じゃない。

星野も二一歳の大人だ。一人で男の家に、しかもこんな時間に行くことがどういうことなのか分かっている。分かっているからこそ緊張しているのだ。

むしろ、少しは期待してくれているのかもしれない。星野とはただの同僚だと七海には説明したが、本当は友達以上恋人未満の関係と言つのが一番正確だと雄介は思っている。

今日、星野に手を出せば、その関係も終わる。終わってしまう。これからも今まで通りの関係でいたいのなら、星野には終電前に帰ってもらう必要がある。たとえ彼女がそれを望んでいなかったとしても。

(大丈夫だ。俺さえ落ち着いていれば、問題ない)

星野から告白してくるなんてありえないと言つたのは本心だった。彼女は絶対に自分からは動かない。もし彼女が自分から動けるような人間だったなら、もっと早くにこの関係は終焉を迎えていたことだろう。

「ここです」

駅からアパートまでの、そう長くない道のりが終わる。

雄介は階段を上がりながら、聞く。

「そんなに難しい道じゃないと思うんですけど、覚えられましたか？」

「えっと、たぶん……」

「まあ、今日は送って行きますから」

玄関の鍵を開け、まず星野から部屋に入ってもらおう。

「どうぞ」

「……お邪魔します」

「先に奥で待っていてください。すぐにカフェラテを淹れますから」

「……はい」

自分の靴を下駄箱にしまう。そのときには、なぜか気付けなかつ

た。もし気付けたとしても、いまさらどうすることもできなかったのだが。

「守屋さん」

「はい？」

下駄箱の扉を閉め、振り向く。

星野はこちらに背を向けて、引き戸のレールの上に立っていた。

（なんだ？）

まさかゴキブリでも見つけてしまったのだろうか？

いや、昨日新しい虫除けを買ってきたばかりだ。それはありえない。

なら、どうして彼女はあんなところで止まっているのだろう。雄介は彼女が見つめるものを確認しようと近くまで歩いていき

「……………」

そんなところに立ち尽くしている理由を一瞬で理解する。

どこかに感情を忘れてきたかのような顔でじっとベッドを見つめたまま、彼女が言った。

「なんで、七海ちゃんが寝てるんですか」

そんなこと、雄介に分かるわけがない。

もし分かることがあるとすれば、一つだけ。

今から七海を起こし、みんなでカフェラテを飲みながら説明を聞くこととするならば　一人は使い古されたマグカップで飲むことになる。

雄介に分かるのは、今のところそれだけだった。

五章（前書き）

引き続き警告します。これは歌のレインボーガールを聴いていて閃いた、ハーレムラノベの皮を被った自己啓発小説です。主人公（男）にイラツとできない人や、最近の結末を書かないハーレムラブコメに慣れている人が読むと、最悪の場合死亡します。

この作品は全部で八章＋エピローグとなっています。上巻分の四章までは冬コミ前に、下巻分の四章以降は冬コミ後、しばらくしてからR18要素を抜いて投稿予定です。

少し予定を変更して五章を公開。エピローグまで校正は終わっているので、自分が生きているかぎり31日に本は出ます。

五章

雄介が働く同人ショップ猫の森は年中無休ではない。コミケとコミティア（関東）がある日は基本的に店を閉めている。

なぜ同人ショップにとっては書き入れ時であるイベントの日が休みなのか。それは店長自身がイベントに参加したいという単純で明快な理由からだった。

コミティアがある日の朝。目覚めた雄介はベランダに出て今日の天気を確認する。

空にはまだうつつすらと雲が張っていた。ただ、幸い雨は降っていない。昨日から降っていた雨は予報通り明け方にはやんでくれたようだ。

そのまま朝の空を眺めていると、ひんやりと冷たい風が雄介の体を通り過ぎていく。

（もう秋だな）

部屋に戻り、幸せそうに眠っている七海の横をゆっくりと歩き、キッチンへと向かう。まだ彼女は起こさない。

ベッドに座って淹れたてのカフェラテを楽しんでいると、しばらくして雄介の携帯から大音量で「GONG」が流れ始める。普段は時間になれば自然と起きてしまうのでアラームは使わない。ただ今日は絶対に遅刻できないので一応セットしておいた。

アラームの音に反応して七海がむくりと体を起こす。

「起きたか」

「……うん」

七海は手の甲で目をこすりながら答える。まだかなり眠そうだ。淹れたての熱いカフェラテを飲ませるのはもう少し目が覚めてからのほうがいいだろう。今手渡すと火傷する危険がある。

「……さて」

わずかに残っていたカフェラテを一気に飲み干し、雄介は行動を

開始する。

イベントの日だからといって朝やることはいつもと変わらない。会場に持って行く荷物の用意は昨日のうちに済ませてある。変化といえは弁当を作らないでもいいくらいで、その手間がなくなる分、起きる時間もさほど違いはなかった。

ニユースを見ながら朝食を済ませ、次にシャワーを浴びてヒゲを剃る。今日の朝食は和食にした。体を温めるならやはりパンより米だ。最新の予報では降水確率は10パーセント。午後には日射しも回復するが、気温はそれほど上がらないらしい。

「そろそろいくぞ」

「はい」

今日のイベントは七海も一緒だ。雄介は財布を開き、今一度サークルチケットが入っているのを確認し、部屋を出る。

「ふんっ」

気合を入れてカートを持ちあげ、素早く階段を下りる。カートには新刊と既刊がぎっしりと詰まっており、とても重い。

左手でカートを引っ張りつつ、右手で携帯を取り出し、星野にメールを送る。返事はすぐに返ってきた。彼女も予定通り、問題なく駅へと向かっている最中のようなのだ。

駅に近づくにつれ、雄介と同じようにカートを引く人がちらほらと現れる。

「あそこでカート引いてる人とか、もしかしたら、このままビックサイトまで一緒かもしれないですね」

「まあ、カートを引いてる奴とは九割九分一緒だろうな」

「そんなにですか？」

「ああ、そんなにだ。今日はコミュニティだからこんなもんだが、コミケのときはもっと多いし、分かりやすいぞ」

ホームで電車を待っている間も、一人二人とそれらしい人物が階段を下りてくる。

「たぶん、あいつもそうだな」

雄介はたった今階段を下りてきた男を視線で示す。

「どうしてそう思うんですか」

七海が不思議そうに聞いてくる。確かにその男はカートを引いているわけでも、見るからにオタクのような服装をしているわけでもない。ぱっと見ただけでは少し目つきが悪いだけの高校生だったが

「雰囲気で分かる。ジューズ一本賭けてもいいぞ」

そんなくだらない話をしながら電車を待つ。数分後、電車は時間通り到着した。

二人は先頭車両に乗り込んだ。席が一人分だけ空いていたので七海に座らせる。

星野とは次の駅で予定通り合流できた。

まずは彼女が、いつもと変わらぬ微笑を浮かべて言う。

「おはようございます」

それを受け、雄介と七海もいつも通りの笑顔で挨拶を返す。

新木場までの約一時間半、三人は普段通りにアニメやマンガの話を楽しんだ。

今日はいつもより星野がよく喋っていた。周りが同類ばかりなので恥ずかしさが薄れたのか、はたまた話すことでなにかを忘れようとでもしていたのか。

「なんか、もうそれっぽい人ばかりですね」

七海が言う。今はホームで国際展示場行き of 電車が来るのを待っていた。予想通り、雄介が同類だと判断した少し目つきの悪い高校生もまだ一緒だ。

「ジューズ一本、忘れるなよ」

「ちよ、本気だったんですか。てか、私は賭けるなんて言ってないですよ」

「賭けないとも言っていないだろ」

「そんな、キュウベえみたいなこと」

「なんの話ですか？」

ニコニコと笑いながら、星野が会話に割り込んでくる。

「二人で賭けてたんですよ。そこにいる黒いジャケットを着た人の目的地がビックサイトか」

「……へえー、そうだったんですか」

ずっと微笑を浮かべていた星野が、そのときだけ寂しそうに笑顔を曇らせる。

（七海と二人で賭けをしていたことを嫉妬してる……のか？）

それほど待たずに電車が来る。国際展示場駅に着くまでの四分間、星野はずっと黙っていた。

改札を抜けて外に出ると、後ろから聞きなれた声が聞こえてくる。
「雄介ー」

見れば、少し後ろに両手を上げた北斗がいた。彼の後ろには佐久間と鈴木の様もある。

北斗が加わったことで一気に賑やかになった。早起きのせいか本調子ではないようだったが、それでも充分にうるさい。

今日の会場は東の5・6だ。北斗、佐久間、鈴木の三人とは入り口で一旦別れる。サークルとしては今回初参加の鈴木とはジャンルが違った。彼女は少女マンガで、雄介は文芸だ。

ふ 18a。雄介の配置は今回も島中だった。

自分たちのスペースに到着すると、右隣のサークルはすでに準備万端で椅子に座っていた。一旦軽く挨拶を済ませてから雄介たちも作業に取り掛かる。

テーブルに布をかけ、その上に新刊と既刊を綺麗に並べる。次に布の前に垂れ下がった部分に宣伝用の絵を貼り付ける。

大きな看板や本棚のようなものは使わない。昔はあれこれ試したものだが、準備なんてレイアウトに悩まなければすぐに終わってしまう。

雄介たちの準備が終わる頃、左隣のサークルも到着する。右が

るんりーきゃつと』で左が『ビストロ ベレッタ』。今日は両脇とも初めて見るサークルだった。

「よし」

おつりに使う小銭は問題ない。提出する見本誌の用意も終わっている。あとは巡回受付さえ来ればいつ始まって大丈夫だ。

いや

「場所を換わってくれ」

テーブルの内側から作業をしていた雄介は外側に立つ七海に言う。一応、最後に自分の目で外からの見た目を確認しておきたかった。

本の位置を少しだけ調整する。やはり見た目は大切だ。どんな名作を書いたとしても、まず手に取ってもらえなければ始まらない。

そのうち看板やタペストリーなども使ってみたい。ただ、壁は無理だとしても、せめて島端に配置される程度にサークルが大きくなるまではやらないことにしていた。見た目ばかり気にして配布数を稼ぎ、それで島端を手に入れも意味がない。

ふと視線を上げる。

椅子に座り、こちらを見上げる二人の美少女。

太陽のように力強く、月のように美しく、一人でも充分に人の心を引きつける七海と星野。そんな魔性の輝きが、今日は感じられない。

彼女たちの微笑みは、どこか寂しげだった。

今の彼女たちなら、一般参加者をその圧倒的な輝きで逆に遠ざけてしまうこともないだろう。まあ、これはこれで近づき難い雰囲気を感じるのだが。

だからと言って、二人に元気を出せとは口が裂けても言えない。言えるわけがなかった。

二人にこんな顔をさせている原因は、九割九分、どう考えても自分なのだから。

雄介は彼女たちから視線をそらし、壁を眺める。

今日は店長も当然参加している。もう会場に入っているはずだ。

店長は雄介よりもずっと前からイベントに参加しており、今では壁サークルだった。

ここからでは見えないが、どの辺りにいるかはティアズマガジンで事前に調べておいたので分かっている。

今までチケツトは星野と北斗に渡していた。北斗は開場前からフラフラと歩き回り、雄介と星野はお留守番というのがこれまでの流れだったが

(店長の様子でも見に行くか)

もう準備も終わってしまった。どちらか一人をここから遠ざけるような用事もない。ならば自分が一度ここから離れる。今の雄介にはそれくらいしか、二人からこれ以上笑顔を奪わない方法が思い浮かばなかった。

「ちよつと、店長の」

様子でも見てきます。そう雄介が言いかけたところで

「やつほー」

北斗が完全にいつもと変わらぬ笑顔で近寄ってくる。もう目は覚めたようだ。

彼はプルタブの空いた缶コーヒーをテーブルに置き、動きを止める。そして指を缶コーヒーから離すことなく、再び持ち上げた。

「どうした？」

「ん、いや、こぼしたら大変だし」

「それは……そうだが」

いつもの北斗なら言われるまで気付かないようなことだったため、雄介は驚いた。

「準備は終わってるの？」

「ああ。そっちはどうなんだ」

「まあ、大丈夫でしょ。恵理子ちゃん、しっかりしてるし」

「で、お前はまたあてもなくフラフラしてたわけか」

「うん。ただ、ここには一応目的があっってきたけどね」

そう言うと、北斗は七海に視線を向ける。

「七海ちゃん、こういうイベントって初めてでしょ？」

「はい」

「一緒にまわらない？」

部屋を出て行くと言ったときのように、七海は雄介を見た。ただし、今回は一瞬だけ。

「……………いいですよ」

彼女は立ち上がり、外側に出てくる。

「とりあえず昼頃に帰ってくるから」

「それじゃ、いつてきます」

去っていく二人の背中を眺めながら、雄介は少しほっとしていた。

一緒にまわろうと北斗が言ってくれたことに七海は感謝していた。星野と雄介を二人にするのはイヤだったが、自分と星野のことを眺め、困った顔をする彼を見るのはもっとイヤだった。

北斗は雄介がいる列の端まで進むと、言う。

「七海ちゃんは、どこが見たいところはあある？」

「んー、とくには」

一応事前にカタログを見せてもらったのだが、サークルカットだけではここに行ってみたいという場所は見つけられなかった。

「ま、初参加じゃそうだよな。んー……。なら、とりあえず最初は店長の様子でも見に行ってみようか。あー、ついでにトイレ入っておいたほうがいいかもね。コミケほどじゃないけど、たぶんイベントが始まったら混むと思うし」

色々と見てまわるのはイベントが始まってからでもいいだろう。

七海は北斗の提案に従い、まずは店長の様子を見に行くことにする。

「てーんちよ」

「おお、長月か。お前が様子を見に来るなんて珍しいな」

「今日は七海ちゃんがいるんで」

スペースには店長のほかに一人ずつ、美形の男女がいた。男のほうは一度だけ一緒に働いたことがある。あれは確か、星野と佐久間が休みの日曜日だ。

もう店長たちの準備も終わっていた。七海たちがそのままスペースの前で雑談していると、しばらくしてイベント開始のアナウンスが流れる。

「始まったな」

店長たちは楽しそうに笑い、一斉に拍手する。

一度近くのトイレに寄ってから七海たちも行動を開始する。といっても明確な目的地はないので、とりあえず会場の端から順番に攻めていくことにした。

素敵な絵があれば立ち止まり、近くで見えてさらに気に入れば、購入する。そうやって七海と北斗はゆっくりと進んでいく。

二 分後

「うっ」

四分の一も見てまわらないうちに、持ってきたトートバッグがずっしりと重くなる。そして反比例するように、財布はすっかり軽くなってしまっ。

「それ、持つよ」

北斗が言う。彼は七海と違い、まだ全然本を買っていないかった。

「えーと……、お願いします」

お言葉に甘えて、七海はトートバッグを北斗に預ける。

(……やっぱり、男の子なんだなあ)

重そうな素振りも見せずトートバッグを持ってくれる北斗を眺め、七海は思った。

しばらく歩くと、七海はまた素敵な本に出会ってしまっ。

「……………」

すごく欲しい。が、もうほとんどお金がない。

「お金、貸そうか？」

あえて口には出さなかったが、じつと本を見つめすぎたせいで欲

しいのが伝わってしまったらしい。

「返すのはいつでもいいよ」

「……ありがとうございます」

買った本は北斗のバッグに入れ、七海が持つことにした。さすがに無期限でお金を借りて、そのうえトートバッグをこれ以上重くはできない。

またしばらく歩いていると

「へえ、こんなもあるんですね」

そこはオリジナルの小物やアクセサリーのスペースになっていた。どれもこれも、すごくかわいい。特にハートの模様が編み込まれた携帯ストラップを、七海はとても気に入った。

ただ

（一個なら手持ちで足りるけど、二個買おうとすると百円足りない）
このかわいいストラップを、できることなら彼とおそろいでつけたかった。

（今の雄介さんだったら、きっと受け取ってくれるのに……）

七海が雄介の部屋に戻ってから、彼は変わった。理由は分からないが、以前よりも少しだけ優しくしてくれるようになったと彼女は感じていた。

「あ」

横からすつと手を伸ばし、北斗がストラップを手取る。

「このストラップ、一個ください」

北斗も変わった。こちらも理由は分からなかったが、彼の場合、最近気が利くようになったと七海は感じていた。

「これ、お金はいらないから」

「え？」

「色々と迷惑かけたし、お詫びつてことで」

七海は考えてみる。しかし北斗に感謝することはあっても、謝られる心当たりなどなかった。

視線をそらし、北斗が言う。

「七海ちゃんが帰ったあと、結局姉貴に七海ちゃんを泊めてたのバ
レちゃったんだよね。で、最初は無理やり話を聞き出されてたんだ
けど、そのうち心配されちゃってさ。『お前はエロ本の読みすぎだ。
私が三次元の女心ってやつを教えてやる』って。それからいつもは
強引で凶暴な姉貴と初めて真面目に話をして、色々と教えられたん
だけど。あの……やっぱり気軽にその日のパンツの色を聞かれたり、
バッグに発信機を入れられたりするのって、嫌……だった？」
(なんだ、そんなことか)

確かに北斗の行動は非常識だったと思う。が

「別に、私は気にしてませんよ」

二次元の頃には、もっとハチャメチャなキャラに囲まれた日々を
何度も何度も繰り返した。そんな七海にとって、この程度の非常識
などたいしたことではなかった。

「ほ、本当に？」

「ええ」

さらに言えば、ツイスターで鼻息を荒くしたり、何度かお風呂を
覗かれかけたことも七海は気付いていた。そして男ならこれくらい
性欲を持て余しているのが普通だろうと思っていた。だからこそ、
北斗が自分に特別な感情を持っていることを直前まで気付けなかつ
たのだ。

「そ、そっか」

七海の言葉に、戸惑いながらも北斗はホッとしたようだった。

その場でストラップを携帯に取り付けてから、七海は歩みを再開
する。

ストラップは一つで満足することにした。『雄介さんとおそろい
にしたいから二個欲しい』なんて言えば、北斗がどう思うか。それ
くらい、七海にも分かっていた。

ちょうどお腹が減り始めた頃、七海たちは小説の列まで戻って
くる。

ふと、威勢よく客引きをしているサークルが七海の目に止まる。マンガと比べ、あまり小説には興味がなかったのだが、とてもさわやかで明るい客引きに二人は足を止めてしまう。

「さあ見てくださいお嬢さん、どうですかこの挿絵。僕が描いたんですけど遠近感のない酷い絵だと思いませんか。それに比べてこっち、ちゃんと遠近感があつてカッコいい挿絵ですよ。お金がない？ならば通常一冊五百円のところを一、二、三巻をセットで六百円でどうぞだ」

小説の中身より、もしかしたらこの人たちを眺めているほうが楽しいのではないか。そんなことを考えてしまうほど愉快的客引きだった。

どうやら今度はおだてる作戦らしい。サークルの人が北斗に言う。「それにしてもうらやましいねえ、大将。こんなかわいい彼女さんがいて。今日はコミティアデートですか？」

(……ん?)

七海にとって北斗は恋人ではない。

しかし

(恋人じゃなかったら、なんだろう?)

「いやあ、七海ちゃんとは、まだ友達なんで」

友達。

北斗がニヤニヤと笑いながら恋人であることを否定するまでの一瞬。七海には、その言葉がなぜか思いつかなかった。

小説は初動が遅い。

イベントが始まってからも、しばらくは静かな時間が続いていた。スペースの前を通り過ぎる参加者もいなければ、二人の間でこれといった会話もないまま、時間だけが過ぎていく。

二人ともあまり積極的に喋るほうではない。イベント中、口数が

少ないのはいつものことだ。ただ、今回はあまりにも少なすぎた。七海がいなくなっただけから、二人はまだイベント開始直後の一度しか言葉を交わしていなかった。

——時半。イベント開始から三分が経過し、やっと一般参加者がちらほらとスペースの前を通り過ぎるようになる。

「人、あんまり来ませんね」

星野が言った。

「えっ……ええ」

雄介は少し驚いた。あまりにも沈黙が続いたせいで、もう本が売れるまで彼女は話しかけてこないだろうと思っていたのだ。

「……………」

久しぶりの会話があっさり終わってしまった。

雄介自身は星野と話をしたくないわけではなかった。やろうと思えば一方的にアニメや小説の話延々と続けることはできる。ただ、このタイミングで自分からそのような話をするのは、なんというか、すごく場違いな気がした。

もちろん星野がいつも通りを望んでいるのなら、そうするまでだ。今日だって、会場に着くまではいつも通りを望んでいたと思う。

しかし会場に到着してから、特に七海がいなくなっただけから星野の雰囲気が変わったことを雄介は強く感じていた。

咄嗟にうまい言い訳も思いつかなかった。いや、たとえ何日考えてもあの状況を切り抜ける言い訳など思いつかないだろう。だからあの日、雄介は七海を起こすと、彼女の口から星野にありのままの真実を伝えてもらった。

すべてを伝えた直後、星野は「分かりました」とだけ言って、その日は帰った。そして今日まで何度か二人で話せるチャンスがあったにもかかわらず、彼女はあの日話せなかった挿絵のこと以外、なにも聞いてこなかった。

だが一度説明されただけですべてを納得できるわけがない。なに

も気にならないわけがない。絶対に、聞きたいこと、言いたいことを胸に秘めているはずなのだ。

そんな星野が再び口を開いたのは、短い会話が終わって一五分ほど経ってからのことだった。

「あの、お弁当……食べませんか？」

イベントのときは毎回星野が弁当を作ってくれる。北斗は適当にコンビニで済ませてしまつたためこれまでは二つだったが、今回は七海の分もあった。

雄介は弁当箱を受け取り、太股の上で広げる。

「いつもありがとうございます」

「好きでやってることですから、気にしないでください」

ほんのわずかに星野は頬を緩める。

いつもは料理のことなどを話しながらの昼食も、今日は静かなものだった。

雄介が弁当を半分ほど食べ終わった頃、ようやく星野が聞いてくる。

「お弁当、おいしいですか？」

「はい、すごくおいしいですよ」

自分が作る弁当よりも旨い。雄介は本当にそう思っていた。

「……ありがとうございます」

そう言つて彼女が微笑みを浮かべるまで、なぜか若干の間があった。

「どうかしましたか？」

「いえ……別に……」

それっきり、弁当を食べ終わるまで星野は黙つてしまつた。

「ごちそうさまでした。本当に、おいしかったです」

「……………」

星野は無言で弁当箱を受け取る。

白い花柄のバッグに弁当箱を戻すと、彼女は小さなため息をついた。

「守屋さんって、私に敬語ですよね」

「……そう、ですね」

「どうしてですか？」

なにか聞かれたら、真面目に答える覚悟だけはしていた。ただ、こんなことを聞かれるとは思わなかった。

「別に、深い意味はないですよ。まあ、元々星野さんはファン第一号だったから、その名残というか……。そもそも、女性には全員敬語を使ってるじゃないですか」

「じゃあ、どうして七海ちゃんだけには敬語じゃないんですか？」

「……………」

言われるまで忘れていた。確かに七海には敬語を使っていない。

「私、前々からなにかあるなっと思って思ってたんです。七海ちゃんと守屋さん、仕事の先輩後輩にしてはちょっと仲が良すぎる気がするなっつて。まさか、あんな事情があったなんて思いませんでしたけど」
彼女は俯いたまま横目でこちらを見た。

雄介はふと、恋人に浮気がバレて問い詰められているような気分になった。

「最初、信じられませんでした」

「そりゃ、自分もいきなり部屋にいるのを見たときは幻覚だと思いましたが」

「いや、そつちじゃなくて」

「？」

「守さんが、そういうゲームを、それも同じやつを一年以上やり続けてたことが」

「ああ……………」

わざわざ話題にすることでもないから言わなかったただけだったが、それも秘密といえば秘密だった。

「そんなに驚きましたか」

「ええ。だって、守屋さんには
私がいるのに。」

「えっ？」

とても小さな声だったため、はっきりとは聞き取れなかった。しかし雄介には、星野の唇がそう動いたように見えた。

「だから……その……七海ちゃんは、守さんが一年以上もやり続けたゲームのヒロインなんですよね」

雄介はちらりと左右のサークルの様子をうかがった。どちらも一般参加者がスペースの前を通り過ぎるたびにそわそわしている。どうやらこちらの会話を聞く余裕はなさそうだ。

「七海ちゃんには、今年いっぱい部屋から出て行ってもらおう予定だって聞きましたけど」

「……はい。ずっと一緒に暮らす理由はないですから」

あの日、七海は星野に事情を説明した。それには部屋から出て行った理由も含まれていた。だが理由を知ったあとでも、雄介の考えは変わらなかった。

「私、それがよく分からないんです。守さんにとって、七海ちゃんは理想的な女の子だったからこそ、彼女が出てくるゲームを繰り返し遊んだんじゃないんですか？」

「別に、理想的ってわけじゃないですよ。まあ……確かに繰り返しプレイするくらいには気に入ってましたけど……」

先ほどから星野がなにを考えているのか、雄介にはいまいち分かんなかった。悲しんでいるようでもあり、怒っているようでもあり、ずっと静かだと思ったら、いきなりよく話すようになったり

(まさか、拗ねてるのか?)

それはとても都合の良い妄想に思えたが、あながち間違ってもいないような気もした。

「なら、どうして守さんは七海ちゃんを彼女にしないんですか」
今まで俯いたまま喋っていた星野がこちらに顔を向ける。彼女は少し不機嫌そうな顔で睨みつけてきた。怒っているのではなく拗ね

ているのだと考えれば、それはとてもかわいい表情に思えた。

「どうしてって、そりゃ、理想と現実の違いですから。それに……そんな単純で簡単な話でもないですし」

「それだけですか？」

「……？」

「たとえば……」

星野はためらうように視線をそらすと、頬を綺麗なピンク色に染め上げていく。

「私が、いるからとか」

すぐには意味が分からなかった。そして意味を理解した瞬間、自分でも信じられないくらいに心臓が跳ね上がった。

彼女がそらしていた視線を戻す。

(くっ……)

たったそれだけのことで、再び心臓が跳ね上がる。

雄介はゴクリと唾を飲み込んだ。

「あ……」

まるでそれが催眠術を解く合図になったかのように、星野はふつと我に帰ると、再び素早く顔をそらした。

「ごめんなさい。私、なんか焦っちゃって……」

彼女は知っている。前の恋で雄介がどれほど傷ついたかを。だからこそ、友達以上恋人未満の関係を続けていた。そして、いずれは自分が恋人になると信じていた。しかし七海の正体を知ったことで、安心して信じられなくなった。そういうことなのだろう。

これで話は一旦終了かと思ったが、予想外にも彼女は間を空けることなく続けてきた。

「ただ……できれば教えて欲しいんです」

そらされた顔が、ゆっくりと戻ってくる。

「私はまだ、期待してもいいのかわ」

完全に顔がこちらを向き、雄介はもう一度、今度は上目遣いで見つめなおされる。

「もし期待してもいいというのなら……私に敬語を使うのはやめてくれませんか？」

弁当を食べ終わってからの星野は、雄介が知っている控えめで清楚な彼女とは全然違った。

だが、それがいい。普段が完璧なほど、子供のようになんかどうしてどうしてと尋ねてくる彼女が、とてもかわいく思えてしまう。

そして、最後にとどめの上目遣い。

「……分かった」

七海たちが帰ってきたのは、それからしばらくしてのことだった。

「んじゃ、僕はコンビニ行ってくるよ」

「いつてらっしやーい」

北斗を見送ると、七海はあらためて二人　並んでパイプ椅子に座っている星野と雄介に目を向ける。

(なにかいいことでもあったのかな)

七海は思う。これといった変化の見られない彼と違って、星野の表情は会場に到着した直後より格段に良くなっていた。

(……気になる)

が、すぐに「なにかあったんですか？」と聞けるほど七海も純粹無垢な鈍感ではない。特に彼がいる前では、あまり聞きたくなかった。

「どうしますか？」

星野が言う。

「順番、私はどっちでもかまいませんけど」

「……なら、俺が先に」

「はい」

カートの中からバッグを取り出すと、それに新刊を何冊か入れ、彼が外側に出てくる。

「いつてらっしやい」

スペースから遠ざかっていく彼を、星野はとても綺麗な微笑を浮かべて見送っていた。

「お腹、空いてるよね」

彼のぬくもりが残る椅子に七海が腰を下ろすと、さっそく星野が話しかけてくる。

「これ、お弁当」

「ありがとうございます」

弁当箱を受け取り、蓋を開ける。

(うつ……やっぱりすごい)

七海はまず見た目で圧倒された。別に豪華な食材を使っている重箱弁当というわけでもないのに、中身を見ただけでよだれが垂れてしまいそうになる。

「……いただきます」

まずはエビフライから手をつける。次にだし巻き卵。ポテトサラダ、そぼろご飯……

「おいしい？」

「はい、とっても……」

ムカつくほどに、おいしい。もしかしたら彼の作ってくれる料理よりも。

「ありがとうございます」

七海の答えに星野は満足げに微笑むと、彼の書いた小説を読み始めた。

普段ならおいしいものを食べれば幸せな気分になれる。ただ、この最高においしいお弁当は彼女が作り、同じものを彼も食べたと考えると、なんだか悲しくなってくる。

おいしいかどうか聞かれた以外、食事中に会話らしい会話はなかった。星野はずっと小説を読んでいたし、七海からもあえて彼女に話しかけたりはしなかった。

そろそろお弁当を食べ終わりそうになった頃、携帯が鳴った。浜辺の洞窟を通り抜けていく風のようなイントロ。初音ミクの名曲「メルト」は七海のメール受信音だ。

ポケットから携帯を取り出し、メールを確認する。送信相手は北斗。内容は「なにか買っていくものとかある？」というものだった。飲み物は暖かいお茶を星野が用意してくれている。今のところ欲しいものはない。

一旦携帯をテーブルに置き、先にお弁当を食べきってから返信する文章を作成していると、

「それ、かわいいね」

星野が言った。それとはさっきまで着けていなかったこの携帯ストラップのことだろう。

「北斗さんと見てまわってるときにプレゼントしてもらったんです。

……お弁当、ありがとうございます。本当においしかったです」
弁当箱を包みなおし、星野に返す。

彼女は受け取った弁当箱をバッグにしまつと、小説を手に取り置いた。

「七海ちゃんって、長月さんと仲がいいよね」

「……そうですね」

本人にそう呼んで欲しいと頼まれ、最近はずっと北斗さんと呼んでいた。だから長月と聞いても、一瞬誰のことか分からなかった。

「好きなの？」

「え？」

「だって長月さん、なんていうか、その……」

はつきりとは言わなかったが、彼女がなにを言いたいかは分かる。「まあ、雄介さんと比べたらえつちだと思えますけど。男の人ならあれくらいが普通なんじゃないかと」

「……そうなのかな。でも、私はああいうの、ちょっと苦手かも。

もちろん好きな人からなら、平気だよ。だから七海ちゃんもそうな

のなつて思つて聞いてみたんだけど……」

「……………」

すぐには答えられなかった。

北斗と自分は恋人ではない。なりたいたも考えていない。

友達　　というのが正しいはずなのに、さつきはなぜかその言葉が思いつかなかった。

いや、確かに彼と北斗に求めるもの、向ける気持ちは違う。しかしあらためて考えてみると、同僚で友達の佐久間とも、北斗は違う存在に思えた。

友達でもなく、恋人でもない。

(じゃあ、なんなんだろう)

考えるほどに北斗が分からなくなる。二次元時代なら友達、恋人彼の三つはほぼ同じものであり、こんなに悩む必要もなかったのに。

「私は、いいと思うよ。七海ちゃんが長月さんのことを好きでも」

「……………え？」

「ちょっとえつちだけど、根は楽しくていい人だと思うし。それに七海ちゃんはもうゲームのキャラクターじゃないんでしょ？　なら

雄介さんと恋人になる義務はない」

「……………」

七海が黙っていると、星野は再び小説を読み始めた。

しばらくして

「こんにちは」

車椅子に乗った一人の男性がスペースの前までやってくる。

「新刊、ありますか？」

「はい、もちろんありますよ」

「一冊ください。あと、これ」

そういつて彼は五百円玉と飴玉の入った小袋をテーブルに置いた。いつもありがとございます」

星野から新刊を受け取った男は一つ横のサークルに移動すると同

じように新刊を買い、飴玉を渡していた。

隣のサークルは本が売れたことを泣いて喜んでいる。さすがに七海は泣かなかつたが、それでも彼が一生懸命書いていた小説が売れば嬉しい。テンションが少し上がる。

「やっと売れましたね」

「うん」

星野も嬉しそうに笑う。

「なかなか売れないし、もしかしたらこのまま一冊も売れないのかと思ってましたよ」

「ふふ。さすがに一冊も売れないなんてことはないって。さっきの人みたいに昔からのファンで、毎回買ってくれる人がいるから。そんなに多くはないけどね。たぶんあと三冊は売れてくれるはずだよ」

彼女はテーブルに並べられた小説たちを眺める。

「これまで一番売れているのが、この三冊目かな。七海ちゃんは、どの本が一番好き？」

「あー……私、実はまだ一冊も読み終わってないんです」

漫画やアニメでは問題ない。しかし小説 紙に文字しか書かれていないものを見てみると、なんだかデジタル的というか、二次元時代を思い出して悲しくなってきたりするのだ。

「……へえー、そうなんだ」

星野の浮かべる笑顔、向けてくる眼差しが変わる。とてもわずかな変化だったが、七海は敏感にその変化を感じ取っていた。

一旦会話が止まる。彼女は小説を読むことなく、うつむいてなにか次の作戦でも考えているようだった。

「小説は読まなくても、漫画やアニメは見てるよね。七海ちゃんはカッコいいなーって思う男キャラとか、いない？」

「そりゃ、いますけど」

「私もいるよ。ちよつと古くて意外と思うかもしれないけど、オーフェンとかすごく好きかな。知ってる？」

「分からないです」

「原作は小説だけど、アニメ化もされたから今度見てみるといいよ。すごくカッコいいから。ただ……恋人にしたいとは思わないけど」

「……………」

最後まで言わなくても、彼女の言葉の一つ一つがとても重い攻撃となつて七海を苦しめる。

彼が好きだといいいながら北斗にいやらしい目で見られて嬉しいんだろう。あなたなんか北斗ルートに進んでしまえばいい。普通、好きな相手のことなら気になるものなのに、小説を一冊も読んでないなんて、彼を本当に好きなのか？ 恋人にふさわしいのは元二次元のおあなたじゃない、昔からのファンだった私だ。

微笑を浮かべながら、彼女も心の中ではきつとこんなことを考えているのだろう。

しかし考えて当然だ。割り込んだのは自分なのだから。そして彼女は正しいことしか言っていない。正確には自分の想像でしかないが、一つも反論する言葉が思いつかない。それが七海には悔しくて悲しかった。

気を抜くと泣いてしまいそうだった。七海はスカートをぎゅっと握り締め、なんとか耐える。

と

「ごめんなさい」

不意に星野が謝ってくる。

「なんか調子に乗つてたよね。守屋さんの正式な恋人つてわけでもないのに、『私が彼女です』みたいなこと言っちゃって」

彼女は本心から謝罪しているようだった。さっきまでは見え隠れしていたトゲのようなものが嘘みたいに消えている。

「私のほうこそ、ごめんなさい。なんだか気を使わせちゃったみたいで。全然気にしてませんから」

七海はニツコリと笑い平気なフリをする。

「無理して嘘つかなくてもいいよ。今は守屋さんもないんだし」

「……………」

「ねえ、今のうちに、一度本音で話し合っておかない？」

星野は真剣な眼差しでじっと見つめてくる。

「……そう、ですね。はい、嘘です。詩織さんの言うこと、すごく痛かったです」

「やっぱり、そうだよ。……言い訳、してもいい？」

「どうぞ」

「ありがとう」

彼女は一度頭の中を整理するようにしばし沈黙したあと、ゆっくりと語りだす。

「七海ちゃんが守屋さんのことを好きなのは最初から気付いてた。

そのうえで私は自分が守屋さんの恋人になるものだと　むしろもう恋人と呼んでもいい関係だとすら思ってた。けれどそれは大きな勘違いで、恋人に近いのは七海ちゃんのほうだった。

真実を知って悲しかった。悔しかった。ちよつと腹も立った。だから私、自分からはなにも聞かないで守屋さんから言い訳してくれるのを待ってたんだ。

アドレスは知ってるし、今日まで何度か二人で話すチャンスもあった。それなのに守屋さんからはなにも言い訳してくれなかった。だから私、だんだん不安になってきちゃって。結局、さつき私から聞いちゃったんだ。私にもまだチャンスがあるのか　もしあるなら私に敬語を使うのはやめて欲しいって。守屋さんは『分かった』って答えてくれた」

まるでバットで背中を殴られたかのような衝撃を七海は感じた。まさか言い訳の中に攻撃が混ざっているとは思わなかった。

「私、嬉しかった。それでつい調子に乗って、いじわるしちゃったってどうか。冷静に考えてみれば、チャンスがあるって分かっただけで、それ以外になにか状況が好転したわけじゃないのにな」

「チャンスだとか、好転だとか、そもそも雄介さんの恋人に近いのは詩織さんのほうじゃないですか」

なぜなら彼は自分を呼び戻すのではなく、彼女を家に連れ込むことを選んだのだから。

「そんなことはない、不安だよ。だって守屋さん、こんなにかわいい女の子と一つ屋根の下で暮らしてるんだもん。隣の部屋に住んでるっていうなら、まだ話は変わってくるけど」

「別に、かわいくないですよ。詩織さんに比べたら、私なんて……」

「七海ちゃんはかわいいよ。胸だって、ちょっと負けてるし」

すねるように口を尖らせ、星野に胸をにらみつけられる。こんな彼女の姿、見たことがない。これが飾らない本当の彼女ということなのだろうか。

「でも、それだけです」

自分にはさつき食べたお弁当みたいにすごいものは作れない。歌も上手くなければ気も利かない。戸籍も、保険証も、ずっと三次元の存在でいられる保障も

「私には少し胸が大きいこと以外、なにもない。けど、詩織さんにはある。雄介さんと恋人になる権利が」

「七海ちゃんにだって権利はあるよ。それに守屋さんを好きな気持ち、あるんでしょ？」

「それならあります」

七海は即答する。悩むまでもない。彼を好きな気持ちなら誰にも負けないつもりだ。

「なら、権利はある。それだけじゃない。人の心も、好きな人に触れられる手も、一緒に歩くことのできる足も、仲良く一緒に暮らし続ける可能性も、いっぱいある。七海ちゃんはもう、現実に生きてご飯も食べる一人の女の子なんだから」

「全部、詩織さんだって持ってるものじゃないですか」

「そうだね。だから私にもチャンスはある。そして七海ちゃんにも」

星野はこれから真剣勝負を始める棋士のような眼差しを向けてくる。あくまで彼女は七海のことを対等なライバルだと認識しているらしい。

「本当に、詩織さんは私なんかにはチャンスがあると思ってるんですか？」

「もちろん。私は守屋さんの言葉を信じてるから」

七海が眉をひそめると、星野は得意げに笑った。

「『どんなに遠く離れてしまっても、たとえ相手に恋人ができようとも、いずれ二人は再会し、結ばれることだろう。それが二人の運命だと、君が信じ続けるかぎり、絶対に……』。『大切なのは今、二人がお互いをどう思っているのかだ。義理も義務も責任も、今はすべて忘れて。僕らの愛に比べたら、すべては些細な問題だ』。この本に、そう書いてあるから」

彼女はテーブルに並べられた小説の一つを指で示す。

「雄介さんが、まさか……」

キーボードで彼がそんな甘い言葉を打ち込んだなんて、どうしてもイメージできない。彼は基本的に優しいが、これは甘すぎる。勝ったほうが正義とか、そういう言葉のほうが似合っている。

「意外に思うのは、きつとこの本を書いたのが二年前　まだ守屋さんに恋人がいた頃だからじゃないかな。私は、この本が一番好き……だった」

「今は、違つんですか？」

「守屋さんに恋人がいた頃は励みになつたけど、今は……状況が違つし」

確かに積み重ねがある人間にとって『今が大切』という言葉は救いにならない。星野が不安になる気持ちも少し分かった。

「私は自分が守屋さんの運命の人だと信じてる。ただ、このまま守屋さんと七海ちゃんが恋人になるのを黙って見ていることはできない。だからこれからはもっと積極的になろうと思う。もう一度フリーになる日を待つなんて無理だし」

それはそうだろう。もし相手のことを本気で好きならば、待てるのは一度だけ　二度目はない。心が壊れてでもないかぎり、二度も信じて待つなんて不可能だ。

「でも遠慮はして欲しくない。むしろ七海ちゃんにも諦めて欲しくないと思ってる」

「それは、どうして？」

「建前から言えば、七海ちゃんの悲しむ顔は見たくないし、可能性があるのに諦めるのなんてもったいないと思うから」

「……本音を言えば？」

「七海ちゃんが部屋からいなくなったのをきっかけにしたくないの。いくら守屋さんのことが好きでも、保険みたいに扱われるのはイヤだから。七海ちゃんには恋人になるにしろならないにしろ、部屋からいなくなるまえに白黒はつきりとさせて欲しい」

「……………」

星野はこう言っているのだ。時の流れに任せて緩やかな終焉を迎えるのでは満足できない。もう一度彼にアタックを仕掛け、部屋からだけでなく心の中からも綺麗に消え去って欲しいと。

まったく、彼女も酷なことを望むものだと思う。

しかし

「分かりました。いいですよ」

積極的になった星野に勝つのは厳しいだろう。ただ、二年前の彼の言葉を信じるなら、自分にもまだチャンスはある。なら今諦めてしまうのはもったいない。

「ありがとう。それじゃ、これからは私たち正式にライバルだね」

「はい」

二人はニツコリと笑い合う。

星野はどうだか知らないが、七海の笑顔は作り笑いではなかった。彼女も完璧超人じゃない。不安にもなるし、嫌味だって言う。本音で話し合ったおかげで、やっと彼女のことをリアリティのある一人の女の子として見れるようになった。

(でも、やっぱり詩織さんはすごいな)

どう考えても戦意を喪失させるほうが楽で安全なのに、彼女はそうしなかった。それは自分に自信があり、さらに優しい心を持って

いなければできないことだ。

会話も一段落したところで星野は小説を手取る。そしてページも読み終わらないうちに彼女はパンと音を立てて小説を閉じた。
「うん、決めた」

スペースの外に出た雄介は一旦小説たちの前を素通りし、柱まで移動する。

「はあ……」

コミケでは問題だが、コミティアに柱や壁際で立ち止まっていけないというルールはない。背中を柱に預けてため息をつく、雄介はそのまましばらく休憩する。

なんとというか、すごく疲れてしまった。スペースの中にいる間、ずっと緊張していたような気がする。

五分ほど休んでから雄介は歩き出す。気力が完全に回復したわけではないが、ずっと休んでいても仕方がない。

雄介は七海たちの前を通らないようにお気に入りの小説サークルへ向かった。

「こんにちは」

「お、どうもお久しぶりです」

彼 ペンネーム店長ストライパーは手元のPSPから視線を雄介に向け、挨拶を返す。

「新刊は」

さっそく聞く。もう売切れてしまったのだろうか、ぱっと見た限り、テーブルには既刊しか並べられていなかった。

「いやー、すいません。今回はちよつと落としちゃいまして」
とても爽やかな笑顔を浮かべて彼は答える。

（なんなんだ？）

彼は前にも一度新刊を落としたことがあり、そのときはもっと申

し訳なさそうにしていたのだが……

ふと、彼の横に膝掛けの置かれた椅子があることに雄介は気付く。彼が椅子を追加するなど今までのイベントではなかったことだ。

(女……か)

おそらく間違いないだろう。

彼は落とした理由を聞いて欲しそうにこちらを見つめてくる。が、雄介はあえて気付かないフリをした。彼の書く小説に興味はあっても、ノロケに興味はない。

自分の新刊を渡し、次のお気に入りサークルへと移動する。

「こんにちは」

「……こんにちは」

彼 ペンネームビッグマウスはなにをするわけでもなく下に向けていた視線を雄介に向け、今にも消えてしまいそうな声で挨拶を返す。

「新刊は」

聞く。こちらのサークルもテーブルには既刊しか並んでいなかった。

「……………ごめんなさい。最近、ちょっと書ける気分じゃなくて」
彼は申し訳ないというより、なにやら疲れきってしまったという感じだった。

どうやらこちらは別れたことが原因のようだ。見たところ、これまでずっと一緒に参加していた女の子がいない。椅子も一脚しかないことから、買い物に行っているだけというわけでもなさそうだ。

恋愛が原因で新刊を落とす。そんなサークルに連続で当たっても、雄介は新刊がなくて残念だということ以外、これといって思うことはなかった。いっそ彼らのことを「三次元に恋するなんて馬鹿な奴らだ」と笑えれば楽なのだが、まだそこまでの境地には達していない。

新刊がないならここにも長居は不要だ。雄介は自分の新刊を渡すと移動する。

雄介は店長の様子でも見に行くことにした。ほかにもお気に入り
の小説サークルはあったが、どれも自分のサークルから近い。残り
は戻るときにでも寄ればいいだろう。

店長のサークルがある壁まで移動すると、タイミングが良かった
のかサークル前には一般参加者の姿はなかった。

「こんにちは」

「あ、守屋君」

宮元は読んでいた本をテーブルに置き、にっこりと笑う。

彼女 宮元あずさは雄介の二つ年上で、二年前まで一緒に猫の
森で働いていた元先輩だ。個人的な交流はそれほどなく、彼女が仕
事を辞めてからは年に数回ビッグサイトで会う程度の関係だった。

「店長と桂木さんは？」

「二人ともついさっき買い物に行ったところ」

桂木は雄介の三つ年上で、こちらも二年前まで一緒に働いていた
元先輩だ。状況が変わっていないければ宮元の恋人でもある。

「呼び戻そうか？」

「いいですよ、新刊は宮元さんから渡してもらえば、それで」

雄介は新刊を二つ取り出し、彼女に手渡す。店長には店で渡せば
いい。

「やっぱり表紙は詩織ちゃんなんだ」

「変える理由もないですから」

「まあ、そっだよな」

彼女はしばらく表紙を眺めてから、本のあらすじでも尋ねるよう
に言った。

「詩織ちゃんとは相変わらず？」

初めての恋人に振られ、次のイベントから隣に座る人物が星野に
変わったこと。しかし雄介は星野を恋人とは認めていないこと。それ
くらいなら年数回ビッグサイトで会う程度の彼女でも知っていた。

「……そうですね」

変ってはいないと思う。まだ、ギリギリ。

「そっか」

声も表情も大きな変化はない。ただ、雄介には彼女を落胆させてしまったような気がした。

そんな想像とは裏腹に彼女は幸せそうに微笑むと、手の甲を上にして左手をテーブルに置く。

「私は変ったけどね」

見れば、彼女の左手の薬指にはシンプルなデザイン指輪がはめられていた。

「結婚したんですか？」

「うん。式とかはやらなかったんだけど、二ヶ月前に」

「おめでとうございます」

祝福の言葉を口にしながら、雄介はなぜかここに来る直前に寄ったサークルを思い出した。恋人ができたほうではなく、別れたほうだ。

二人が別れるとは思っていない。別れて欲しいとも思わない。ただ、二人が幸せな結婚生活を五年後十年後も続けているとは、やはり雄介には想像できなかった。

自分に特別な感情がないことが確定しているからだろうか。もしかしたら宮元が恋愛系の話を避けてくれたおかげかもしれない。気付けば結構な時間、雄介は話し込んでいた。

一通り話して話題が尽きたところで雄介は移動する。次はサークルとしては初参加の鈴木の様子を見に行くことにする。

少女マンガのスペースに足を運ぶのは久しぶりだった。昔は気に入りのサークルもあったのに、最近は全然読まなくなってしまった。恋愛の真実を知ってしまったからかもしれない。

列しか覚えていなかったが、鈴木サークルはすぐに見つかった。「売れ行きはどうですか？」

テーブルには同人誌が二十冊ほど並べられている。メールで初めて本を作るなら何冊くらい刷ればいいのかを聞かれ、雄介は五十冊と

答えていた。もしテーブルに全部並べていたとしたら、もう半分以上売れたことになるのだが

「まだ、五冊しか……」

鈴木はうつむいてしまう。悔しいというより、期待を裏切ってしまったって申し訳ないといった感じだった。

「まあ初参加ですし、これからですよ。そもそも、五十冊ってのは一回のイベントで売り切ることを考えた量じゃないですから」

「そうですね、初参加でいきなり五十冊なんて売れるわけじゃないじゃないですか。もっと気楽に行きましょうよ」

隣に座る佐久間が雄介のフォローにすかさず乗っかる。もしかしたらこの売れ行きのせいで相当気まずい雰囲気だったのかもしれない。

「つと、そうだ。雄介先輩、忙しいですか？」

「いや、別に忙しくはないが」

「鈴木さんと話すなら椅子使っちゃってください。僕、ちょっと買い物行ってきますんで」

立ち上がり、佐久間が外側に出てくる。あまり長居するつもりはなかったが、せっかくなので使わせてもらうことにする。

大体一五分くらいだろうか。雄介は鈴木と本を交換し、それからイベントや創作についての話をした。

(そろそろ戻るか)

雄介は立ち上がるのと椅子から背中を浮かせる。

「あのっ」

すると、まるで引き止めるように鈴木が言う。

「実は、悩んでることがあって……」

「なんですか？」

まだ慌てるような時間じゃない。雄介は背中を戻し、鈴木の悩みを聞いてみることにした。

「えっと、その……」

鈴木は非常にゆっくりとしたペースで悩みを教えてくれた。要約

すると、『会社で男の人に今度二人で食事でもと誘われているが、どう答えていいか分からない』らしい。

「……………」
雄介は考える。

鈴木が自分に特別な感情を持っていることは気付いていた。とても控えめな性格のせいで、逆に読み取りやすかった。

自分がモテることを自慢したいわけではないだろう。ならばどうしてこんなことを聞くのか。

この相談は、深読みすれば告白とも受け取れる。いや、そんなに気合の入ったものではないかもしれない。ただ、彼女の性格を考えれば、こんな分かりにくい告白はいかにもありそうだと思った。失敗しても長く気まずい関係にならないですむ。そんなところも彼女らしい。

もし食事することに否定的な意見を言えば、OK。肯定的な意見を言えば、アウト。当たり障りのない意見も、おそらくアウトだ。

「食事には……………」

スペースに彼が戻ってくる。

「おかえりなさい」

七海と星野と声が偶然重なる。二人は顔を見合わせると、楽しそうに笑った。

「た、ただいま」

彼はあきらかに戸惑っていた。無理もない。さっきまであまり目を合わせようとしなかった二人が帰ってきた瞬間ニコニコと笑ったのだから。

「それじゃ、今度は七海ちゃんの番だね」

「……………順番的に、次は星野が見てまわる番じゃないのか」

「そうですね。七海ちゃんの番ってというのはこっこの話なので、守

屋さんはあまり気にしないでください」

おそらく彼女は「攻撃する順番」を言ったのだろう。待つだけの段階はさっきの話し合いで終わっていた。

「たぶん、終了時間までまわってると思います。それじゃ」

(……あ)

星野は彼が椅子に座るのも待たず、行ってしまふ。

結局何度聞いても彼女は「ナイショ」と答えるだけで、さっき一人でなにを決めたのか、最後まで教えてはくれなかった。

(ま、いつか)

いったい彼女はなにを決意したのか、気になるといえば気になる。しかし今はそれよりも、彼をどう攻めるかのほうが重要だ。

七海はまず席を移動する。これは攻撃というよりは防御だった。

細かいことだったが、星野のぬくもりが残る椅子にはあまり座って欲しくない。

どうでもいいのかそれとも気付いていないのか、彼はなにこともなかったかのように七海が座っていた椅子に腰を下ろす。

(さて……)

七海はまず適当な話題を振ってみる。会話は好感度を上げる基本だ。

「小説、売れましたよ」

「そうだな。まあ、長く創作を続けていれば六冊くらいは売れて普通だろ」

「いやいや凄いですよ。隣のろんりーきゃつとさんなんてまだ三冊なのに、倍じゃないですか」

「隣は初参加だろ。そうじゃなかったとしても、別に売れた冊数がすべてじゃない」

軽く睨まれてしまふ。別に隣のサークルを貶すつもりはなかったのだが、いきなり選択肢を間違えてしまった。

「ごめんなさい」

ここで終わるわけにはいかない。七海はすぐに次の話題を探す。

「どんなの買ったか見てもいいですか？」

「別にかまわないが」

彼からトートバッグを受け取り、中を見る。

「少なっ」

中には本が三冊しか入ってなかった。持って行った小説は全部配り終わったようだ。

「マンガはよさそうなところを店長が買っておいでくれるしな。小説は自分で買うしかないが……今回は巡り合わせが悪かった」

「これはマンガですよね」

三冊のうち一冊は店で見慣れたB5サイズだった。小説と思われ二冊は両方とも分厚い。三 ページは軽く超えていそつだ。

「それは鈴木の本の書いたマンガだ」

彼は視線をそらし、眉間に消えかけていたシワを再び刻み込む。

よく分からないが、この話題も失敗だったかもしれない。

「……今度、二人で食事にも行かないか」

「えっ？」

七海から視線をそらしたまま、彼は続ける。

「鈴木が会社の同僚にそう言われたらしい」

「あの……えつと……」

話題が突然ガラリと変わったことで七海は少し混乱する。

「さっき鈴木と本を交換したときに相談されたんだよ。どう答えるべきかってな」

「……どうして？」

「どうしてだと思っ？」

七海は考えてみる。わざわざ食事に誘われたことを好きな人に相談する意味を。

(……そっか)

落ち着いて考えれば、自然と一つの答えが頭に浮かんできた。同時に、心臓の鼓動がほんの少しだけ早くなる。

「雄介さんに『食事の誘いは断れ』って言って欲しかったんじゃない

いですかね」

鈴木は彼に告白し、選択を迫った。超絶遠回しではあるが、たぶん間違つてはいないはずだ。

「やっぱり、お前もそう思うか」

彼は口だけで笑う。

「なんで私にそんな話を？」

「俺の勘違いかどうか確かめただけだ。気にするな」

それは無理な相談だ。ここまで聞かされたら、最後まで教えてもらわないと困る。

「雄介さんは……なんて答えたんですか」

指が震える。鈴木 of 告白は例えるならBFBC2のオンライン対戦で突然スナイパーに撃たれるようなものだった。運が悪ければ、死ぬ。できることは二発目が当たらないことを祈って遮蔽物に向かつて走るだけ。

「いたずらにキープするつもりはない。俺もそこまでクズじゃないつもりだ」

答えは神に祈る暇もないくらいにあっさりと返ってきた。

（よかった……）

七海はホッと胸をなでおろす。

彼は鈴木 of 告白を受け入れなかった。ただ、もしかしたら死んでたかもしれないことを思うと、なかなか指の震えが止まってくれない。

（とりあえずお茶でも飲んで落ち着こう）

水筒のお茶は好きに飲んでかまわない。そう星野は言ってくれていた。

七海はカップをテーブルに置き、そこにお茶を注ぐ。次にカップを持ち上げ

「あ」

おそらく気が緩んだのだろう。まったく反応もできなかった。

お茶の入ったカップは七海 of 指から逃げ出すと、小説の上に落ち

て中身をすべてぶちまけた。

瞬間、七海の心と体が凍りつく。

彼の対応は早かった。右手で壁を作り、左袖をタオルのようにして零れた水分を吸い取る。服を濡らすことにためらう様子は一切ない。

「すみません、被害はありませんか？」

袖で一通りテーブルを拭き終わると、彼が言う。

「あ、はい。大丈夫です」

幸い、彼の迅速な対応とテーブルにかけた布のおかげで隣のサークルまで被害が及ぶことはなかった。

（わ、私も謝らないと）

ようやく硬直が解け、まず七海が思ったのはそれだった。

「……………」

謝りたい。なのに声が出ない。

早く早くと焦るほど、唇は震え、余計に声が出なくなる。

怒るわけでも優しく微笑むでもなく、彼は今日の献立でも話すような調子で言う。

「気にするな。ミスは誰にでもある。被害も小さい」

彼がそう言っても七海の心が落ち着くことはない。どうしたって気にしてしまう。これほど簡単に許してくれるなんて信じられない。被害は大きい。新刊既刊合わせて八冊も濡れてしまった。中にどんな物語が書かれているか知らない。が、彼がこれらを完成させるのにどれほど悩み、苦しみ、頑張ったのかわから知っている。

気付けば、頬が涙で濡れていた。

「泣くな」

七海は手の甲で涙を拭く。しかし拭いても拭いても次々と涙が溢れ出してくる。

（早く止めないとー！）

泣き続けるほど嫌われる。そう頭では理解しているのに、一度流れ出した涙を止めるのは簡単なことではなかった。

(……え?)

不意に後頭部を掴まれ、グツと胸に抱き寄せられる。驚きで七海の涙が止まる。しかし、それも一瞬だけ。

彼の胸に抱かれていいる喜び。どんな表情、気持ちで抱いてくれているのか分からない不安。それ以外にも色々な感情が混ざり合い、涙と共に流れ出していく。

そして涙が枯れる頃には、頭の中は彼を好きだという気持ちだけが残った。

(やっぱり、雄介さんは優しいな……)

できればずっとこうしていたいと思う。

「雄介さん」

七海は顔を彼の胸に埋めたまま、言う。

「私、雄介さんのことが好きです」

タイミングだとか順番だとか、そんなものはなにも考えていない。ただ、七海はどうしても言いたくなってしまうた。だから言った。

「……………」

しばらく待っても、彼はなにも答えてはくれなかった。

いや

彼の手が頭から離れる。しかし体を引き剥がそうとはしない。

自分は決めた。星野も決めた。彼はまだ迷っている。右か左か中央か。そもそも進むべきか、このまま留まり続けるべきか。

本当は悩んでなんか欲しくない。ずっと自分だけを見ていて欲しい。拒絶されるよりはマシだけど、保留されるのだって悲しい。

でも、我慢する。今日の七海は、彼に今すぐ決断を迫るほどの勇氣は持っていないかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4110y/>

レインボーガール

2011年12月26日23時50分発行